

堀與一右衛門せがれ  
堀 鉄八郎

右與一右衛門儀、越中五ヶ山之内の流刑就被仰付候、父依罪鉄八郎儀能州嶋之内の流刑被仰付候旨被仰出候條、此段可被申渡候。

但、配所の被遣候迄之内、一類共の御預被成候條、急度縮仕置候様一類共の可被申渡候。尤一類共交名可被申聞候事。

壬午十月九日

〔文化より弘化まで日記〕

文政五年十月十八日閉門被仰付人々御馬廻組馬淵長太夫五百石。後斷絶。堀爲平四百五十石。少。片岡左膳二百石。平松庸之助二百石。小篠善四郎百五十石。三原順左衛門百五十石。奥村喜兵衛百五十石。定番御馬廻岡山森江三百石。十福田余所助百石。十河合得馬百石。篠田余太夫百石。矢部七郎兵衛百三十石。今村宇兵衛百三十石。長屋仙次郎百石。御異風分部十左衛門百八十石。今村吉平百五十石。與力石原伊太郎・植松七兵衛二百石。徳田仙助・服部新左衛門・坂井松三郎・生熊與三兵衛・永井助進・澤崎元右衛門二百石。中村和作・杉野覺左衛門・豊島平三郎・定番御歩小石彌八郎・御細工者金子武右衛門せがれ金子甚左衛門。親武右衛門。急度御預。御馬廻組頭一色源右衛門。千五百石。堀與一右衛門。二百石。此人。感。定番御歩大脇六右衛門。能州島之内。御弓師岡源左衛門。御

十八日は八日の誤

醫師大石三益一類の急度御預。

其後茂追々御咎有之、町人等茂大勢御咎被仰付。

十月十三日。金澤に於いて諸士に前田齊泰元服任官のことを告ぐ。

〔横山氏日記〕

十月十二日

一、左之通紙面江戸表より到來に付、於表方席各致披見、相濟掃部儀呼立有之、披見いたし候事。

猶以其趣伊豫守殿等、并若年寄中にも御傳達可被成候、以上。

又左衛門様御元服被仰付候條、今四日御登城可被成旨、御老中方御連名之御奉書、昨日又左衛門様の御到來。且亦右に付中將様より御名代を以御禮被仰上候様、御用番青山下野守殿の聞番御呼立御書付御渡に付、御名代淡路守様御動之儀、先日之通聞番御使相動申候。今朝六時過淡路守様被爲入、又左衛門様御同道御登城被成候處、於御黒書院御目見被仰上、御一字御頂戴、被任少將、御名茂若狭守様と御改、御懇之被爲蒙上意、御盃・御肴御頂戴、御腰物御拜領被遊。中將様にも御名代淡路守様を以御禮被仰上、重疊難有御仕合被思召候。此段被仰聞候。詰合頭分以上の甲斐守より可申聞置候。追而一統從中將様被仰聞候咎之旨、拙者ど

も御前に被召出、御意御座候に付、則頭分以上に申聞候。此段被達御聽、直姫様初御申上可被成候。先以段々結構成御様子、恐悦御同意御座候。且又於殿中之御作法書拜見被仰付候付、寫一紙爲御承知指進申候。御次よりも御用有之、旁早飛脚申渡、右之趣申進候、以上。

甲斐守  
修理

土佐守等十人様

〔横山氏日記〕

十月十三日

一、四半時過御大廣間に年寄中、御家老中罷出、左之通御弘之趣、頭分以上之人々に月番求馬申聞有之候事。  
當四日又左衛門様御登城、於御黒書院御目見、御元服被仰付、御一字御拜領、被任少將、御名茂若狭守様と御改、御懇之被爲蒙上意、御盃・御肴御頂戴、御腰物御拜領被遊。中將様にも御名代淡路守様を以御禮被仰上、難有思召候。此段何茂へ可申聞旨被仰出。御實名齊秦様と被稱候事。

十月十三日。前田齊秦の諱に觸るゝものに改名すべきことを命ず。

〔官私隨筆〕

別紙寫之通定番頭へ申渡候付、爲御承知進之候條、御組等へ茂御觸可被成候、以上。

十月十三日

横山 求馬

奥村伊豫守様

定番頭に

若狭守様御名乗御一字御拜領、齊秦様と奉稱候。御家中之人々實名同字有之候者、相改可申候。文字は違候而も、唱同事に候者唱替可申事。

壬午十月

十月十四日。前田權佐の家老を罷めしむ。

〔金龍公記史料〕

九月廿九日有旨返權佐于國。

〔官私隨筆〕

十月十四日

一、前田權佐殿江戸詰中候處、早速罷歸候様被仰出、昨日歸着之處、不應思召趣有之、役儀被指除、遠慮被仰付段、組頭於豊後守殿宅今日申渡由承之。

〔横山氏日記〕

十月十四日

一、權佐儀思召有之に付本役・兼役とも被指除候段、組頭豊後守於宅申渡有之候段月番演述に付、支配之人々々夫々爲承知申聞候事。諸向之承知は月番より御横目申渡有之由。

〔金龍公記史料〕

十月十四日罷前田權佐恒固家老。以在江戸邸外有不徳之行也。處遠慮。

十月二十日。前田齊廣蓮池上の御殿に移轉の日を以て家老等に物を献るべきことを告ぐ。

〔御獻上方留帳〕

今般新御殿御造營御出來に付、御肴一種充、外に御屏風一双充御献上に候。依而右御殿竹澤御殿与奉唱、十二月十六日に中將様御引移被爲在候節、御同所之表向以使者御献上に付御廻狀、并御屏風御繪等左之通。繪略。

御居住所之御引移之上、何茂より御祝詞献上物之儀相窺候處、御肴一種充献上可有之、且又御用立候品茂窺之通可指上旨被仰出候條、左様御承知可被成候。就夫御用立候品物之儀、大地縫殿左衛門等及示談候處、御屏風品數御用に候間何茂より御屏風一双充献上仕可然候。

則其段申上置候旨申聞候。依之出來方之儀猶又遂示談、別紙之通に候條、是又左様御承知可被成候、以上。

十月二十日

前田土佐守

津田内藏助様

横山藏人様

前田中務様

前田掃部様

追而織江殿・修理殿・内記殿・市三郎殿も本文之通献上に候間、左様御承知、夫々御申遣候様に奉存候、以上。

十月廿三日。諸士に先祖由緒一類附帳を提出すべきことを命ず。

〔官私隨筆〕

別紙寫之通定番頭之

以上。

十月二十三日

横山求馬

奥村伊豫守様

定番頭之

加賀藩史料 第十三編 文政五年

年寄中席へ、御家中之人々先祖由緒一類附帳、先達而指出置候處、年月を經候間、此度増減等相改、當十二月中迄に可指出候。帳面口張等に不及候。本組與力且御歩等之内、御知行被下候人々之分も、最前之通可差出候。當時舊宅并御咎被仰付置候人々者、代判人より可指出候事。

右之趣組・支配有之面々へ可被申談候事。

十月 月

十月廿三日。前田齊廣先に多數の士を處罰したる理由を發表す。

〔御親翰帳之内書抜〕

十月廿三日

寺社奉行等・定番頭等

家中之人々不心得之者共、今般人多に咎申付候儀、甚不便之事に而難忍存候得共、右之人々其品顯し不申候得共、實は博奕之趣も相聞候。不及申事ながら、右は何茂承知之通、於公邊嚴重之御制禁に候處、右之風俗家中に多相成候而は、奉對公邊候而も恐入候次第に付、乍心外今般は人多に咎申付候事に候。是迄も壹兩人右博奕之躰相聞候得共、加不便其品顯不申咎申附候事に候得ば、其所を存付別而人々相慎可申處、却而致增長候族不届之事に候。其上下

本年十月八日の條參照

に而人多にも咎も難申付ものなど、致推察候而、彌黨を多く引入候様に相成候而は、次第に不埒之者多く相成、後には家中一躰に相成候而は、彌難手指相成候條、以後は頭々其心得に而、人多に相成不申内、不心得之者は可及言上候。可相成丈けは致異見、教諭を加へ、其上にも相嗜み不申者は速に可達聽候。暫と相扣罷在候内、いつしか人多に相成り候事に候間、一殺多生之理を存付、以後は一人に而も見出次第可及言上候。頭々も忍兼候而、先々相扣罷在候内に人多に相成候而は、却而不仁に相成り、一人に而も見出次第嚴重に申付候儀は、却而仁恵に候之條、其所能々存辨、油斷無之組・支配之人々を可致世話候。是等之趣申聞度、側近く呼爲申聞候條、急度致會得、右等之趣相心得可申事。

別紙之趣爲申聞候に付而は、何れも定而毎度達聽度儀可有之候。然共此方多用中面倒にも可有之哉と、其處を恐れ相扣候様成心得之者も可有之と存候。其儀は聊相厭申聞敷候。追々世話も行届、少しに而も士風宜相成候へば、此上之大慶は無之事に候間、於此方は何程事多に相成候共、聊面倒に存候筋は無之候條、此段も爲心得申聞置候。

十月廿三日。前田齊廣、先に閉門を命ぜられたる者と嚴に交通することなかるべきを命ず。

〔御親翰帳之内書抜〕

加賀藩史料 第十三編 文政五年

十月廿三日

一、左之御親翰縫殿左衛門を以被渡下、何も爲承知拜見被仰付置候旨被仰出由演述之事。寺社奉行等・定番頭等

家中之人々各申付候上、懇意之人之通路等之儀、以前とは何となくゆるかせに相成候様にも相聞候。其上心得違之人々は、格別懇意之者に、各中にもひそかに罷越候様なる趣粗相聞候。たとひ軽く差扣申付候者たり共、上より各申付候者に候得ば、如何程懇意たりとも、ひそかに罷越語り合等は相憚り可申儀に候處、左様之處存附薄き人々も有之哉に相聞候條、右等之趣も人々相心得可申、組・支配等之人々も、右様之儀ゆるかせに相心得不申様常々致教諭可申事。

十月 月

十月廿四日。浦方の者にあらざるも渡海船を所有し得べきことを告ぐ。

〔御郡典〕

御領國中於諸浦、船稼之儀相勵、渡海船多致所持候得ば、商方手續に而、船持は勿論、出津・入津共多く、輕き者迄も潤、所方繁榮之基に候處、諸浦に相成、往々小船多候而大船・中船之分數少く候。右は元來浦方之外は渡海船致所持候儀難相成候と聞得候に付、此度詮議之

相成本の儘

上、向後何方之者に而も渡海船所持之儀指解候條、此段一統に可被申渡候。尤御領國中は何れ之浦に而船致所持候とも、人々可爲勝手次第候。然上は以後他國之名代を立、船致所持候者於有之には、吟味之上船并往來札取揚、被雇候船頭・水主共急度可申付候。依之以來金澤町を始、遠所・町在共渡海船致所持候者は、何れ之浦に而も名代相立、譬ば船主住居金澤町、或は何郡何村何方浦何屋誰、名代何浦何屋誰と相認、船往來札指出候ヶ所之町奉行等に可願出候。勿論船方に付候儀は、其浦居住之船持之通相心得、船往來札出候町奉行等申渡候趣致違背間敷候。自然是迄他國者名前に而密々船致所持候者有之候はゞ、何れ之者に而も右之通速に相改、地船之内に加り、御用等全可相勤候。則所々往來札指出候町奉行等、相願候節之名書、并船往來札調方、別紙草案之通に候。右之通遂詮議、御用番年寄中相達候處被承届、夫々可申渡旨に候條、被得其意、御自分支配所一統可被申渡候。且亦是迄地舟銘々乗組人數、他國船手は人少に付、難風之節働方不行届躰に相聞得、人命にも拘り候儀。殊に積高に應じ人數定も有之候處、無謂相減じ、或は便船之趣に書出、年分爲致乗船候者も有之躰、甚不埒之儀に候間、以後人數不相減、渡海丈夫に爲致候様、船主共嚴重可被申渡候、以上。

壬午十月廿四日

御算用場

御郡奉行中

野村隼人殿

十月廿五日。先に命ぜられたる風俗に關する制限を恪守すべきことを告ぐ。

〔官私隨筆〕

別紙之通一統申渡候に付——御組等も——以上。

十月二十五日

横山求馬

奥村伊豫守殿

去々年風俗等之儀に付段々被仰出候御趣意通り、一統申渡候通に候處、是迄も度々風俗等之儀被仰出有之候へども、其所へ至不申候處、去々年被仰出に付而は會得有之人々も有之躰。併御主意通之被仰渡方、一端之様に相心得候者も多有之躰。中には心得違之人々も有之候へば、不被得止事被加嚴制候所へも至り申儀。左候而は是迄分而被仰出候御主意も相立不申、誠難被爲忍御儀と奉恐察候。前段被仰出候御主意通、一統日夜無違失心意に存込、相守可申儀肝要に候。拙者共へ毎度被仰出有之候付、改而此段申渡候事。右之趣被得其意——事。

文政三年九月晦日の條  
参照

午 十月

横山求馬

十月廿六日。武學校に出席するもの少きを以て之が督促を命ず。

〔官私隨筆〕

別紙寫之通一統申談候様、學校頭へ申渡候付、爲御承知進之候、以上。

十月二十六日

前田土佐守

奥村伊豫守殿

學校頭

武藝心懸之儀に付、舊臘被仰出之趣有之、當春頃者格別武學校出座人茂多有之内、兩學校御移替に付餘程稽古被指止置、夫々稽古方自由に相成候様被仰付候上は、一入出座人も多可有之處、却而春よりは相減、師範人宅に出座も薄躰に相聞え、加様に有之候而は、一旦騒立候様に入情いたし、又怠りもはやき事に而、御心外に被思召候与、舊臘被仰出置候御趣意に可相當人々可有之、一々御聞札有之上、諸藝之事に候へば、一方は怠り候共、又一方入情いたし罷在候人々は、道理可相分候へども、無謂怠り申譯難立人々有之候而は、右御心外被仰出置候御趣意を以、如何思召被爲在候茂難計候。既に有祿之人々等不心得之趣有之、大勢御答被仰付候儀は、一統承知之通候。無息之人々、或は年若成有祿之人々成立惡敷、畢竟侍之本

意を取失候而は、先祖へ之不幸、本より御國民を大切に被思召候御趣意を以、兩學校も被建置候へ者、其御趣意を不相守ては、忠孝忘却之基とも可申哉。近く出座人も薄く相成候付、何等被仰出無之以前、人々心得に右等之趣各へ申聞候條、被得其意、一統可被申談候事。

午 十 月

十月廿七日。前田齊廣將に隱居を請はんとする内意を老臣に告ぐ。

〔藤懸頼善手記〕

十月廿七日

一、中將様御儀御持病之御疝邪、其上御氣塞之御症に而御難儀被爲成、追々御願御在國被遂御療養候得共、御快氣之期も無御座、依之御隱居被遊、若狹守様御家督御相續被仰付候様、來月中旬頃御願可被遊思召御座候。此段以御使者御内證被仰進候段、御口上神戸嘉平を以申上候之處、同人を以應じ御返答被仰出候。

十月廿七日。二朱判及び眞鍮錢の通用を圓滑にすべきことを告ぐ。

〔官私隨筆〕

二朱判通用方之儀に付、安永元年・同二年從公儀相渡候御書付之趣、一統相觸置候通に候所、今以取扱不申向も有之由相聞え、以來は御貸渡并上納方等、無泥取扱候様、於御勝手方々

申渡候條、彌無指支可致通用候。

一、眞鍮錢一文に而並錢四文代に通用方之儀も、明和五年從公儀相渡候御書付之趣一統相觸、暨吹増被仰付候趣等、當春相觸候通候條、是又同様可致通用候。

右之通被得其意、組・支配之人々へ可被申渡候。

右之趣可被得其意候、以上。

十月二十七日

村井豐後守

〔留帳拔書〕

付札、御算用場奉行

於小拂所貳朱銀并四文錢是迄取扱不申由に付、以來者取扱可然趣各遂詮議候所、是迄御算用場において貳朱銀之儀は上納方取扱來候得共、箇所に寄取扱不申向も有之、不相當儀に候間、以來右兩品共御貸渡米上納方へ入取扱候様、諸向被申渡可然旨詮議之趣被申聞候。依之右詮議之通一統不差支様申渡候條、可被得其意、且又兩品とも御用之儀稀に候間、小拂所御貯用方之儀は、各示合候様申渡候間、程能可被相計候事。

壬午 十月

右紙面之趣、御算用場より申談候に付、寫相越之候條得其意、夫々可申渡置候、以上。

午十一月五日

羽咋・鹿島郡惣年寄中・年寄並申

十月廿八日。保田安左衛門等不行狀を以て流刑に處せらる。

〔横山氏日記〕

十月廿八日

進士源兵衛・竹田彦六郎

保田安左衛門

同人弟 七郎

右兩人共慎中甚不屈至極之儀有之に付、兩人共越中五ヶ山之内流刑被仰付候旨被仰出候條、此段可被申渡候。

但、配所被遣候迄之内一類共御預被成候條、急度縮仕置候様一類共可被申渡候。尤一類共交名可被申聞候事。

壬午十月廿八日

十月。前田齊廣、頭役たる者の心得を論す。

〔御親翰寫〕

本年十月廿三日の條參照

馬廻頭・小將頭

今般人多に咎申付候事に付、此間中何れも相招心得申聞候に付、其方共より申聞候趣に付、此間藏人を以申聞候口述書之通に候。依之猶主意之趣共左に申聞候。

一、是迄頭々之心得之様子相考候處、組等之内不心得不行狀有之候とも、先づは不達聽、何分にも加異見、其上不嗜者も有之候而も、達聽候事を甚相厭、可成丈けは口を閉居候事与存候。其子細者、組等之内不心得不行狀等之儀、少しに而も達聽候得者、速かにも咎申付候もの、様に恐れ、且は右様之儀達聽候は、其頭も不仁之様に覺え候より、段々与達聽候事を相扣候内、君臣之間隔り言路塞り、夫より自然と不宜儀致增長候事に候。一旦相厭、達聽候事を扣罷在候は、仁愛に相違は無之候得共、却而惣様之仁恵には不相成、惣躰之仁恵に不相成候得ば、則國政之仁恵に不相成候。依之偏に君臣之間隔り不申、言路相開き、萬端小惡之内に相正し不申而者、主意通り士風も相改不申事に候。依之以後は頭々得与相心得、組等之内不行狀不心得、或不正不義不作法、何事に不依不宜風評承り候は、たしかに承り候事は差付加異見可申、たしか不成儀承り差付難申儀は、直に達聽可申。左候へば此方に而承れ、其趣を委細其頭之内分可申聞候間、夫を以加異見可申、異見及四五度不改者は、又々速に可達聽候。たとへ頭々より、組等之内不心得等之儀達聽候とて、容易に咎申付候譯に而も無之、



重々加憐愍候て、無是非次第に至り不申而者、重き咎等は不申付事に候間、左様之所無泥、風評たりとも見聞次第可達聽、ケ様に細かに世話行届不申而者、追々風俗立直り、見事之士風に至り申所ぬ者至り不申候。是迄之所は、頭々より組之人々之儀に付、人別封じ物を以申越候様成儀は至て稀に而、夫も多分指定り候分迄に而、不時に心を用ひ申越候様成事は一圓無之候。何程何れも下ぬは致世話候とも、此方ぬは致世話哉、致世話不申哉一向相知れ不申、常々無心許存る事に候。以後は何れも心を用ひ、前段に調候趣を、人々器量次第毎度可申越候。左候へ者頭々之心得も此方ぬ相知れ、人々出情之便りにも可相成候條、以後右之通り取りつくりひなく、有躰之所を人々見聞次第可達聽候。是等之趣其方兩役ぬ申聞外、相招不申聞候間、其方共より諸頭其外支配有之、申聞候而も可然人々ぬは、得与可致演述候。主意相違無之様、克々會得之參り安き様其方共申解き、中には才知も薄く、會得も急に難致人々も相見え候間、得与此書面に其方共註解を添へ、深く會得成り安き様に可申談候。尤不申聞候とも、何れも是程之儀は會得之事に可有之候得共、於此方家中士列は不及申、國民子之如く存る事候得ば、今般之様に嚴重人多に咎申付候。妻子之なげき、一族之かなしみ、察入候而者寢食も不安不便之儀に存候得共、禮を尊み義を重くし、不正をいましめ正敷を賞する國政之第一に候得者、此方一己之愛情には不替る儀故、加嚴令候事に候得ば、加様に此方も存罷在

候儀を存付、人々組・支配之儀成立致世話可申候。今般咎之内にも、咎中不心得之者などは誠驚入事共に而、ケ様に恥を忘れ不法不埒出來之儀、實になげかしき事に候。只々人々心中より侍に不似合所行は恥入候様に成り、義を重んじ禮を専らと相心得、正敷を専らと致候様に相互に相成候はゞ、自然と不輕事正敷に至り可申候。頭々も只理不盡に押へ付、惡事を爲致不申様にては、却而陰惡致増長候道理に候間、かりそめの教諭方も、心中より恥を知り候處ぬ至り候様に致辯解相示し候はゞ、自然に宜に可至候條、是等之所得与其方共より諸頭等へ可申談候。

十月

十月。寺庵の勸化に隨ひ身分不相應の寄進を行ふべからざることを令す。

〔御郡典〕

付札、惣年寄ぬ

寺庵勸化之儀に付、前々被仰渡之趣も有之、心得違無之様申渡置候處、近來身分不相應之寄附いたし候者も有之、別而一向宗寺庵は寺格昇進之儀甚多、專勸化を以父祖を越昇進之寺庵も有之躰。暨始祖等遠忌執行等之節は、本堂或は門等修覆或は建直し等、彼是門徒之費不少躰。中には門徒之内前々申渡置候趣會得いたし罷在候者も有之候得共、旦那寺より無餘儀相

勸め候得ば、無味に斷候儀も致兼候族も有之躰相聞得候。百姓手前衰候得ば、第一御收納に拘り、不容易儀申迄も無之候條、以後聊心得違無之様、急度可申渡候。如此申渡候上、心得違之族於承及には、無用捨嚴重遂穿鑿咎可申付候。此段末々迄不相洩様、綿密可申渡候事。

午 十 月

御 郡 奉 行

能州羽咋・鹿島兩御郡村々役人

十月。能登に於いて祭禮に際し踊・物真似を催す者あるを戒む。

〔留帳抜書〕

附札、惣年寄等々

能州奥・口とも町立之箇所等、家數相應に有之所は、神事祭禮等を申立、子共踊等相催、中には松任・富山等より右様之所業之者を呼寄、子供等に爲習申様之族有之躰に候。於御郡方右様かぶき惣而御停止之儀、何れも承知之事に候處、不届至極之儀に候。祭禮等之時分、在方相應之賑之儀は格別、右様之踊・物真似等一圓相催間鋪、此上にも心得違之族於有之者、嚴重に相糺、急度咎可申付候。此段村中一統申談、以來右様之儀相慎、質素之風俗肝要に心得可申者也。

壬 午 十 月

御 郡 奉 行

能州四郡村々役人々

十一月四日。磔刑に處せらるゝ者の子を斬するの法を改む。

〔金龍公記史料〕

十一月四日。除受磔以上刑者子處斬律。先是有被磔以上刑者。其子不問幼壯一切斬之。太梁公屢議欲除此律。老臣及獄官長曰。祖宗之法不得革。固執不聽。公繼太梁公之志。亦欲除之久矣。至是斷然下諭曰。國初所定受磔以上刑者子一切處斬之法。儼服一時之權道。非所以治浴至治之澤民。記曰悼與耄有罪不加刑。況至以親罪施刑無知之幼稚。甚無謂也。今後不問年長幼。一切除此律。

〔永井不陳覺書〕

一、自今已後親之科輕重に無御構、足輕以上名字を持候者死刑に被仰付候はゞ、其者之せがれ男子之分は殺害可被仰付候。乍然せがれ・孫共に大勢有之者之儀は、到其時親手前被仰付品可有之旨被仰出候由、寛文五年公事場帳に有之。

右之通に候處、文政五年從金龍院様被仰出之趣有之、身柄之者父死刑之せがれは流刑、父流刑之せがれは無御貪着預御免之事に被仰渡、公事場帳に有之。

十一月六日。御歩横目石黒門馬等町方の饗應を受け、且つ茶屋町に遊ぶ

を以て蟄居を命ぜらる。

〔横山氏日記〕

十一月六日

一、左之通表方に而申渡有之。

里見七左衛門

御膳所御歩横目 石黒門馬

右門馬儀、御膳所御料理人共伴ひ、於町方預振舞、其上直に茶屋町へも罷越候段相聞え、役儀も有之儀、御縮方第一に候處、不届至極之心得沙汰之限りに付、急度可被仰付處、其儀御用捨、役儀被指除、蟄居被仰付候旨被仰出候條、此段可被申渡候事。

午十一月六日

山口左次馬

御膳所御歩横目 杉本瀬左衛門

右同斷。

十一月六日。奥村伊豫守その臣河毛次郎兵衛の處罰を命ぜられたるも該當の者なきことを上申す。

〔官私隨筆〕

伊豫守殿

御家來河毛久太夫せがれ 河毛次郎兵衛

右次郎兵衛儀不埒至極之趣相聞、御家中之風俗之妨にも相成候條、主人了簡次第急度答可申付旨被仰出候條、可被得其意候事。

午十一月六日

私家來河毛久太夫せがれ次郎兵衛儀に付、被仰出之趣御覺書之通委曲奉畏、先以於私迷惑之至奉存候。然處久太夫せがれ共之内次郎兵衛と申者無御座、嫡子者五郎兵衛与申候而私召仕申候。二男孫兵衛者當時岡田十郎兵衛家來に御座候。四男彌八郎儀は當時久太夫手前に罷在申候。依而猶又久太夫へも相尋候處、次郎兵衛と申者は無御座候。若孫兵衛儀改名茂仕候哉。併左様之儀も承不申旨申聞候。右之通に御座候條、如何相心得可申候哉、御指圖可被下候。五郎兵衛儀先爲指扣、彌八郎儀は不縮無之様親久太夫へ申渡置候、以上。

十一月六日

御家來河毛久太夫せがれ次郎兵衛儀に付被仰出之趣、當六日覺書を以申達候處、右せがれ共之内次郎兵衛と申者無之に付、嫡子五郎兵衛先指扣、四男彌八郎不縮無之様御申渡置、二男

孫兵衛儀は當時岡田十郎兵衛家來之由等、御紙面等之趣致承知、則其段相達御聽置候所、次郎兵衛と被仰出候は右孫兵衛之事に而、今日於盜賊改方入牢被仰付候。五郎兵衛等は御貪着無之候條、御指宥可被成候、以上。

十一月十三日

村井豊後守

奥村伊豫守様

十一月八日。前田齊泰五節句及び月次の登營を許さる。

〔御年表〕

本文は前田齊泰の事に係る

十一月七日、向後五節句并月次御禮御登城之儀、御願書被差出候處、同八日御用番水野出羽守殿より、以御付札御願之通被仰渡。

十一月八日。前田齊廣の退隱したる後に在りては前田土佐守を以て專屬の老臣とすべきことを告ぐ。

〔官私隨筆〕

兼而被仰聞置候通り、近々御退隱御願書被差出候。御願之通被仰出候上は、土佐守殿御身附之儀今日被仰渡候。依之月番并學校方御用者御免除被成候旨、今日同人へ被仰渡候。此段御

土佐守は前田直時

内々爲御承知申進候、以上。

十一月八日

十一月十日。前田齊泰本郷邸に能を演ず。

〔諸事覺書〕

十一月十日

一、今日御能有之付、各五時頃出席、同刻過御能初拜見に罷出。

御番組

雨	月	彌一郎	通	盛	淡路守様	龍	田	若狭守様
藤	戸	出雲守様	歌	占	往來	土	蜘蛛	若狭守様
昭	君	寶生大夫	附	祝言				
水懸聲	飛	越	武	惡	蝸	牛	右	近左近

一、御能六半時頃相濟、何茂御附頭を以御禮。

但、織江儀風氣に而御中入に而御禮申上退出之事。

十一月十三日。徳川家齊放鷹によつて得たる雁を前田齊泰に贈る。

〔諸事覺書〕

十一月十三日

一、八時過御城下り之附人來に付、甲斐守等三人服紗上下御式臺へ出懸罷在候處、本郷三丁目之附人來、御門外へ罷出、御拜領之雁持來、御作法書之通無程上使御使番伊藤監物殿御越、若狹守様御式臺鏡板へ御出迎、御先立大書院へ御着座、上意御拜聽、雁御頂戴。御盃事は御斷、御取持衆之内米田平太郎殿御相伴に而御菓子等出之。夫々相濟、御請被仰述、御退出之節最前之通之事。

一、今日以上使初而御鷹之雁御拜領被遊候恐悅、御附頭を以申上候事。

一、中將様々今日之日附に而紙面を以御祝詞申上候事。

一、上使御退出之上、追付之御供揃に而御出、御老中方等御勤之事。

〔官私隨筆〕

去十三日若狹守様へ上使御使番伊藤監物殿を以、御鷹之雁初而御拜領被遊候段、同十四日出町飛脚早飛脚に傳附、甲斐守殿等より昨夜申來候。且又御同所様向後五節句并月次御禮御登城之儀御願書、去七日被指出候處、同八日御願通被仰出候付、同十五日初而御登城、御首尾能御禮被仰上候段、同十六日不時立町飛脚早飛脚步に傳附、甲斐守殿等より只今申來候。先

以恐悅御同意御座候。右に付各明日中將様へ右兩様之御祝詞申上候筈に御座候間、御自分様にも御登城御申上可被成候。若御當病等に而御出難被成候は、以御紙面御申上可被成候。若狹守様へも明日之日附に而、同日出町飛脚に傳附、以紙面御祝詞申上候筈に御座候。御前様初へは御祝詞不申上候。此段爲御承知申進候、以上。

十一月廿三日

村井又兵衛

奥村伊豫守様

十一月十五日。前田齊廣の隱棲許可せられたる時は蓮池上の御殿に移り之を竹澤御殿と稱すべきことを告ぐ。

〔文政五年見聞志〕

十一月十五日

付札、御横目

御隱居御家督之儀、兼而之思召立に被爲在候處、此節御願書可被指出御内意に而被仰出候。一、右御願通被仰出候上者、中將様無程蓮池上之御居住所へ御引移被遊思召に候。右御居住所之儀、以來者竹澤御殿与奉唱候様被仰出候。右之趣諸役人に寄々可被申談候事。

十一月

十一月十五日。前田齊泰初めて月並の登營を行ふ。

〔温敬公記史料〕

十一月十五日。始參月次式日。

〔諸事覺書〕

十一月十五日

一、今朝若狹守様御登城に付、各六半時前出席。御出之節中之口御式臺へ罷出、御式臺内より左之方に列座。御出相濟各退出、重而例刻出席。

但、頭分以上為之間入口御廊下へ列座。

十一月十五日。江戸に於いて諸士に風俗等に關する前田齊廣の諭旨を告ぐ。

〔諸事覺書〕

十一月十五日

一、去々年風俗等之儀に付一統被仰出候趣、組頭を初此度重而申渡有之候付、此表に而も可申渡旨、月番より申來候付、左之通寫相渡。

寫

去々年風俗等之儀に付段々被仰出候御主意通り、一統申渡候通に候所、是迄も度々風俗等之儀被仰出有之候へ共、其所へ至り不申候處、去々年被仰出候に付而は會得有之人々も有之躰。併御主意通之被仰渡方、一端之様に相心得候者も多有之躰。中には心得違之人々も有之候得ば、不被得止事被加嚴制候所へも至申儀。左候而は是迄分而被仰出候御主意も相立不申、誠難被爲忍御儀与奉恐察候。前段被仰出候御主意を、一統日夜無違失心意に存込相守可申儀肝要に候。拙者共へ毎度被仰出有之候付、改而此段申渡候事。

午十一月

十一月二十日。江戸に於いて前田齊廣隱居の後尙政務を監すべきことを告ぐ。

〔諸事覺書〕

十一月二十日

一、左之通被仰出候旨御國より申來、夫々申渡。

若狹守様御幼年之御儀候間、御政務を初萬端窺事等之儀、只今迄之通中將様に相伺被仰出候

趣、若狹守様奉達御聽度拙者共より相願候處、御保養中故別而萬事不被行届儀とは被思召候得共、先被聞召届候段被仰出候條、其趣相心得、萬端伺事諸言上等是迄之通中將様可奉申上候。乍去誠に指懸候儀は若狹守様可相伺、其段中將様可及言上候。たとへ前例有之儀たり共、諸事は迄之通中將様可相伺可申候。右之趣寄々可被申談候。

十一月廿一日。幕府前田齊廣の隠居と齊泰の家督相續とを許す。

〔三守御譜〕

十一月十六日御隠居被遊度旨御願書被指出、同廿一日御名代淡路守利幹并若狹守様齊泰公御登城被成候處、於御座之間御願之通御隠居、若狹守様へ御家督被仰出、御懇之上意あり。公於御國御隠居被遊事、諸侯稀なる例也。于時御年四十一歳に被爲成。表向四十三歳。此時、若狹守様御若年之内、御國中御仕置等御心を被爲附御取計候様、御名代淡路守利幹君へ御用番水野出羽守演述。若狹守様御若年といへども、右被仰渡に付此時御國目付等不來。晦日此表へ御隠居被仰出候儀申來。

〔齊廣様御傳略等之内書抜〕

十一月二十一日御座之御間に於て御望之如く致仕を免され、嗣君齊泰公へ御相續之儀御直に被仰出なり。御名代淡路守利幹公暨齊泰公を召て仰出され、御懇之仰有り。次に齊泰公御若

年之内は國中仕置等之儀御心を添らるべく台命有り。此儀は於御白書院縁頼老中列座、御月番水野出羽守殿富山利幹公の台命を傳らるなり。此の日肥前守様と御改、若狹守様には加賀守様と御改なり。右等之趣金澤に於て十二月朔日御弘有之なり。

〔又新齋日録〕

十一月廿一日御家督に付上意書

御座間	松平若狹守
	松平加賀守
名代	松平淡路守

右一同罷出、年寄共披露、上意有之、御下段御敷居之内迄罷出。其時加賀守願之通隠居被仰付、若狹守の家督無相違被下候旨被仰出之、年寄共及御取合。重而國中廣き儀に付、政事向猶更無油斷心を付候様上意有之。重々難有仕合旨御禮申上、年寄共及御取合。此時加賀守心靜に保養を加へ候而、無事に可罷在段上意有之。年寄共御取合候上退去。

御別紙

松平加賀守願之通隠居被仰付候得共、若狹守年若之内、國中仕置等加賀守心を付取計候様被仰出也。

十一月廿三日。儒者大島忠藏の勤務前田齊廣の意に適せざるを以て遠慮を命ぜらる。

〔諸事覺書〕

十一月四日

一、左之通可申渡旨被仰出候旨申來候。且又以後校正方被指止候趣等も申來候事。  
松原牛兵衛・岡田太郎右衛門

大嶋忠藏

右忠藏儀思召被爲在候處、早速御國へ罷歸候様可申渡旨被仰出候條、可被申渡候。

一、公邊等より御借用之御書物有之候者、今村藤九郎等へ引渡候様可被申渡候事。

一、忠藏儀外向懸合等之儀有之、急に難罷歸など、申儀有之候とも、御様子有之候條、藤九郎等へ申送早速罷歸候様可被申渡候。且右引受之儀藤九郎等へも可被申渡候事。

〔横山氏日記〕

十一月廿三日

一、左之通表方に而申渡有之候事。

青山將監等

御儒者 大嶋忠藏

右忠藏儀、御書物校正方爲御用、江戸表に相詰罷在候處、勤方等甚不應思召儀ども有之候付、急度御咎も可被仰付處、其儀は御用捨被成、遠慮被仰付候條、此段可被申渡候事。

午十一月

十一月廿七日。前田齊泰襲封を謝する習禮を行ふ。

〔諸事覺書〕

十一月廿七日

一、今日御家督御禮之御習禮被遊候付、九時過より御奏者番松平伯耆守殿・本多豊後守殿・堀大和守殿御越、淡路守様にも御出。追付御前大書院へ御出、坊衆も罷越御習禮有之。相濟、甲斐守等七人一人充罷出習禮仕、相濟候上御前被爲入。各席に罷越定服に改、御奏者番衆御溜御小書院溜へ甲斐守等七人罷出、御挨拶申述候事。

但、今日御習禮以前、御奏者番衆被揃候上、御溜へ御前御出御挨拶有之、被爲入御料理出之。畢而御長袴被召、淡路守様御同道に而御出、御習禮有之。甲斐守等御大書院へ御出前、服紗小袖・長袴に改、大書院二之間御縁頼御杉戸際より列座、其所へ御奏者番衆御通候節坊主取合候付御挨拶有之。御前御習禮相濟、大書院後御勝手方より相廻り、御廣式見物所



の相廻り伺公。此所へ御太刀等飾付有之、一人充罷出習禮有之。相濟、各引退候事。各服相改、御奏者番衆へ御挨拶申述候節も、坊衆取合有之事。

一、右相濟於席今日御禮之習禮仕候御禮、藤田平兵衛を以申上候事。

十一月廿九日。前田齊廣の隠居を許されたる報金澤に達す。

〔横山氏日記〕

十一月廿九日

一、當廿一日御隠居御家督に付、中將様御名代淡路守様御勤、直に此方様被爲入、甲斐守被召、今日於御座間、中將様御願之通御隠居、若狭守様御家督之儀被仰渡、段々御懇之被爲蒙上意候。右御次第等委細は御書取被仰上候旨被仰述、御封物甲斐守御渡。且又段々結構成御様子目出度御儀、嘸御安氣可被遊被思召候。右御祝詞も被仰上候。是等之趣宜申上旨被仰に付、早速御國許可申上旨甲斐守及御請申候由。則右御封物足輕小頭添、早飛脚今日到來いたし候事。

十一月晦日。金澤に於いて年寄中に前田齊廣その子齊泰に家督を譲るの請を許されたることを告ぐ。

是月は大盛なり

〔横山氏日記〕

十一月晦日

一、左之通於大廣間年寄中等一列、月番豊後守頭分以上被爲申聞候事。中將様御持病之御症邪、其上御氣塞之御症に而、近年彌増御難儀被遊、押而も御參府難被遊候に付御隠居、若狭守様御家督御相續之儀御願被成候處、依御奉書當月廿一日、中將様御名代淡路守様并若狭守様御登城被成候處、於御座間中將様御願之通御隠居、若狭守様御家督被仰出、段々御懇之被爲蒙上意候旨、年寄中等より早飛脚を以申來候。先以恐悅之御事に候。此段先爲承知申達候。御祝詞被申上儀は、追而委細之御様子被仰下候上に而可申達候事。

一、中將様御名肥前守様与御改、若狭守様御名加賀守様与御改被成候。中將様御儀、御内輪は勿論、御外邊に而も、可成程は中將様与相唱可申、加賀守様御儀加賀守様与相唱申答月番演述。

〔官私隨筆〕

加賀藩史料 第十三編 文政五年

十一月晦日

御横目

御隠居之上は萬端御手前切に而被爲濟候。依之左之通役名・組名等被爲極候旨被仰出候。

御側御用人 御表に而定番頭次、定番頭並之上。

御側組頭 御表に而御馬廻頭次、御小將頭上。

御側物頭 御表に而御先手物頭次、物頭並之上。

御側組頭之組

御側御番頭 御表に而組外御番頭次、御大小將御番頭上。

御側頭並 御表に而御細工奉行次、頭並之上。

御側組頭之組

御側組 平士。御表に而御奥小將次、御表小將上。

御側組頭支配

中奥組 御表に而御表小將次、御大小將上。

同斷

御書院組 御表に而三品に相當り、御馬廻組之上に列す。

同斷

御書院組並 御表に而三品に引續之列、組外之次。

此並に被仰付候人々は、頭分之嫡子並平士之嫡子、無息に而被下方を以被仰付候。併頭分之嫡子には、是迄年頭御禮被仰付候人々可有之、以後御禮之節は是迄之通、父之別を以被仰付候。於竹澤御殿は御書院組並之一列と被仰出候。

御側物頭支配

新組 御表に而新番組御歩に當り、新番組御歩之上。

同斷

寄組 御表に而御歩組に當り、御歩之上。

竹澤御殿に而割場奉行に當り候者之支配被仰付。

大遣組 御表に而足輕坊主に相當り候。

同斷

小者

右之通先大凡之所被仰出候事。

右之趣一統可被申談候事。

十一月。前田齊廣綿衣の着用を止めんとするの趣旨を告ぐ。

〔覺書〕

文政五年十一月

一、左之御親翰以縫殿左衛門被渡下、猶更御意之趣茂申述候事。  
一、昨年より段々家中風俗質朴節儉を相しめし、鹿服専ら之儀申候付、其砌より時之權によつて、一統目當のため此方其砌より木綿着用、肩衣・袴も木綿布裏のみ相用候。然處何卒なく各初茂見聞に候哉、其砌より各にも綿衣を多分着用之躰に相聞候。然ば此儘に打捨置候而は自然と相ゆるみ、此方并に萬石以上之各は、生るゝより綿衣而已も着用いたさざるものゆゑ甚重く存、各はいかゞ候哉、此方は及年來候故か、綿衣而已にては甚動作致難儀、其上調筆等多き節は肩を押し難儀に付、木綿類は指止度候得ども、只今迄着仕來候處、何事茂不申出只今絹類着用いたし候ては、早上よりゆるみ候形にて、其實を失ひ申事に候。又各とても生るゝより絹類まで着用之身分、年たけ綿衣にては甚動作等難儀より、いつしか絹類に立戻り候。是も唯何となく立歸候ては、各之心得之ゆるみに諸人相見候事に候。依之一昨年より時之權によつて、此方・各も一端綿衣而已着用いたし、諸人之目を改候事にて、畢竟は身上

分限相應之處は可有之事に存候に付、今般此方は輕き絹類に改候事に候間、各并萬石以上之輩は、綿衣も分限に不相應に候間、輕き絹類を専らに相用候様にと存候。且又諸頭も六十以上之人々は、もはや歩行も不自由候年來に候得ば、是又綿衣而已にては可爲難儀候條、時節柄に不憚、輕き絹類着用之儀可申出与存。尤其他は専ら諸士質朴を猶々相守り、綿衣にて甲斐々々敷姿可相守事に候。行成にてゆるみ候ては無詮事に付、以後却而縮方のため、右之趣心付候に付申出候。各同存之上は、右主意一統爲申聞、各にも専ら絹類に相改可然存候。別紙之通り申出候得共、書面にては堅々敷も相聞え、其上萬石以上はなみ有之候得共、其所急度相定り候様にも相聞候間、猶委細之主意は縫殿左衛門得与申含候間、口濱にて承り可被申候。別紙之趣には候得ども、各とても壯年之面々は、綿衣之方却而動作にも和らかに無之宜与被存面々は、尤綿衣も可然事に候。其上先達而他國使者有之節、各之内綿衣着用之面々も有之由。組頭ども之内にも此儀はあまり杯と申者も有之候得ども、於此方は是は却而面白く存候。既に江戸表にては安藝守殿の參り見受候處、家老初綿衣も着用いたし罷在、甚質朴に相見え候事にて、是等は隨分面々心々、他國使者之節なども平生に不替品、却而面白き事に候。ケ様之主意候間、隨分致着用度面々は着用可然候。唯此方之主意は、何となく各絹に立歸り候よりは、一往解きを付絹類に相成候得ば、ゆるみと申所無之可然与之主意候。既

に寛政年中嚴重省略被仰出候節、太梁院殿甚御籠服を被爲召、各にも其砌一端何れも綿衣がちに着用之處、其後解茂なくいつしか近年之通り絹類のみに相成候。如此にてはゆるみ与申す者に候間、今度は自然之ゆるみを待不申、先に解き申候得ば、却而一統各を目當に相成候事に候。是又別紙に分限相應と申儀茂調置候得ども、各分限相應と申時は紗綾杯も不指支程之分限に候得ども、其處は重く候故、輕き絹類に替候と申程之事に被相心得可然候。猶又其味は書解がたく候間、縫殿左衛門より承り可被申候。

但、右被仰出之趣に付重而相伺候上、去々年頭々より申渡候處、多分綿類着用いたし申様子、一段之事に思召候。中將様にも是迄綿類御用被成候得共、御動作御不自由と被思召之儀も有之に付、以來絹類御用被遊候。此儀不被仰聞置候而は、却而諸人之目當等相違可仕哉与、此段被仰出候。拙者ども并萬石以上之人々は、輕き絹類専ら用候而も可然被思召候。乍去綿衣着用之儀も勝手次第之旨一統申觸候事。

### 十一月。竹澤御殿の造營全く成就す。

〔齊廣様御傳略等之内書抜〕

十一月竹澤御殿御造營全御成就有之なり。同所辰巳御門續き御堀之所は、其先札之木と云て諸木繁茂して日之色を覆ひ、逆も茂たる數たゝみにて、今之山崎山之通なり。又竹澤下場先

下場は下馬なるべし

は野村七兵衛屋敷なり。

### 十一月。御郡奉行より郡方の風俗に關して戒む。

〔留帳抜書〕

御家中風俗等之儀に付去々年被仰出候趣、愈相弛不申様重而被仰渡之趣此間申渡候通、彌無油斷相心得可申候。今度人多御答被仰付候に付被仰出儀有之、於御上茂御家中を始御答被仰付候儀、甚御厭被遊候御様子に候得共、御政務方誠に無御據御儀与奉恐察事に候。何れも不埒之族致増長候而は難相成儀。畢竟前段御嚴制被仰出儀も、衆人御示教之御儀奉至極儀に候。尤御郡方も愈古來質素之風俗に立戻り、不埒之族等無之様可相心得儀に、いづれも油斷有之間敷候。

一、博奕之儀御停止之趣時々申渡候得共、示方不行届、下々輕き者に至而は、右躰不埒之所行致増長候躰承及候。仍而去年夫々御達申、村々人多集候處に、博奕制方張紙等に相記急度申渡置候得共、示方輕々敷相心得候哉之儀相聞え、不届至極之事に候。當時御郡方百姓拙者共直支配に付、右様之不埒見聞有之候而茂、中には具に申聞方相泥候人々も可有之哉。申迄も無之候得共、曾而相泥儀共無之事に候。直支配に付、組主より直様手當等申付候儀は勿論不相成候得共、右様不埒之者見分有之候はゞ、速に拙者共申聞有之候得ば、夫々手當方等

不相後様、前條之趣昨年も嚴重觸置候之處、不埒之者手當方等閑に相成候而は、次第其咎過多押移、畢竟末々御收納取縮にも甚差障り、不輕儀に候。且又身元相應之者等、甚・將基かけもの致候族、是又不少躰。元來賭物を以勝負を争申儀、御制禁之儀者不及申に儀。假令聊たりとも右様不埒之筋に携候者は、承り次第夫々相糺、嚴重可申付候。面々にも急度相心得、少に而も見聞之品有之候は、無猶豫可申聞候。

一、當時於金澤有之芝居并茶屋町等々不罷越様、每度示方申渡置、心得違無之筈に候得共、年若き人々杯は不斗通懸け等に被誘、立寄候様之儀有之候而は難相成候條、急度相心得可申候。其外遠所町奉行等支配において、歌舞伎躰之儀有之候而も堅く參申間敷候。勿論家内妻子等も堅相示可申候。

一、御郡方風俗之儀、每度申渡候得共、宿立・町立之箇所杯、別而町方之風儀見習、家内妻子等奢侈之費不少躰。諸郡とも前々より身元相應之百姓共、近年次第及難澁、持高をも追々致切高、手前衰候儀何れも承知之通に候。是皆百姓之所業を怠り、家内妻子迄も懦弱僭上之風儀に押移候儀、沙汰之限り歎敷事に候次第、惣年寄中等初御郡方において長・役之儀は、一統之目當にも相成事に候間、專質素之風儀を相守、尤村々役人等聊心得違無之、末々迄古來之風俗に立戻り候様急度相改可申事。

右等之趣、此度改而申渡候條、無違失相心得、請書可指出候。尤諸郡共下々々は、追々拙者共より可申渡候、以上。

午十一月

御郡奉行

惣年寄中・年寄並中・無役年寄列中

御旅屋守 戸出村茅太郎

岡島新村 甚右衛門

十二月朔日。前田齊泰登營して襲封を謝す。

〔諸事覺書〕

十一月晦日

一、明日御献上之品々

公方様々

一、御太刀 一腰 一、御馬 裸背鹿毛二疋

一、白銀 百枚 一、絹紗 二十卷

一、綿 五十把 一、御刀 一腰

包御のし・御目錄

内府様

- 一、御太刀 一腰
- 一、白銀 百枚
- 一、御刀 一腰
- 一、御馬 裸背栗毛一疋
- 一、綿 五十把

包御のし・御目録

御臺様・御簾中様

- 一、白銀 三十枚

包御のし・御目録

中將様より公方様

- 一、御太刀 一腰
- 一、紗綾 五卷
- 一、御馬代銀 三十枚

包御のし・御目録

内府様

- 一、御太刀 一腰
- 一、御馬代銀 三十枚

包御のし・御目録

御臺様・御簾中様

- 一、白銀 十枚

包御のし・御目録

以上

御家來より献上物

公方様

- 一、御太刀 一腰
- 一、紗綾 五卷
- 一、御馬代銀 一枚充

包御のし・御目録

甲斐守・内膳・又兵衛

- 一、御太刀 一腰

- 一、紗綾 三卷

- 一、御馬代銀 一枚充

包御のし・御目録

織江・修理・内記・市三郎

内府様

- 一、御太刀 一腰
- 一、御馬代銀 一枚充

包御のし・御目錄

甲斐守等七人同斷

〔諸事覺書〕

十二月朔日

一、今日御家督之御禮被仰上候付、六時不遲之御供揃に而御登城に付、甲斐守等七人長袴着用、六時前御殿へ相揃、六打に而暫有之罷出候而可宜旨、聞番申聞候付、聞番同道に而何茂御城に罷出。

但、甲斐守・内膳・又兵衛に聞番助前田銀右衛門指添、御作事御門外より同道。織江・修理・内記・市三郎に同助福嶋數馬指添、是又右同様之事。

一、中將様御隱居之御禮、御名代淡路守様御登城之事。

一、今日御登城御黒書院において御家督之御禮被仰上、御懇之被爲蒙上意、御手自御熨斗蛇頂戴。相濟、御白書院に御出御、甲斐守等七人一人宛御目見被仰付、御奏者番衆代々御披露。

一、中將様御名代御禮、御黒書院において加賀守様御禮後淡路守様被仰上。相濟、夫より西丸へも御登城、御戻に諫訪部文九郎殿へ御立寄、御裝束被召替。夫より御老中方・若年寄中

御廻勤被遊、九半時過御歸殿之事。

但、甲斐守等御本丸御禮相濟、夫より西の丸に登城御奏者番謁、退出より諫訪部被立寄服相改、夫より御老中・若年寄中廻勤、七時過罷歸、何茂直に御殿へ罷出。

一、内記儀は今日西の丸に而氣色致難儀、謁も難罷出候付、其段聞番より取計を以申達、直に下城、御老中等廻勤難相成止候。快氣候上相勤候趣と相成、今日は不相勤御小屋に罷歸候事。

一、甲斐守等今日御家督之御禮首尾能被仰上、中將様は茂御名代淡路守様御禮被仰上候御祝詞、藤田平兵衛を以申上。將又私共被召連、御威光を以御目見被仰付、難有奉存候旨御禮申上候事。

一、暮頃御居間書院へ御出、甲斐守等三人被召、今日之御様子御意有之。御請申上、退候上織江・修理被召、右同様御意有之。御請申上退候上、市三郎被召御意有之、退去之事。

一、御弘之趣頭分以上へ追々甲斐守席において演述、今朝日御家督之御禮被仰上候様、昨日御老中方御連名之御奉書、并御家來七人可被召連旨御別紙到來、即御登城被成候處、於御黒書院御禮被仰上、御懇之被爲蒙上意、御手自御熨斗蛇御頂戴、其上御家來御目見被仰付、忝御仕合被思召候。此段可申聞旨御意有之。右申達候以後、中將様御隱居之御禮、淡路守様を以

御首尾能被仰上候旨申達候事。

一、左之通御横目<sup>の</sup>渡。

御横目<sup>の</sup>

今日御家督御禮被仰上候御祝詞、頭分以上御帳に附可申候。

一、右爲御祝詞、頭分以上今・明日中年寄中・御家老中御貸長屋へ罷出可申事。

右之趣夫々可被申談候事。

一、甲斐守等六人一列御料理之間へ罷出、御吸物等頂戴。御給事御大小將、差引津田平左衛門。

畢而同席に而平左衛門へ御禮申述候事。

一、内膳等六半時前退出、御本宅へ罷出、御前様・鈿姫様<sup>の</sup>今日之御祝詞神戸加平を以申上

事。

但、甲斐守儀御用有之、退出暫遅く、跡より罷出候事。

十二月朔日。竹澤御殿に屬すべき諸士等を命ず。

〔金龍公記史料〕

十二月朔。土佐守直時爲公附。側用人以下爲公附者數十百人。

〔横山氏日記〕

十二月朔日

新、知石

高木學純

學純儀、竹澤御殿御詰醫者に被召出、新知如此被下之、御書院組並次列に而、御側組頭支配被仰付。

新、知石

石黒玄丈

玄丈儀、竹澤御殿附御詰醫者に被召出、新知如此被下之、御書院組並次列に而、御側組頭支配被仰付。

新、知石

太田喜左衛門

喜左衛門儀、竹澤御殿附寄組頭取被仰付、新知如此被下之、御歩小頭次列に被仰付。只今迄之御宛行は被指除之。

新、知石

岸七郎

七郎儀、竹澤御殿附寄組頭取被仰付、新知如此被下之、御歩小頭次列に被仰付。

御加増  
一、拾俵宛

金岩宗藏



石黒與平

先御切米都合五拾俵宛。  
右兩人如斯御加増被仰付。

山口清太夫嫡子	山口數馬
武田判太夫嫡子	武田和吉
高田彌左衛門嫡子	高田彌右衛門
小幡甚助養子	小幡左太夫
長屋平馬養子	長屋忠三郎
不破治部左衛門養子	不破五郎左衛門
山田万作嫡子	山田半六
伊藤五左衛門嫡子	伊藤三郎太夫
和田權五郎嫡子	和田采女
村上九左衛門養子	村上三右衛門
大橋市右衛門嫡子	大橋九左衛門
加須屋兵左衛門養子	加須屋百二郎

右人々竹澤御殿附御書院組並被召出、同所辰巳御門御番被仰付。依而年中白銀貳拾枚宛被下候事。

一、左之通土佐守席に而申渡有之候事。

山崎茂兵衛養子	山崎嶋之助
高嶺左兵衛嫡子	高嶺源太左衛門
中村彌五兵衛嫡子	中村彌兵衛
野坂安之丞嫡子	野坂兵九郎
橋爪八百記養子	橋爪鐵之助
加古津右衛門嫡子	加古友男
竹内十郎右衛門嫡子	竹内岩次郎
曾田清太夫養子	曾田庄太夫

大地縫殿左衛門  
神戶藏人  
一木逸角

各儀御側御用人就被仰付候、役料三百石被下候事。先役料は被指除之、拙者支配に被仰付。

各儀御側組頭就被仰付候、役料二百石被下之、先役料は被指除之、拙者支配に被仰付。  
音地清左衛門  
九里步  
名越三左衛門

各儀御側物頭就被仰付候、役料百五拾石被下之、先役料は被指除之、拙者支配に被仰付。  
遠藤數馬  
中村宅左衛門

各儀御側御番頭就被仰付候、役料百五拾石被下之、先役料は被指除之、拙者支配に被仰付。  
淺加九之丞  
坂井庄太郎

各儀御側頭並就被仰付候、役料百石被下之、先役料は被指除之、拙者支配に被仰付。  
兼松甚助  
梅杉松  
津田佐七郎  
永原貢

各儀御側頭並就被仰付候、役料百石被下之、拙者支配に被仰付。  
角尾孫兵衛

右中奥組被仰付。  
山森權太郎 田邊群吾 吉川昌九郎  
千田五太夫

永原傳七郎 本保孫三 山崎守衛  
堀田十左衛門 鈴木五兵衛 山本元吉  
神保采男 寸崎室二郎 金岩大次郎  
松本金八郎 長井平吉 青木吉他郎  
武田秀平 渡邊新藏 石橋庸藏  
廣瀬良左衛門 今川能順

右人々御書院組に被仰付。  
内藤元鑑  
右御詰醫者に被仰付。  
後藤徹丞

右寄組頭取被仰付。

富田 矢十郎	土師 保百	湯淺彌左衛門
松本 年万	加藤久太郎	神田三五六

右人々新組に被仰付。

大田喜左衛門	岸 七郎	山本與右衛門
中村彌五郎	高橋戸左衛門	五十嵐丈七
杉本兼助	木村平兵衛	岸 金藏
北嶋牛之助	中嶋莊兵衛	高木丈右衛門
今川可平	森 辰之助	金 岩宗藏
早川彌平次	石黒與平	持田幸左衛門
瀧川新平	廣岡亨吉	吉田兵作
杉本吉左衛門	葭澤彦左衛門	若林吉郎左衛門
岩井傳藏	山本作平	武部長水
松本梅慶	石橋榮畔	中井彌藤次
永岡喜三太	黒川平兵衛	山本庄兵衛

右寄組被仰付。

澤阜知左衛門	村田鉄平	北嶋佐六郎
富坂甚右衛門	吉田猪八郎	柴原眞之丞
天野與三太郎		

右人々竹澤御殿付大遣組坊主方御側勤被仰付、三人とも髪はやし、袴着、名改可申候。

三田村柳燕	中島喜齋	山室清可
辻 宗 朴	竹内清務	山原林策

右之者共竹澤御殿附大遣組坊主方に而、御道具裁許并御側組頭席書役兼帶可相勤候。三人とも髪はやし、袴着、名改可申候。

宮田湖舟	鈴木善澤	小嶋閑齋
八里長彌	青野春齋	石橋理全
小嶋秋湖	高村正佐	宮北長信
大場久務	山本久益	大場林悦
大場善益	小野簡丈	

右之者共竹澤御殿付大遣組に而、坊主方相勤可申候。何茂髪はやし、都而御風儀に合不申者

は、御表に被指出候節は、髪剃り、如元名相改相返可申候。

御切米  
一、四拾俵

山本與右衛門嫡子

山本要左衛門

右之通御宛行被下之、竹澤御殿付寄組に被召抱、御側物頭支配被仰付。

御切米  
一、四拾俵

中村源五郎嫡子

中村正三郎

右之通御宛行被下之、竹澤御殿付寄組に被召抱、御側物頭支配被仰付。

御切米  
一、四拾俵

高木丈右衛門嫡子

高木伊一郎

右之通御宛行被下之、竹澤御殿付寄組に被召抱、御側物頭支配被仰付。

御切米  
一、四拾俵

奥附御横目足輕

田邊仁右衛門

右之通御宛行被下之、竹澤御殿付寄組に被召抱、御側物頭支配被仰付。只今迄之御宛行は被

指除之。

御切米  
一、四拾俵

大組足輕

磯野權左衛門

右之通御宛行被下之、竹澤御殿付寄組に被召抱、御側物頭支配被仰付。只今迄之御宛行は被

指除之。

御切米  
一、四拾俵宛

小野丈雪

山岸祐順

右兩人竹澤御殿付大遣組坊主方頭取、御側組頭等席執筆兼帶可相勤候。兩人とも髪はやし、

袴着、名改可申候。

御切米  
一、四拾俵

表方坊主

高村久爲

表方坊主

市川洞元

只今迄之御宛行は被指除之。

右兩人竹澤御殿付寄組に被仰付、御側物頭支配被仰付、髪はやし、袴着用、名相改可申候。

十二月四日。前田齊廣に年頭その他に献上すべき金品の額を定む。

〔御觸拔書〕

中將様年頭等献上物之儀に付別紙相越之候條、被得其意、組・支配之面々被申渡、組等之内裁許有之人々は、其支配に茂相達候様被申聞、尤同役中可有傳達候事。右之趣可被得其意候、以上。

十二月四日

中將様を爲年頭御祝儀献上物、加賀守様御同事に指上可申事。

但、無息人よりは献上に不及候事。

一、跡目并新知等、御役儀被仰付候而々、當時御省略に而加賀守様を都而年頭之通献上物仕候筈付、中將様を献上物左之通。

加賀守様を御省略以前、御太刀・銀馬代、紗綾三卷又者貳卷献上仕候。

中將様を都而御太刀・銀馬代献上仕候。

右之外加賀守様を年頭之通御太刀・銀馬代献上仕候分は、何御禮に而茂中將様を、

御肴代 百疋

同鳥目百疋献上仕候分は、何御禮に而茂、

鳥目 五拾疋

同五拾疋者鳥目三拾疋、同三拾疋以下者都而貳拾疋。

一、右品之献上物に目錄相添可指出候事。

右献上物諸方御土藏を上納可仕候。献上目錄者御奏者番より遂披露候筈に候事。

一、婚禮之爲御禮献上之御肴代は、加賀守様を茂御省略中献上無之候旨。中將様を茂不及献

上物候事。

以上

壬午十二月

十二月六日。前田齊廣金澤に於いて諸士に家督をその子齊泰に譲るの請を許されたることを公示す。

〔横山氏日記〕

十二月六日

一、夜六時過御大廣間において、年寄中・御家老中列座、左之通御弘之趣、頭分以上を月番求馬申聞有之候事。

中將様御意被成候。前月廿一日御名代淡路守様并加賀守様御登城被成候處、於御座間中將様御願之通り御隠居被仰出、御家督加賀守様を被仰下、段々御懇之上意、其上不被爲思召寄、加賀守様御若年之内は、御國中御仕置等之儀は、中將様御心を可被爲添旨、別段被爲蒙上意、重疊難有御仕合被思召候。此段可申聞旨被仰出候事。

前月二十日依御老中方御奉書、翌廿一日中將様御名代淡路守様并加賀守様御登城被成候處、於御座間中將様御願之通り御隠居被仰出、御家督加賀守様を被仰付候旨段々御懇之上意、重

疊難有御仕合被思召候。右之趣何茂召寄可申聞旨、今般御使者義輪知太夫を以、從加賀守様被仰下、御書も被成下候。先以御願之通被仰出、目出度御儀恐悦之至に候事。

一、六半時過於御小書院、重而右之通列座、頭分以上之人々一役々々切に罷出、御意之趣月番求馬左之通申聞有之候事。

中將様御隠居加賀守様御家督被仰出候段、只今申達候通に候。此上は不相替加賀守様急度御奉公仕候様可申聞旨、從中將様分而御意候間、可被得其意候事。

十二月八日。前田齊泰に婚約せる秋田侯佐竹義和の女利瑳姫歿す。

〔官私隨筆〕

十二月十七日

利瑳姫様御病氣之所、御療養不被成御叶、去八日午之上刻御死去之段申來候旨、同日不時立早飛脚步を以、甲斐守殿等より申來候付、爲御承知申進候。右に付今日之日付に而、當十九日出以紙面加賀守様御機嫌相伺申筈に御座候、以上。

十二月十七日

追而於此表鳴物遠慮之御沙汰無之候。此段も爲御承知申進候、以上。

〔諸事留牒〕

十二月十七日

一、利瑳姫様去八日御逝去に付、今日之日付に而、當十九日加賀守様御機嫌相伺候段月番より申來。且江戸表に而は律姫・銚姫様之節御七歳未滿に候へども、御縁女之儀に付遠慮有之候へども、此表に而は遠慮之沙汰無之事。

〔齊廣様御傳略等之内書抜〕

十二月十七日加賀守様御縁女佐竹右京大夫義和公御二女利瑳姫様御卒去有之なり。

十二月九日。諸事伺及び言上は前田齊廣のみに上申すべきを命ず。

〔官私隨筆〕

十二月九日

御横目

萬端窺事諸言上等、是迄之通中將様へ奉申上、其段追而加賀守様へ可奉達御聽旨、先達而申渡候へども、今般上意之趣に付、當分都而是迄之通相心得可申候。言上之儀二重に相成候而は、諸向繁雜にも有之に付、旁以加賀守様へは不及言上旨、從中將様被仰出候。右之趣諸役人へ夫々可被申談候事。

十二月

十二月十日。金澤に於いて諸士前田齊泰の襲封を賀す。

〔官私隨筆〕

當朔日加賀守様御家督之御禮可被仰上旨、御老中方御連名之御奉書、并御家來七人御目見可被仰付候間可被召連之旨御別紙、前日到來、則同日御登城被成候處、於御黒書院御禮被仰上、御懇之被爲蒙上意、御手自御熨斗鮑御頂戴。中將様御隱居之御禮、御名代淡路守様御登城御首尾能御禮被仰上候旨、同日發足早飛脚を以甲斐守殿等より申來候。且右之趣中將様よりも被仰出候付、爲御承知申進候。先以恐悅御同意に御座候。右に付明日各中將様へ御祝詞申上、直姫様初へも申上候筈に御座候。御自分様にも明日御登城御申上可被成候。若御當病等に而御出難被成候はゞ、以御紙面御申上可被成候。

御前様・加賀守様・鈔姫様へは、明日之日附に而、當十四日出町飛脚に傳附御祝詞申上、淡路守様・備後守様へも申上候筈に御座候。此段爲御承知申上候、以上。

十二月九日

十二月十日。前田齊廣の側室於登佐の方歿す。

〔齊廣様御傳略等之内書抜〕

十二月十日鈔姫様御生母於登佐の方死去なり。法號は貞心院法道妙眼大姉、春秋不詳。下谷

貞心院は貞正院の誤

廣徳寺境内に葬。宿元は御書院番加藤傳左衛門なり。

十二月十二日。前田齊泰、徳川家齊の女との婚儀に就いて議せしむ。

〔諸事留牒〕

十二月十二日

一、御前御縁組之儀に付、田中殿聞番に申聞有之。

此方様は御縁も餘程遠相成、上様にも殊之外御望被爲在候段等、出羽殿被申聞之旨段々申聞。且此方様より先年より御斷之趣は、御難澁之御時節、御物入多に相成候儀にも有之。當時は以前とも違、公邊何に而も萬事御手輕御取扱有之、會津様などに而も、姫君様は三千兩被爲付、夫に六千兩之御足に而事濟候段等被申聞。此度之儀も押而御斷被仰立候へば夫に相成可申候へども、此度之御首尾誠に宜敷所、此度御斷に而は公邊向御首尾合も如何に候間、御請被仰上可然旨聞番より申上候に付、右紙面被渡下、詮議有之様被仰出。

十二月十三日。竹澤御殿諸門の名とその格式を定む。

〔官私隨筆〕

十二月十三日

一、左之觸狀寫以御用番添紙面到來、返書遣之。

御横目

竹澤御殿御長屋御門等唱方左之通。

一、辰巳御門

一、裏御門

右兩御門は御長屋に附有之、是より内は二御丸橋爪御門内之御格同事に候。

一、小立野口欄御門を辰巳外御門と相唱、右御門より辰巳御門迄は三御丸兩御門内之御格同事に候。

一、右辰巳外御門前に而下馬下乗之筈に候事。

右之通一統可被申談候事。

十二月

〔官私隨筆〕

十二月二十一日

一、左之覺書寫御用番より以添狀到來、及返書。

御横目

竹澤御殿外と下馬之方御堀横之御門を堀脇御門と相唱、晝夜往來不差支、右御門内より辰巳

御門迄は三御丸格に候。且又辰巳外御門は夜中縮切、日之内迄之往來、夜中御用に付罷出候人々は堀脇御門へ相向可申候。尤非常之節は辰巳外御門往來不差支候。

一、御城中三御丸橋爪迄召連候從者、三御丸腰掛に溜候分、竹澤御殿に而は右腰掛無之に付辰巳御門前に而落し、從者之分は出入共供外に相成、御式臺前腰掛に溜候儀は不差支候。右之通一統可被申談候事。

十二月十四日。今明兩日前田齊泰の家督相續を祝して金澤の市民盆月正月を行ふ。

〔似寄留〕

十二月十四日・五日、御家督御祝町中盆正月。

十二月十六日。前田齊泰左近衛權中將に任ぜらる。

〔齊廣様御傳略等之内書抜〕

十二月十六日加賀守様御登城、左中將被任候段御白書院縁類御老中列座、御月番阿部備中守正精上意を傳らるなり。

〔官私隨筆〕



十二月二十五日

一、左之御書到來之由に而、御用番より以早崎新助被越之。  
御老中方連名之奉書到來付而、今日令登城候處、手前儀中將被仰付候由、御老中列座阿部備  
中守殿被仰渡、難有仕合候。右爲可申聞以飛札申達候、謹言。

十二月十六日

御名 御字 御判

奥村伊豫守殿

十二月十六日 前田齊廣竹澤御殿に移る。

〔齊廣様御傳略等之内書披〕

十二月十六日二之御丸より小立野之新御殿に御移徙有之、同日より竹澤御殿と相唱候様被仰  
出有之なり。同日御引移り爲御祝詞頭分以上登城、御兩殿様は御祝詞申上候なり。竹澤御附  
之人々、思召を以て新御役名被仰付なり。御附年寄中は前田土佐守殿、御用部屋を御側御用  
人と申御役名、神戸藏人・大地縫殿左衛門・九里步等三人被命なり。御側組頭池田保左衛門等、  
御側物頭等御附人數多被命なり。平士役御書院組足輕は大遣と呼び、小者方は小遣と呼び、  
惣而足輕・小者之名目無之なり。委きは別記に有之なり。同日忠姫様・次姫様竹澤御殿に御二  
方様御引移り有之なり。

〔官私隨筆〕

竹澤御殿へ御移徙之節御作法

- 一、二御丸奥之口御式臺より御出、橋爪御門、石川御門新道通、辰巳外御門より御入、辰巳御門より表御式臺へ被爲入候事。
- 一、年寄中・御家老・若年寄裏御式臺へ罷出可申候。且詰合御奏者番等裏御式臺前へ罷出可申候。將又御普請方主付相動候御普請奉行・御作事奉行も、裏御式臺へ召出可申候。
- 但、土佐守儀は御先へ御待受到可罷出候事。
- 一、御移之上、年寄中・御家老・若年寄、并伊豫守・磐松・彈番、暨近江守・伊勢守・龍山、爲恐悦竹澤御殿へ可罷出事。
- 但、御當日年寄中等御肴等献上之事。
- 一、加賀守様奉初御附使者、奥之口御式臺邊へ罷出可申候事。
- 但、竹澤御殿へは御待受之御使者無之事。
- 一、竹澤御殿へ左之通可罷出候。

土佐守

御側御用人

同	組	頭
同	物	頭
同	御	番
同	頭	並

但、御側御用人等御移徙前御用有之人々は、尤振分罷出可申事。

一、御式臺鏡板御右之方へ土佐守罷出、御左之方へ御側御用人之内一人罷出、御先立仕、其外御側頭並に至迄、敷付へ罷出居御供可仕候。

但、御近習平士之人々可罷出者、前々之通に候事。

一、御當日爲恐悦罷出候年寄中等、并御普請掛り之人々御歩並以上、二御丸において白粥・御吸物・御酒頂戴、且土佐守を初御身附之人々は、竹澤御殿に而頂戴之事。

但、大遣組以下大豆入強飯可被下事。

一、二御丸へ罷出候御目見以上之人々、右御當日熨斗目・布上下、御歩以下は布上下着用可仕事。

但、服紗小袖等着用之儀は勝手次第之事。

一、御通筋橋爪御門等御番人服之儀も、前段之通之事。

一、頭分以上之人々、御引移之上御兩殿様へ爲御祝詞熨斗目・布上下着、二御丸へ罷出御帳に付可申事。

以上

〔横山氏日記〕

十二月十六日

一、今日中將様竹澤御殿へ御移徙に付、年寄中等熨斗目・上下着用、常刻より登城之事。

一、御意之趣有之旨に付、表方於席年寄中・御家老中・若年寄中一列之處へ、以永原貢、今日之爲御祝、白粥・御酒・御吸物頂戴被仰付候段被仰出候旨申述候に付、及御請候事。

一、御移徙に付、右一列、以同人中將様へ御機嫌相伺候處、追付同人を以御意有之候事。

一、九半時中將様御機嫌能、竹澤御殿へ御引移被爲遊事。

〔金澤古蹟志〕

竹澤館跡

此館址は今博物館の地邊にて、舊藩十二世權中將齊廣君此地を養老所と定められ、その先此地にありし學校及び藩士の第宅共を移轉せしめ、蓮池の亭地をも取込一圍の地となし、竹澤の境内とせられたり。さて其殿閣は、文政元年六月廿八日に新初の規式ありて廣大の殿閣を

今とば明治廿四年新  
文政元年誤  
初なる事は  
なるべし同  
日二年六月  
の條參照

爰に經營せらる。玉殿の結構美麗を盡されたる事誠に至れりといふべし。其年間五ヶ年にし  
て經營の功を遂げ、五年冬十一月廿一日四十一歳にて領國を世子に譲り、十二月十六日新殿  
へ移徙ありて、翌六年の春三月上旬殿閣盡く落成し、同月十八日・十九日の兩日新殿舞臺開  
の名目を以て猿樂を命ぜられ、新殿移徙の祝賀ありて諸士に見物せしめ、酒饌を賜り、館名  
を竹澤殿と稱す。同年八月新に時鐘をも鑄造せしめ、藩士富田景周をして鐘銘を作らしめ、  
遠藤高環をして知時用器修造の事を主裁せしめ、正時版及び測緯盤を以て時刻をなさしめ、  
城内の時鐘と時刻を異にす。中略。庭園の結構、殿閣の廣大、時鐘に至るまで備へられしは時  
世の變遷とやいふべし。然るに殿閣落成の翌年なる文政七年四月より病痾に結ばれ給ひ、同  
年七月十日四十三にて、金殿玉閣も邯鄲の夢の如く、遂に空しく成給ひ、金龍公と諡を呼び  
奉りける。其後追々殿閣を毀たれ、竹澤の殿號のみ残り。按に彼富田景周の鐘銘の序言に  
營別殿離館於城東竹澤之地と記し、金龍公の墓誌に退隱於城東竹澤矣とも載せられたれども、竹  
澤は昔より此地の地名なるを聞かず。友人湯淺祇庸に此事を質問せしに、竹澤は地名に非ず、  
此時初て殿號に定められたる名也。此地園内に金洗澤の舊蹟あるを以て、金澤殿と稱すべき  
内命ありといへども、金澤府城の名と混ざるを以て、更に竹澤殿と命ぜられたり。金龍公幼  
少部屋住の頃、御物の驗を竹じると稱し來れり。故に驗名の竹と金洗澤の澤とを取合せ、

更に竹澤の號を定められしといへり。

十二月廿二日。前田齊泰登營して陸任を謝す。

〔官私隨筆〕

去二十一日御老中方御連名之依御奉書、翌二十二日御登城被成候所、於御黒書院御轉任之御  
禮被仰上、御懇之被爲蒙上意、難有御仕合被思召候。此段可申聞旨御意之由、同日發足不時  
立早飛脚步を以、甲斐守殿等より申來候付、此段爲御承知申進候。先以恐悅御同意御座候。  
右に付各中將様初御祝詞申上候儀は無之候。此段も申進候、以上。

十二月晦日

十二月廿三日。前田齊泰の生母を様付にすべきことを告ぐ。

〔御觸拔書〕

御横目

今般御家督に付、おる夜殿御儀向後御格式御改、様付に唱候様被成度旨、加賀守様并御前様  
より中將様御願之處、御許容被遊候に付、以來御内證様与可奉唱旨、從加賀守様被仰出候  
條、右之趣頭・支配人等御寄々可被申談候事。

十二月廿三日

横山 求馬

各中將は齊  
廣及び齊泰

〔齊廣様御傳略等之内書抜〕

十二月十六日直姫様御産婦之方於屋尾殿、竹澤御廣式に被引越候。十二月二十二日御格式御改、向後御内證様と相唱候様被仰出有之なり。

十二月廿四日。政務に關する上申は自今齊泰と雙方に之を爲さしむ。

〔諸事留牒〕

十二月十四日

一、諸言上之儀二重に相成候付、加賀守様には不及言上候段申談に候へども、尙又月番方において詮議之上、右之趣は諸役人等と相當、兩席之儀は又譯合も違候間、矢張摠而之儀加賀守様にも申上候趣に相極候旨演述之事。

十二月廿六日。前田齊泰を從來の如く加賀守と唱へ、齊廣を中將と呼ばしむ。

〔官私隨筆〕

十二月二十六日

一、左之覺書寫御用番より以添紙面到來。

本年十二月九日の條參照

御横目

今般中將御轉任に付、御官名相唱候儀、被仰出之趣有之、只今迄之通加賀守様と相唱、肥前守様に者是迄之通中將様と相唱申答に候條、此段寄々可被申談候事。

十二月

十二月廿七日。前田齊廣人持組の土岡島帶刀等の不行狀を罰す。

〔官私隨筆〕

十二月二十七日

伊豫守殿

岡嶋帶刀

右帶刀儀不行狀至極、重き組柄、別而不埒千萬に付、蟄居被仰付。右之通從中將様被仰出候條、可有御申渡候事。

午十二月

甲斐守殿

三田村紋左衛門

右紋左衛門儀、先年御咎被仰付候處、當時も甚不行狀至極、重組柄には別而不埒千萬沙汰之

限に付、知行高四千石内千石與力知、自分三千石之内七百石御減少、知行高與力知共三千三百石に被仰付、蟄居被仰付。  
右之通從中將様被仰出候條、可有御申渡候事。

午十二月

十二月。前田齊廣無期參觀を缺くことを請ふ。

〔三守御譜〕

十二月、公御隱居後、温泉御入湯の御願あつて御參勤不被遊。是迄御入湯御願二十箇月毎に前にある通御届あり。然所此度は右期月不定、當分御入湯の御願にて御參勤不被遊。

右之趣其節聞番長瀬善左衛門に被仰出、種々の申込等にて思召通りに相成。

十二月。經費多端なるを以て御郡方に調達銀を命ず。

〔留帳拔書〕

諸郡惣年寄・年寄並々

御仕法御調達銀之儀に付、御算用場より申談之別紙寫兩通相渡之候。右者當時御勝手向御引當に相成候様之譯にても無之、先達而被仰付候御仕法銀全相續のため被仰付儀に候。元來當年物入多之儀に候處、御領國に而は御借銀も不被仰付趣等、格別思召被爲在候御様子、誠に

以難有事に候。且又是以後御仕法銀出來方、八ヶ年之間連々指出候儀に候得共、御領國中に而三冊之割合に候得者過分之儀に而も無之、別而前段御仁惠之御主意奉信服、いづれも相勵可申候。併此節に至り候而は指懸行當候者も可有之哉と、當暮之分は金澤併粟ヶ崎藤右衛門暨嶋崎德兵衛等より指上候に付、當暮は指上候におよび不申、來年より身元に應じ夫々可差上筈に候事。

右之趣得其意、一統會得違無之様重々可申談者也。

午十二月

廣瀬欣左衛門  
長谷川三右衛門

- 能美郡
- 礪波郡
- 射水郡
- 新川郡
- 羽咋郡
- 鹿島郡
- 鳳至郡

文政六年二月廿八日の條參照

文政元年御仕法御調達銀被仰付候節者、五ヶ年済に而數十冊出來に付、濟口御返銀も一時に相成申儀故、一昨年御詮議之上年限繰延、來る子・丑兩年に全相済申圖りに可相成候得ども、是迎も銀高不少儀、貸附銀も一時に取立候而は、融通方にも指障可申、其上御地盤御逼迫之御勝手振、殊更當年御慶事を初、追々御物入茂指湊申事に候處、右子・丑兩年御返銀相混候而者、彌増御手繰方も可六ヶ敷儀に付、猶又重々御詮議之上、當年より八ヶ年之間重而右御調達銀、十ヶ年済口に而年に三冊宛被仰付候旨被仰出候。且又當年御慶事に付而は、不一形御物入被爲在候様之折柄は、必御領内御用銀等を以御辨用可被仰付儀に候得共、町・在等成立に付深思召被爲在、今度は大坂を初他國御調達を以御辨用有之、御領内は不被仰付候條、是等之所も相含、右當年より三冊あて御仕法御調達之儀、品能可被申談候。

右之趣當場より可申渡旨、御勝手方村井豊後守殿被申聞候條、可被得其意候。一統申渡方等之儀は、御仕法主付木梨左兵衛等得与被示合、夫々可被申渡候事。

覺

一、今般被仰付候御仕法銀は、拾ヶ年済に被仰付候。依而壹冊六拾人組之内、四拾人は會每

二人宛圖當を以被返下、殘貳拾人は未年一時に元利被返下候事。

一、壹冊第壹番六拾人組を以、壹人一貫目宛指上候圖り、二ばんより壹貫目に付五拾目宛減少可指上事。

一、第一番より會毎二人宛圖取當り之事。

一、第一番圖取當り之者は、三ヶ月五朱之先利相添元利迄被返下、外に被下銀無之。貳番より上銀高に八朱利足相添被返下、外に被下銀無之事。

一、閏月有之候得者、閏月分利足被下候事。

一、指上人交名銀高共委曲帳に記可指出事。

一、第壹ばんより會每指上銀之内、半銀宛其支配人の御貸附、殘半銀上納之事。附、指上銀不少上納いたし度儀は勝手次第之事。

文政六年

正月朔日。前田齊泰登營し、齊廣は賀を廢す。

〔溫敬公記史料〕

元旦登城。

〔金龍公記史料〕

正月不受朝賀。

正月朔日。前田齊泰使者を齊廣に遣はして年頭を賀せしむ。

〔諸事留牒〕

癸未元日朝雪、四時頃より晴。

一、五時過出席、今日竹澤御殿に加賀守様より之御使相勤候に付、其段月番内膳に相達、追付退出、直に竹澤御殿に罷出る。服二、丸において長上下に相改候事。

一、竹澤御殿に罷出候處、神戸藏人罷出、御太刀・馬代等夫々相渡候に付、一木逸角に左之通申述、右御品物は御側組頭名越三左衛門に相渡、遂披露候様申談候事。

御太刀 一 腰

代黄金十兩

御馬 一 匹

御目錄

益御機嫌能被遊御超歳、目出度御儀恐悦思召候。年頭御祝詞被仰上候。依之御目錄之通被上之候。此段宜可申上旨被仰付候。

御使

出席は横山藏人

正月朔日

横山藏人

一、追付御禮人列立罷越候處、右之疎圖之通御太刀御目錄九里步披露。神戸藏人儀、加賀守様御使者横山藏人と相唱節、無障被致加年目出度、太刀・馬等被相贈大慶存候。此段江戸表に宜と御意に付、奉畏可申上旨御請申上退座。夫より土佐守等御禮追々有之御様子也。

一、右相濟、最前之御書院に退候上に而、以大地縫殿左衛門綿二把拜領被仰付候に付、難有仕合奉存候段申述、追付退出候事。

正月八日。奥村内膳學校惣奉行を命ぜらる。

〔官私隨筆〕

一、左之紙面到來、返書遣之。

村井又兵衛

奥村伊豫守様

今日内膳儀、以御親翰學校惣御奉行被仰付候。此段爲御承知申進候、以上。

正月八日

正月十二日。前田齊廣、越前萬歳を夜に入りて演ぜしむることを禁ず。

〔諸事留牒〕

内膳は奥村傳紋

一、左之御親翰月番より相廻候事。

例年越前より罷越候まんどい、此節於宮寺夜中爲舞候儀も有之躰相聞え、御家中にも其躰有之間敷とも難申候。右は見物事之儀に候へば、輕き男女入込候儀甚猥り成事に候。以後は日之内祝儀計に暫爲立入、假令夕方より相初め候とも、及暮不申内差止候様、寺社奉行等へ嚴重被仰渡候。依之人持中にも左様之者爲立入、夜中におよび候儀有之候而は、一統之御縮に難相成候間、急度心得に可申渡旨被仰出候條、可被得其意候事。

正月十二日

年 寄 中

正月十三日。前田齊廣、齊泰の夫人として徳川家齊の女を迎ふるが爲幕府に希望する所を述べ。

〔諸事留牒〕

正月十三日

一、御守殿之儀に付、聞番長瀬善左衛門に被仰聞候趣。  
御守殿之儀に付、段々御懇之御内命之趣、謹而御拜聽被成、誠に以難有御仕合、冥加至極に思召候。然る上は何分御事輕に而、御名目も御守殿と無之、肥後守様御同様御住居与被仰出、

萬端格別之御事輕に被仰渡候事に候はゞ、速に御受可被仰上思召に候事。

一、右に付加賀守様、來申三月御暇被仰出、御入國之上其表御殿向御しつらへ被仰付、酉三月御參勤之上御入輿に相成候へば甚難有儀に思召候。夫より相延候儀は、此方様御都合は別而宜御事に候旨被仰出候。

一、御守殿之儀は、於御家中久敷無之儀に付、何とか末代迄御規模に相成候程之儀被爲在候へば、御一段之儀と申人々も有之候へども、中將様には其御望は一圓不被爲在候。只何とか御國民之爲に相成候儀は、不一方御大望に候間、中將様兼々之思召には、御大國御仕置之儀に候へば、隔年一年之御在國に而は何程も御政事不被爲行届候。子細は、御歸國之上二月餘りも彼是御落付不被遊、又御參府二・三月計前より其御用意に而、入組候御政事御世話も不被爲成。左候へば纔に御靜に御政事御取捌之間は、五・六ヶ月に過不申。此趣に而は、甚御國民末々迄御政事不被爲行届、既に御家督被仰渡候節、御國中も廣き儀、御政事別而御心を被爲附候様上意も有之候所、毎年之御往來に而は其處甚不被爲行届候間、三ヶ國之御領地之事にも候間、御參勤は五ヶ年とか、せめて三ヶ年目とか、以來被仰出も御座候はゞ、此儀兼而之御大願、末代御家之御爲、御國民之ためと申時は、是より外御座有間敷思召候に付、此外に御望は不被爲在、或は御官位之御昇進、又は御家格之御宜相成候儀、或は御下乗等之上



り候儀などは、都而借上之一條に相當り候儀に候間、一圓是より被仰込候思召は不被爲在候。右御參勤之一條は、公儀に御規定も有之事に而、品重き事に而候得とも、ケ様之被仰込御儀、御過當成る御儀に相當り申事にも候は、相扣可申、其他は前條之通御望之筋は不被爲在候。是等之趣相含罷歸候様被仰出候事。

正月十六日。前田齊廣、竹澤御殿の境内に時鐘を置かしむべきことを告ぐ。

〔諸事留牒〕

正月十七日

一、左之通被仰出候由、土州より紙面を以演述之事。

前々より時鐘一ヶ所故、風に寄御城下聞え渡兼候儀可有之旨之御内意も被爲在候内、竹澤御殿に御引移之所時鐘聞えかね候に付、幸御園中にも時鐘被仰付候は、諸人之ために可相成与之思召に付、以聞番江戸表之様子も被爲承合候處、御指支無之、依而彌御園中可被仰付之旨被仰出候。此段爲御承知申達候、以上。

正月十六日

土佐守

内膳様

正月十八日。前田齊泰、襲封を謝するが爲使者を京師に派す。

〔齊廣様御傳略等之内書抜〕

正月十八日京都に之御使人持組葛巻隼人昌吉被命る。右は昨年御隱居御家督之御禮使なり。御献上物等御例之通なり。

正月廿二日。前田齊廣、菊池大學の參會を好むを以て警告を與へしむ。

〔官私隨筆〕

正月廿二日

一、左之覺書添紙面を以御用番より被差越之、返書遣す。

付札、伊豫守殿に

菊池大學

右大學儀、今以參會を好、無用之振廻等有之躰相聞え候。先達而風俗等之儀、御家中へ段々被仰出、諸頭等追々心得も相改、急度御教諭被爲在、少風俗も取直り候端にも赴候處、右様之儀有之候而は、惣躰之御取縮り不被爲行届事に候間、御咎も可被仰付候へども、其儀は御用捨被成候條、頭手前に而急度教諭爲申聞、叱置候様可申談旨、從中將様被仰出候條、可被得其意候事。

右に付大學呼寄、右覺書寫相渡、左之趣も申談覺書渡之。  
被仰出候趣、御用番内膳覺書寫之通候條、可被奉得其意候。御家中風俗等之儀に付而は、近年段々被仰出之趣有之、時々申渡置候通に而、とかく奢侈柔弱之風に押移候儀、深く御心痛に被思召候御様子。依而段々被仰出候趣共、何もへ取候而も難有御事は不及申候へども、各之儀は組柄も重く、結構に被召仕候事に候へば、猶以急度心得も可有之、常々家内幕方等奢侈僭上之儀を被相省、萬端質素眞實に相心得不被申候而は、子弟を初家來中教諭方もおのづから忽諸に相成可申も不計之事候條、内外に付而御奉公之筋に違不申様被相心得、段々被仰出之趣共、聊忘失有之間敷候。此度段々被仰出候御趣意通、誠に難有御事に候之條、急度承伏被仕、是以後させる所用も無之人々被相集候儀等堅く被差止、并無據儀有之親類中等へ被相越候節とも、用事相濟次第退出有之、無用之雜談時移り不申様可被相心得候。尤常々家内幕方等精誠質朴に被相心得、其外萬端に付油斷無之様にと存候。被仰出之趣に付而、猶又心付候通相達候事。  
右之通申渡候處、奉畏旨等御請あり。翌日左之紙而出之。

菊池大學

右私組大學儀、今以參會を好、無用之振廻等有之舛相聞え候。先達而風俗等之儀御家中へ段々被仰出、諸頭等追々心得も相改、急度御教諭被爲在、少し風俗茂取直り候端に茂赴候處、右様之儀有之候而は、惣躰之御取縮不被爲行届事に候間、御咎も可被仰付候へども、其儀は御用捨被成候條、頭手前にて急度教諭爲申聞、叱置候様御申談可被成旨、從中將様被仰出之趣、御覺書之通奉得其意、大學召寄、御覺書之趣を以申談候處、委曲奉畏奉迷惑至極候。然處御咎も無御座、結構に被仰出難有仕合奉存候。以來急度相愼可申旨申聞候。先以結構に被仰出、於私難有仕合奉存候、以上。

未正月廿二日

奥村伊豫守

奥村内膳様

正月廿二日。藩の收納米に欠米ある際代銀上納の件に關して告ぐ。

〔留帳拔書〕

御收納米等出船欠米・升廻欠米并古米斗立欠米有之候得者、不申渡候而も代銀上納致答候處、近年上納延引に相成候故當場より申渡候儀も有之、都而心得違も致出來候に付、是以後は當場より不申渡候間、欠米直段相極次第、其年十月迄之内可致上納。若し期月上納延引相成候へば、御定之利足取立候段等、寛政七年夫々申渡置候處、其後又候區々相成候儀も有之候。

依之改而申渡候條、先達而申渡置候通、以來は當場より不申渡候條、其年十月中迄之内急度可被致上納候。若去々年御詰米被引請候以後上納遲滞に相成候分有之候は、早速當場に相達、指圖之上可致上納候、以上。

正月廿二日

御算用場

御郡奉行中

追而町藏追詰米之内にも、右欠米代上納遲滞之分も有之候は、是又早速當場に相達候様可被申渡候、以上。

正月廿四日。江戸に於いて家老の見届くる誓詞は前田齊泰之を一覽したる後齊廣に報告すべきことを定む。

〔諸事留牒〕

正月二十二日

一、加賀守様御近習誓詞は加賀守様御入御覽、其趣中將様御言上仕候譯に相極候處、外御廣式物頭等御家老方に而見届候誓詞、此表に而中將様御入御覽、其趣江戸表御言上之譯に相成候へども、江戸表に而右等之誓詞は、江戸表において加賀守様御入御覽、其段此表御言上に相成可然儀に候へども、其儀未だ相極不申に付、江戸表に而見届候御廣式物頭等之誓詞、於江

戸表加賀守様御入御覽、其段此表御言上可申哉、又は右誓詞江戸表より指越、此表に而中將様御入御覽可申哉奉伺候。江戸表御指越候而は日間往返も有之、何か不辨理に御座候間、前段之伺之通に而も可有之哉、猶更奉伺候旨覺書相認、去年新誓詞出來之節之伺書と一集に、堀鐵三郎に爲持竹澤御殿に相伺置候事。

〔諸事留牒〕

正月二十四日

一、誓詞之儀奉伺置候處、御近習之外も、御家老方において見届候誓詞、加賀守様御入御覽、此表御言上に而宜段被仰出候事。

正月廿六日。竹澤御殿の辰巳外御門は平日通行を許さるべきことを告ぐ。

〔官私隨筆〕

別紙寫之通一統申談候様、御横目へ申渡候付、爲御承知進之候、以上。

正月二十六日

御横目御

辰巳外御門夜中は縮切、日之内迄之往來不指支様被仰付、去暮申渡置候へども、以後者晝夜共縮切被仰付候條、爲御用罷出候人々、都而堀脇御門へ相向可申候。勿論右御門外に而下馬下乗之筈に候。佳節・朔望等辰巳表御門開き候節は、辰巳外御門爲開申筈に候。尤其節は往來不苦候。且非常之節茂、右御門往來晝夜共不指支儀は、是迄之通に可相心得候。右之通一統可被申談候事。

正月

正月廿七日。前田齊泰、陞任を謝する爲使者を京都に派す。

〔齊廣様御傳略等之内書抜〕

十七日は廿七日なるべし

正月十七日京都の人持組玉井勘解由貞矩を御使加賀守様より被仰付。是は御轉任之御禮使なり。

正月。他國に使用する者の行装を簡易にしその費用を節減すべきことを命ず。

〔觸留〕

付札、定番頭

他國御使人行粧省略等之儀、文政三年一統被仰渡置候通に候。然所定式御貸渡金に而は用意方不足仕候旨申立、彼是不時願方、或町會所より借用致度杯与町奉行に申込候族も有之候段、粗被聞召候。畢竟是迄之振合を以旅中之器財不心服等、萬事相應に粧ひ不申而は難相成与申よりして入用多、自ら不時願之處にも至り申儀に候間、是等之儀堅く禁止、以來は都而用意方等御貸渡金限りにいたし、人數等格別減少、旅粧いかにも致省略、不時願方は勿論、他借一圓不仕様可相心得候。京都の御使之儀は、於彼地之行粧等は迄之振も有之に付、於江戸表從者召連方之相増申分は、御貸人等夫々御貸渡も有之儀に候間、旅中行粧成丈可致省略候。假令不時願等不致、自分に粧ひ候儀出來可申共、其儀も堅く指止、少も是迄之形ちに不拘、萬端格別手輕にいたし、御貸渡金限りを以相辨可申事に候。右之通可申渡旨被仰出候條、被得其意、組・支配之人々は可被申渡候。組等之内裁許有之面々は、其支配にも相達候様可被申聞候事。右之通一統可被申渡候事。

癸未 正月

二月十三日。竹澤御殿鎮守天滿宮の祭日を定む。

〔官私隨筆〕

二月十三日

一、左之寫御用番より到來。

御横目

竹澤御殿御鎮守天満宮、毎歲二月廿四日・廿五日御祭禮被仰付候。依而是以後、四月十七日御宮御祭禮之通、御家中暨町方等男女、并拾五歳以下之男子參詣之儀勝手次第之旨被仰出候。併今年も御鎮守廻りいまだ全御成就無之に付、三月廿四日・廿五日御祭禮被仰付、來年より前段之通に候。

二月十四日。本浦・散浦共に渡海船所持の者は藩の廻米を積み請くべきことを告ぐ。

〔留帳抜書〕

町・在之者何方浦に而も渡海船致所持候儀、去十一月指解以後、御用方全く相勤候様申渡候通に候。然處是迄本浦之外於散浦渡海船所持之者、御用荷物等不積請不同に付、已來大坂等爲御登米之分、御領國中本浦・散浦とも惣様打込、無不同積請、御用全く相勤候様可被申渡候。勿論散浦之分は御廻米迄に而、御用荷物之分は是迄之振を以相省き候。近年船稼相進候に付、御廻米高割符之上相對を以讓合候節、過分之余荷銀指出候躰にも相聞え候。御廻米運賃之儀

御宮は東照  
本文の天満  
宮は舊學校  
に屬したる  
ものなり  
政七年二月  
の條参照

は、大坂御雇船之振を以相極置候事に候得者、過分之余荷銀取遣候儀等不相當儀に候條、此段相心得候様、一統不相洩様可被申渡候、以上。

未二月十四日

小堀八十太夫殿

井上與兵衛殿

御算用場

二月十五日。徳川家齊放鷹に依りて獲たる鴨を前田齊泰に贈る。

〔官私隨筆〕

去十五日上使御使番伊丹七之助殿を以、御拳之鴨一つ御拜領被遊候。御料理御盃事は御斷に而、御菓子・御吸物等出、萬端御首尾能相濟、上使御退出後爲御禮御老中方御廻勤被遊候旨、同日發足町飛脚中飛脚步に傳附、甲斐守殿等より申來候。此段爲御承知申進候。先以恐悅御同意御座候、以上。

二月廿四日

二月十五日。前田齊廣、人持組及び頭分の士に努めて明倫堂の講書定日に出座すべきことを命ず。

〔觸留〕

近頃は文學校において若年之人々入情之躰、追々素讀人も多く出座有之候。然處人持・頭分講書定日出座甚薄く相聞候。右は何れ茂在勤之事情得ば、繁勤之輩は毎度難罷出儀も可有之、其上壯年之人々とは違、萬端熟練之趣に候得ば、今更講書等不承候共心得有之事に候得共、又重役之人々不絶出座有之候得ば、別而年若之人々進みに茂相成候間、人持・頭分聽聞之定日には不絶罷出候様有之度思召候。人持等行粧に而罷出候而は、手重に而難罷出筋も可有之哉、學校并稽古所等罷出候節は可相成丈け人少に召出、人々存寄次第同列同役とても供數不同之儀不苦事に候。嫡子父同様之行粧に而罷出候躰にも相聞候。右等は別而事輕人少に召連可然事に候。況次・三男に至り候而は、人持其外大身之人々とても、二・三人歎人々心得次第、夫より減少に而も不苦事に候。右様之處に拘り、自然に懈怠にも至り候様にも思召候間、此段夫々可申渡候。且又人持之子弟を初御家中之子弟、講日にも限り不申、常々文武可爲出情候。文學校素讀人多く申内、多分陪臣之躰に相聞候間、何かにも御昵近之人々并子弟多く相成候様有之度思召候。將又行粧之儀は、其分限に應じ、其身之堅固に召連候事に候得ば、曾而外見を飾り申譯に而者無之候得共、他國等は相應之堅固も可有之事、於御領國は其身々々之堅固は不入事候。文武之稽古は如何にも甲斐々々敷可致出情儀肝要に思召候。右

等之趣夫々可申渡旨、從中將様被仰候事。

右之趣被得其意、組・支配之人々罷可申渡候。組等之内裁許有之面々は、其支配にも相達候様被申聞、尤同役中傳達可有之候事。

二月十五日

村井又兵衛

〔官私隨筆〕

今般人持中等學校講日出座之儀、從中將様被仰出之趣有之に付、別紙之通筆頭相招可申談と、各致示談候故、則進之候條、御組等へも被仰談候様にと存候、以上。

二月十六日

人持・頭分學校講書聽聞定日出座甚薄く相聞え候付、今般一統被仰渡候通に候。然處當月三日之定日には、人持・頭分近頃無之多く罷出候躰被聞召候。右はいかゞ之心得に候哉。當春萬歲之儀に付被仰出之趣茂有之、且は御馬廻頭等毎度被爲召候儀等彼是考合、其模様に而何れ茂存付き、俄に近頃よりは多く出候事に而も可有之と被思召候。先以何茂薄情成心得に候。畢竟ケ様之心得故、何事も一端切に而後々之守り薄く相成候。此一條にも限り不申、是迄之様子何事も右之通之人氣故、一器量之人品も出來兼候旨、從中將様被仰出候間、右等之御主意得与被相心得、子弟者勿論、各に茂御用無之節は心懸被罷出可然存候條、此段申達候。

同組中へ者御手前より可有演述候事。

二月十八日。幕府徳川家齊の女浴姫を前田齊泰に嫁せしむるの意を告ぐ。

〔齊廣様御傳略等之内書抜〕

二月十八日、江戸表御老中水野出羽守殿御役宅に富山淡路守利幹様御呼立にて、加賀守様を將軍家第二十一之御女浴姫君様御縁組之御内意被仰出有之なり。

二月廿二日。老臣の越後屋敷式日を廢し隔日出席とす。

〔諸事覺書〕

二月廿二日

一、只今迄式日毎年寄中等越後屋敷出席御用取捌候得共、御用も有之候間、是以後各奇日毎に出席、九半時迄相詰、式日は指止候旨被仰出候。依之以來左之通出席可有之様心得之旨、土州より廻狀有之事。

毎月越後屋敷の出席日

朔日 三日 五日 七日 九日 十一日 十三日 十五日 十七日 十九日 廿一日 廿三日 廿五日 廿七日 廿九日

但、九半時退出、佳節期望是迄之通二御丸の登城候事。

右之通に付日並之廻り物は相止事。

二月廿三日。前田齊廣、城下を通行の際警固掃除等の繁雜を除かしむ。

〔御觸拔書〕

御横目

中將様御寺御參詣暨御行歩、其外何方へ御出被爲在候而も、下々事多成儀を御厭、町役人等御先へ立候儀、并横道等へ警固指出候に不及旨、舊臘被仰出、其段町奉行等へ申渡置候。依而武士町御通り之砌も前段之通故、指懸り御通前廉足輕觸廻り候儀も無之而は、人々門戸を申儀相おくれ候而も一圓御構無之、御通りに付而は掃除にも不及段被仰出候。右之通警固等も無之、指懸り御通りに而は老人幼少男女共取周章、御通り先込合、自然怪我等いたし候而は御趣意に叶不申、依而蹲踞等相おくれ候而も御貪着無之候。誠蠲寡狐獨之者迄も實意之程を御見聞之上、思召も可被爲在御内存に付、御身分を諸事御事輕に被遊候御趣意に候。

一、武士町御通りに付而之掃除には不及旨、前段被仰出候通に候へども、所に寄ては明き地暨往來筋人通り薄き所へは、勝手次第塵芥を捨、往來甚見苦敷所も有之躰に候。加様之儀は有間敷儀に候條、常々居屋敷廻り掃除之儀は不及申、明き地等へむざと塵芥捨不申様、家來末々へ嚴重可申渡候。此儀は常々之儀に而、御通りに拘り候儀に而者無之候。

右之趣被仰出候條、一統可被申談候事。

二月廿三日。

前田土佐守

二月廿五日。前田齊廣の命ずる所は單に被仰出と書すべき例に定む。

〔諸事留牒〕

二月二十五日

一、是迄申渡方に、中將様より被仰出候段申渡來候へども、以後中將様与申儀相省き、唯被仰出候段申渡候段、今日夫々申渡候間、以後御家老方に而も、其段相心得候様月番より演述之事。

二月廿七日。金澤に於いて徳川家齊の女を前田齊泰に嫁せしむべき命を得たることを告ぐ。

〔官私隨筆〕

二月廿七日

一、左之紙面封印に而到來、致下書遣之。

當十八日水野出羽守殿へ淡路守様御呼立に而、加賀守様へ溶姫君様御縁組之儀御内意被仰

出、難有御仕合思召候。此段拙者共へも可申達旨、以市三郎被仰出候段、甲斐守殿等より申來候に付爲御承知此段申進候、以上。

二月廿七日

村井又兵衛

奥村伊豫守様

二月廿七日。郡奉行等博奕を爲す者あるときは一村を連坐せしめんことを請ふ。

〔金龍公記史料〕

二月廿七日。郡奉行小堀政安等連署。請置一人爲博奕一村連坐之法。於是始定博奕連坐律。

二月廿八日。幕府、前田齊廣が在國して病を養ふの請を許す。

〔溫敬公記史料〕

二月廿八日太公在國養病之請見許。

〔諸事覺書〕

三月十三日

一、中將様御痴邪今以爾々不被爲在候付、長途之御旅行難被遊候。依之今暫御在國之儀加賀

本年六月の  
條参照

文政五年十  
二月の條參  
照



前書廿八日  
とあるを是  
とすべきが  
如し

二九〇

守様より御願被成候處、前月廿一日御用番松平和泉守殿御付札を以、御願之通被仰渡候段被仰聞之旨、土佐守より表方へ被達候事。

右に付伺御機嫌之儀、兼而詮議有之、伺之儀無之事。

二月廿八日。前田齊廣が行歩等の爲外出の際に於ける作法を告ぐ。

〔留帳抜書〕

中將様御行歩等御出之節平伏方等之儀に付、土佐守殿より別紙之通り御渡に付、相越之候條、夫々可申渡置候、以上。

二月廿八日

淺加伊織

奥・口村々役人

付札、御郡奉行に

前々御鷹野等御出之節は、各之内被罷出候得共、中將様御行歩等御出候者各被罷出に不及、勿論村役人等茂罷出間敷候。都而御通筋警固足輕等被指止、下々迄も事多無之様被思召候。尤農人等之者仕業を止平伏いたすに不及、在り之儘可相心得候。下々之者共至迄實意程を御見聞可被爲在ため、右之通御身分御事輕被遊候御趣意に候。道橋等茂御出に付修覆に者不及候。乍去農業人-のために候得者、常々手入怠間敷候事に候。

奥口は奥郡  
口郡なり

右之趣被仰出候條、夫々被申渡、類役中は茂可被及演述候事。

二月廿九日 金子通用の手續を定む。

〔觸留〕

付札、定番頭に

御當地金通用方未委候故、是迄は諸切手小判・一步等其名目に應じ相渡來候得共、元來一步判已下二朱迄は小判之小割に而、爲辨別被仰付置候儀に候得ば、以來は都而一株に相立置、金子之分は文字金与申名目、諸切手に何百何十何兩何歩二朱与書記指出候得ば、其節任御在合小判・二歩判・一步判・二朱判之内を以、其金高割合相渡可申上、納方も右に准じ歩判之内上げ人勝手に指上可申。且遠路に御使渡り金之分は、旅用之儀に候間、受取人任斷歩判之内入交相渡可申候。

一、御進物并被下方は、都而御目錄之表之名目に而金子請取申躰に候へ共、以來は御公界向并他國者に被下方之外、御内輪暨御家中等へ被下方之儀は、前段之通歩判之内其節々御在合次第相渡可申候。併一人に百疋与歟申類引束請取申分、二歩金以上相渡候而は割符方指支可申候間、ヶ様之類見計、一步并二朱判之内相渡可申候。

一、是迄御貸渡金返上之内、或百目に付何十目宛与申類には、銀に而返上之分茂有之、區々

加賀藩は銀  
貨を本位と  
いするが故に

に相成居申躰に候間、以來は金借用之分は都而金返上可仕候。是迄右躰銀に而上來候分茂、已來は金上納に可相改候。乃至返上高十匁と申分は、二朱と銀二匁五分と申圖りを以指上可申候。

無數は少數の意

一、銀に而被下方之儀、是迄は都而其員數に包替相渡候得共、是亦御公界向并他國者被下方之外は、百目以上乃至銀三枚と申分は、通用封銀百目・小玉銀二十九匁懸合銀添相渡候へば、包替銀茂無數に相成、請取人に而茂通用封にて受取候得ば辨利に可有之に付、以來右之通相改候。

右之通被得其意、組・支配之人々被申渡、組等之内裁許有之人々は、其支配も相違候様被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之通一統可被申談候事。

癸未二月廿九日

村井豊後守

二月。諸郡手附等の腰明ある羽織を着用すべからざること告ぐ。

〔留帳拔書〕

諸郡手附共途中相用羽織之儀、腰明有之分相用申聞敷旨、去三月申渡置候處、中には以今不相改者茂有之躰に候條、心得違無之様、尙更可申渡候。是以後若右躰及見聞候得ば、急度相谷

可申事。

未 二月

御郡奉行

惣年寄中・年寄並中

二月。芝居の衣裳に華麗のものを着用ふべからざること告ぐ。

〔川上芝居一件〕

芝居懸り

肝煎

近頃は芝居衣裳、次第に宜敷相成躰に相聞え、甚奢侈之至に候。畢竟其方ども穿鑿等閑故と存候條、此度より急度相改、是迄用ひ來候分たりとも結構に相見え候分は指省、成限り古衣裳を以相辨、是非新に拵候分は、随分疵品を用ひさせ可申事。

未 二月

三月十六日。芝居役者・茶屋女の徘徊を禁じ、及び一般婦人の服裝の取締方を定む。

〔官私隨筆〕

三月十六日

御横目

別紙覺書寫之通、町奉行等へ申談候條、被得其意、一統へも爲心得可被申談候事。

三 月

町奉行

近年無急度芝居并茶屋町之儀被申付候處、次第に結構を飾衣裳を飾り、兩所とも人々耳目を悦ばし候形に致増長候躰に候。剩芝居役者并茶屋女、右郭外へも出致往來候躰相聞え候。右之通に而は惣躰之風俗に拘り、御家中下々之女自ら髪・衣服等其姿に似寄申所へ至り候儀、畢竟右芝居役者并茶屋女郭外を致徘徊候故に候。以來右兩所之者共、曲輪外へ罷出候儀、堅く禁足可申付候。此上萬一曲輪外に而見請候においては、召捕可申、假令他之者とても、芝居役者・茶屋女に似寄候髮形・衣服之者は、急度召捕可申候。其上にも手拔等閑於有之は、御次よりも夫々改めに可被指出旨被仰出候條、可被得其意候事。

未三月十六日

村井豐後守

朱書。右十六日御用番豐後守殿御渡候。但御文中に、他之者とても召捕可申との儀は、町方之者に不限、都而之他之者之儀に候哉と、爲念御尋申候處、此通に而町人に不限、都而

之事に而、右兩曲輪外之者とても芝居役者並茶屋女に似寄候髮形・衣裳之者共、町奉行並改方、右於兩手合可召捕与之儀与御申聞に候事。

〔觸留〕

今度芝居役者并兩所茶屋女共、郭之外致徘徊候者等見咎心得方覺

一、他國芝居役者當町に罷越候節等、町役人より右日限爲斷出、一遍之往來迄見通可申候。

其餘茶屋女等郭外に候得ば、裝束花麗之有無に不拘爲捕可申事。

一、町方之儀は先達而被仰渡候之趣茂御座候付、一通品柄宜着類相用候共、花香榮耀ケ間敷粧無之分は、爲相咎申間敷候。

但、紗綾・縮緬着類、并天鷲絨等奢侈成帶相用候は、爲捕可申候。此ケ條縮緬類等十歳以下之女子な  
ど辨利のため相用、榮耀ケ間敷筋  
無之分は、其程見計、相  
咎不申様申渡置候事。

一、品柄格別不宜衣裳に而も、芝居役者・賣女躰之風俗を拵居申者、暨榮耀專に相見得申分爲捕可申事。

一、武士家内与見請候而も、右様不宜風俗有之分、名前爲相尋可申事。

一、子共肩掛は不相成品に而、先年被仰渡も御座候處、當時甚相ゆるみ、二・三歳之小兒迄に而も無御座、十二・三歳之女子縹子・天鷲絨・金紗等之切交之肩懸相用候者も有之躰御座候。

此分も爲答可申事。

一、女照り傘淺黄紙に而張、芝居役者・女形等を爲繪書相用申候。是等近く仕出に而風俗不宜品に付、爲答可申与奉存候事。

三月 月

此分伺之通り与被仰出候。

三月十八日。前田齊廣、竹澤御殿に移るを祝し今明日能を演ず。

〔諸事覺書〕

三月十八日

一、今日竹澤御殿に而御能被遊、右拜見被仰付候付、上下着用朝六半時前罷出、御側御用人を以御禮申上事。

一、五時前拜見所へ相廻候様御側頭申聞候付、各罷越候處、奥御書院御下段へ年寄中一列、其次御家老中一列並居、御上段へ御前御着座、御襖大地縫殿左衛門等披之、御目見御意有之、土佐守御取合被申上、御襖たて、夫より直に見物所へ相廻り御能初り之事。

一、九時過御中入之内、御膳方良左衛門溜に罷越、御吸物等被下候段申述、追付溜において御吸物・御酒・御取肴頂戴。給事席 坊主 畢而良左衛門相招御禮申上候事。

一、七時過御能相濟、各神戸藏人を以御禮申上退出之事。

奥之御舞臺御開御番組

翁	高砂	<small>權兵衛</small>	田	村	<small>二源太</small>	熊	野	<small>御</small>
張	良	<small>千左衛門</small>	祝言金札		<small>佐七郎</small>			

末廣 ゐくひ

〔諸事覺書〕

三月十九日

一、今日も御能有之候付、各上下に而六半時前竹澤御殿に罷出。

一、五時前各見物所に廻候様御側頭申聞に付、見物に罷出。

但、右兩日共御用番豊後守之外は指懸御用も無之に付、例刻越後屋敷へは出席無之。

一、御膳方良左衛門溜に罷出、御内々御菓子被下候段申述。追付各御菓子頂戴。給事席 坊主 畢而以

同人御禮申上候事。

一、八半時頃御能相濟、昨朝之通年寄中等御襖際へ列居、御前御上段に御着座、御襖披之。御目見御上意有之。土佐守御取合申上退候事。

一、溜において玉川二源太を以各御禮申上退出之事。

御番組

翁	白樂天	千左衛門	箆	佐七郎	羽	衣	權兵衛
國	栖	御	祝言弓八幡	鐵次郎			
三本柱	千鳥						

三月廿一日。明倫堂の講書に出席すべき者の日割を定む。

〔觸留〕

毎月講日等之日割

二日朝講日五半時より人持・頭分子弟共、八つ時より御大小將六組・同御用番支配、右之人々子弟共。

但、當番等に而指支候人々は、七日朝夕之内不時に可罷出事。

七日朝講日五半時より、御馬廻六組、子弟共。

但、朝番等之人々は夕に出可申事。

夕八時より御馬廻六組・同御用番支配等、右人々子弟共。

但、晝番等之人々は朝に出可申事。

十二日朝講日五半時より定番御馬廻子弟共八組、組外四組、同御用番支配、右人々子弟共。

但、當番等に而指支候はゞ、十七日朝不時に可罷出事。

夕八時より人持子弟共。

十七日朝講日五半時より頭分子弟共、夕八つ時より社奉行支配、平士、御射手、御異風、町同心、火矢御用、御厩方、新番組御歩小頭、三十人頭、御醫者、御茶堂頭、坊主頭暨諸小頭、同並、新番組御歩、右人々子弟共。

但、當番等に而指支候はゞ、二十二日朝へ不時に可罷出事。

二十二日朝講日五半時より與力、御大工頭、御鷹匠六組、御歩、定番御歩、御鷹役等御歩並、

右人々子弟共。

但、當番等に而指支候はゞ、二十七日朝へ不時に可罷出事。

夕八時より人持子弟共。

二十七日朝講日五半時より御算用者、御料理人、御細工者、町奉行支配町下代・御細工人等、右人々子弟共。夕八時より足輕・坊主・小者子弟共、町・在之者。

五日・十六日・二十五日夕八時より人持之子弟會讀。

四・九晝九時より書生會讀。

素讀毎朝。佳節・朔望・二七除之。

一、御近習之面々は、毎月二十七日夕之外講日出座勝手次第之事。

一、厄介人學校の出座不指支人々は、毎月二十二日朝講日不時出座之事。

一、陪臣之分毎月二十七日朝講日不時出座之事。

以上

人持并子弟會讀に罷出候人々名書、早速學校の差出可申候。且右之人々、若氣滯等に而會讀  
缺座之節は、其時々學校の可及届候事。

一、書生四・九之會讀に平士之面々等心懸罷出候人々は、前方學校承合罷出可申事。

一、講日組當りに其頭・支配人罷出候儀勝手次第之事。

一、都而學校の罷出候人々召連候家來、辨門内外腰掛等に而高聲等不仕、作法能罷在、下馬  
縮足輕差圖之通相心得候様、主人々々より嚴重可申渡事。

一、人持并子弟共、毎月講日聽聞定日之外、二日宛講釋聽聞被仰付候事。

一、頭分右同様一日宛被仰付候事。

一、人持之子弟爲勤學、一ヶ月三日會讀被仰付候事。

但、有祿人も年若之人々忤心懸次第可罷出事。

一、書生四・九之會讀之日、平士之面々、并頭分之子弟、平士子弟共罷出、勤學仕候儀勝手  
次第之事。

但、是迄も本文之通に候得共、此度猶又被仰出候。

右之通被仰出候付、是以後毎月講書定日并會讀等之日割等、別紙兩通之通相心得可申候。來

四月十六日より相改候。十四日迄は是迄之通に候事。

右之通被得其意、組・支配之人々は可被申渡候。組等之内裁許有之面々は、其支配の相違  
候様被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

三月二十一日

横山求馬

三月廿三日。大聖寺侯前田利之參觀の途金澤に着す。

〔官私隨筆〕

備後守様今廿二日御發出、松任御旅宿、明日此表へ御着、廿四日竹澤御殿へ御出、廿五日御發  
出被成候筈に御座候。且又御旅宿へ爲窺御機嫌、各明日退出後罷越申候。御出難被成候は、  
以御紙面御窺可被成候、以上。

三月二十二日

〔温敬公記史料〕

三月廿三日。備後守東親之次過金澤。參竹澤殿觀能。

三月廿四日。竹澤御殿鎮守天滿宮の祭禮を延期す。

〔觸留〕

付札、御横目

竹澤御殿御鎮守天滿宮御祭禮、今年は當廿四日・廿五日に被仰付、參詣方被仰出候趣先達而申渡置候處、廿四日は備後守様竹澤御殿に御出に付、右祭禮廿五日・廿六日右兩日被仰付候。尤參詣方は先達而申渡置候通に候。

三月

付札、御横目

竹澤御殿御鎮守天滿宮御祭禮、當月廿五日・廿六日被仰付候段、先達而申渡置候得共、被指延、來月廿四日・廿五日兩日被仰付候段重而被仰出候。尤參詣方之儀者、先達而申渡置候通に候。

右之趣重而一統可被申談候事。

三月

付札、御横目

竹澤御殿御鎮守天滿宮御祭禮、當月廿四日・廿五日被仰付候段、先達而申渡置候處、御指支有之被指延、來月廿四日・廿五日兩日被仰付候。尤參詣方之儀者、先達而申渡置通に候。

四月

付札、御横目

竹澤御殿御鎮守天滿宮御祭禮、當月廿四日・廿五日可被仰付旨被仰出置候得共、當年は右祭禮御延引之段重而被仰出候。尤來年よりは毎歲二月廿四日・廿五日御祭禮、參詣方之儀は先達而申渡置候通に候。

右之趣一統可被申談候、以上。

五月

三月廿八日。富山侯前田利幹幕府より公役を命ぜられたるを以て加賀藩に助成を求む。

〔諸事留牒〕

三月廿八日

一、淡路守様より御使蟹江監物罷越、年寄中等御口上有之に付、月番豊後守宅右御使者相勤候節、此方罷越、御家老の仰之趣承、年寄中の仰は又兵衛承候事。仰之趣右之通。御家老中の御意

暖氣之砌、加賀守様・中將様益御勇健被成御座、何茂様御安泰被成御座、珍重御儀思召候。各にも御無異に候や、被成御尋候。然ば今般御公務被蒙仰候に付而、御拜借被成御願候。各宜被遂示談候様被成度、被成御願候。委細之儀蟹江監物より可申述候。此段宜申述候様從江戸表被仰付候。

三 月

一、右仰之内蟹江監物より可申述と有之儀、事長故書取を以申聞候由に而左之通。

演述之覺

今般淡路守様、關東筋川々御普請御用被蒙仰、御金納に而御割合高御座候處、過分之御出金高御座候。元來御逼迫至極之御勝手振に御座候。年々打續無御據御物入相嵩み、轟与御指支被成方も無御座候。然處此度御公務御用被蒙仰、如何可被成哉、御當惑御心勞至極思召候。是迄御公務毎々御助成被成進候。且御家中御借免打、御郡には右御用金割符被仰付、其餘御才

覺被仰付候故、是以轟与難澁至極之族御座候得共、御公務之儀に御座候へば不被得止事、御家中御借知并町・在共上納金被仰付候。然し御引足に成候事に茂無之、此上は一向出金之御手段無御座、御心勞至極被成候。且又於其御元様茂御難澁、殊に去年以來莫大之御物入御座候御中、御願被成候儀御意外思召候へども、外に被成方無御座候に付、無御據金子八千兩拜借被成御願候。御返上之儀は、年三百兩充追々可被成御返上候。猶又此末嚴重御省略被仰付、御勝手振少成とも御手繰宜相成候は、其節は御伺候而、増金に而年限を縮め可被成御返上候間、何に而も無相違可被成御皆濟候間、幾重に茂御汲分御聞届被成下候様仕度、偏に御憐察之上、何分にも御願通り御許容被成下候様、吳々被成御願候。

三 月

蟹江 監物

三月。百姓作得米は皆濟後といへども年内は組主付の指紙を添ふるにあらざれば賣拂ふべからざること告ぐ。

〔留帳拔書〕

百姓作徳米皆濟以前指紙相添賣出來候得共、以來は皆濟後に而も年内之分は、組主付より指紙相添賣拂候様被仰渡候。

一、糶米之儀は屑米に付、是迄無指紙に而相辨來候得共、改方に指支候に付、以來は皆濟前



後共組主附指紙相添候様被仰渡候。

右之趣盜賊改方御役所被仰遣候間、爲承知諸郡私より可申談旨、今日廣瀬欣左衛門様より就被仰渡候、爲御承知如斯に御座候、以上。

三 月

石崎彦三郎

諸郡惣年寄中様・年寄並中様

四月五日。一ノ丸御殿以下御廣式の下女にして綿服以外を着用する者は之を逮捕すべきことを令す。

〔官私隨筆〕

四月五日

一、二御丸・竹澤・金谷三御廣式、年寄女中等召仕候下女着服木綿之外着用爲致申間敷旨等、且又芝居見物并茶屋町へも見物に罷越候躰相聞候付、以來は右場所において召捕候様被仰出候旨等、覺書一通、於竹澤御殿被仰渡候旨に而、土佐守殿被出之候付、組等へも可申間置旨、御用番より以添紙而到來、返書出之。

〔御觸拔書〕

二御丸・竹澤・金谷三御廣式年寄女中等召仕候下女着服之儀、木綿之外着用爲致申間敷候。帶

之儀は輕き絹類用候共共通、尤織物類堅く用申間敷候。近年御家中女向服之儀、質朴之儀段々被仰出、就中當春以來御馬廻頭等分而被仰出候趣も有之候。然處三御廣式下女共之中には、宜着服之者茂見當り候之旨相聞候。江戸表より罷越居候下女共、別而服茂宜様に茂相聞候。右等之者を見習候様に相成候而者、御縮方に茂差障り、殊に御家中段々被仰出候上、御廣式向下女着服宜候而者、御不都合之御政事に相成候事に而、年寄女中等急度心得も可有之事に被思召候。依之以後御法に背き候服之者は、御廣式下女に而も召取り禁牢たるべく候。且又芝居見物并茶屋町に茂見物に罷越候者茂有之由。左様之族堅く不相成筈に候處、中に者罷越候躰茂相聞候に付、以來者右於場所召取り候様被仰出候條、此段主人々々より可申渡候。

右之通被仰出、夫々申渡候條、以來若右躰之者有之候者、無泥召捕候様可被申渡候事。

未 四 月

四月十一日。前田齊泰登營して徳川家齊の女浴姫と婚すべき命を得。

〔諸事留牒〕

四月廿五日

一、加賀守様ゆ浴姫君様御縁組被仰出候に付、御書被成下候に付、出席之上各上下に相改、

年寄中等一列於席拜戴。

一、右之通今日加賀守様より中將様被仰上候御使、内記相勤候。御口上左之通神戸藏人を以申上候處、以同人應じ御答之由。

中將様被仰

當十日御老中方御連名之依御奉書、翌十一日御登城被成候處、御座之間於御次之間、御老中方御列座、浴姫君様御事御縁組被仰出候段、御用番水野出羽守殿被仰渡、夫より於御座之間御目見、御懇之被蒙上意、御手自御熨斗御頂戴被遊、難有御仕合思召候。右御普爲聽被仰上候。此段宜可申上旨被仰付候。

四月二十五日

御使 前田 内記

一、今般御縁組被仰出候に付、中將様被仰上意有之、難有仕合に被思召候。可申聞旨被仰出。上意左之通。

幾久敷目出度い。熨斗を。肥前守被仰も心得。

〔官私隨筆〕

依御老中方奉書今日令登城候處、浴姫君様御事手前へ御縁組被仰出、於御座之間御目見被仰付、御懇之蒙上意、御手自御熨斗頂戴之、重疊難有仕合候。此段爲可申聞如此候、謹言。

四月十一日

加賀守御實名 御判

奥村伊豫守殿

〔續徳川實紀〕

四月十一日、浴姫君のかた松平加賀守へ婚嫁の事仰出さるゝに由て、けさ松平和泉守水戸宰相に、大久保加賀守紀伊宰相に御使す。やがて松平加賀守めされて、その事仰出され、御手づから熨斗蛇をおくらせらる。水・紀兩卿祝してまうのぼられ、御對面あり。又上直布衣以上のとらへは、芙蓉間にして宿老列座して、水野出羽守これを傳ふ。

四月十一日。前田齊廣能を演ず。

〔諸事覺書〕

四月十一日

一、今日御能被遊候に付、年寄中等拜見被仰付候間、朝六半時頃常服に而竹澤御殿被罷出候様、昨日土佐守より以廻狀申來候付、各六半時頃より罷出候。

但、御用番求馬・御家老方主附内記・若年寄方掃部儀は、四時より越後屋敷へ罷越、御用濟次第九時過重而竹澤御殿へ罷出。

一、御能七半時過相濟、前後共一木逸角を以御禮申上退出候事。

御番組

養老	吉之助	八	鳥	佐七郎	大原御幸	御
邯鄲	權兵衛	放下僧	二源太	阿	漕	御
羅生門	三五六	祝言岩船	鐵次郎			
蚊相撲	仁王					

四月十三日。富山侯前田利幹公役の助成を求めたるを以て使者に答ふ。

〔諸事覺書〕

四月十三日

一、淡路守様御使者蟹江監物に今日御答可申述候に付、九半時過御用番求馬宅へ罷越候筈に付、御家老方主附一人罷越、先達而御意之御請申述候様、今日月番より演述に付、豊後守并内記・求馬宅へ罷越、御請監物に申述候事。

手扣

暖和之砌御座候處、淡路守様倍御機嫌能被遊御座、恐悅之至奉存候。加賀守様・中將様倍御

本年三月廿八日の條參照

勇健被成御座、何茂様御安泰被成御座、珍重御儀思召候。猶更御安否被遊御承知度思召候旨奉承知候。中將様奉始益御機嫌能被成御座候。然者今般御公務被爲蒙仰候付、御拜借金御願被遊候。委細之儀御手前被申述候様、從江戸表被仰付越候旨、則中將様を奉申上候處、宜會議可仕由就被仰出候、委細横山求馬申述候。將又私共御懇之蒙仰、忝次第奉存候。御請之儀御序を以宜御執成頼入存候。

四月

四月十六日。前田齊廣の女次姫歿す。

〔官私隨筆〕

次姫様御儀、先日以來御勝不被遊候處、今晝過より御指重り、不被成御叶御療養、今十六日申中刻御卒去之旨、從中將様被仰出候段、藤田平兵衛より申越候。先以奉絶言語候。右に付中將様相伺御機嫌、二御丸御廣式へも罷出、直姫様初御子様方御内證様へ相伺御機嫌候筈に候間、御自分様にも御出御伺可被成候。御出難被成候は、夫々御紙面を以御伺可被成候、以上。

四月十六日

横山 求馬

奥村伊豫守様

加賀藩史料 第十三編 文政六年

〔官私隨筆〕

四月十七日

一、左之觸狀御用番より以添紙面到來、返書遣之。

次姫様御氣色御滯被成候所、段々御指重不被爲叶御療養、昨十六日申中之刻御卒去被成候。依之普請は昨十六日より今日迄二日、諸殺生・鳴物等は當二十日迄五日遠慮可仕候。

〔齊廣様御傳略等之内書抜〕

四月十六日次姫様御卒去。同二十一日御葬式、天徳院に御移り、同寺境内に御收りなり。御年御五つ。御法號は立華院殿圓智微笑大姉と奉申なり。御生母は直姫様御産婦之方なり。

四月十七日。金澤田町新町に火災あり。

〔諸事留牒〕

四月十七日

一、九半時頃田町新町出火に付、月番に相達歸宅いたし候處、餘程之大火に而、七時過鎮火いたし候事、百三十九軒焼失。田町新町より出火、天神町・金浦町焼失也。

四月廿三日。藩侯の紋服を拜領したるもの、着用制限に關して令す。

〔官私隨筆〕

是迄御目見以下輕き組柄之人々へ茂、格別之者は規模之ため御紋之品頂戴被仰付候。然處近年猥に寫等もいたし、致着用候族も多有之、別而御目見以下之人々は、外人見入ため猥に致着用候躰有之に付、以來御目見以上之人々と而も、三品以上之外は御紋之御品は被下間敷、御上下等被下候節は、品替り候御紋に而可被下候。尤御表・竹澤御殿一同御同様に候。依之以後是迄致拜領罷在候共、御目見以上に而も、三品以上之外は御定紋之品着用仕間敷候。

但、御近邊之人々に而も、三品以上之外は御定紋之品着用仕間敷候。

一、三品以上御紋付拜領被仰付候其子弟、暨其家代々着用仕來候三品以上に而も、無息之人々嫡子たり共都而着用仕間敷候。父跡目相續仕、其家に拜領有之候得者尤着用不苦候。

右之通夫々嚴重可申渡旨、中將様より被仰出候條、被得其意、組・支配之人々へ可被申渡候。組等之内裁許有之面々は、其支配へも相達候様被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

四月二十三日

横山求馬

四月廿六日。金澤に於いて諸士等前田齊泰の婚約を祝す。

〔諸事覺書〕

四月廿六日

一、今日頭分以上は御弘之趣可申述候間、五時過上下着用二御丸の登城之旨、昨日月番より演述。

一、四時過頭分以上列居、年寄中等調、左之通月番求馬被申述。

但、頭分以上年寄中等宅へ廻勤、年寄中・御家老中・若年寄も月番求馬宅へ爲御祝詞相勤候事。

當十日御老中方御連名之依御奉書、翌十一日御登城被成候處、御座之間於御次間御老中方御列居、溶姫君様御事御縁組被仰出候段、御用番水野出羽守殿被仰渡、夫より於御座之間御目見、御懇之被爲蒙上意、御手自御熨斗御頂戴被遊、中將様も御懇之被爲蒙上意、重疊難有御仕合被思召候。此段可申聞旨、拙者共迄以御書被仰下候事。

四月。能役者及び町人にして藩侯の紋服を受けたる者あるも之が着用を禁ず。

〔於江府御親翰帳之内書拔〕

町奉行の

竹田權兵衛を始他國御手役者、且御當地諸橋權之進等、其外役者之内御紋付被下置候者可有之候間、以來御紋付着用仕間敷候。

但、於江戸表等にも勿論着用仕間敷候。

一、江戸・京都等町人の被下置候分者、御貪着無之候。

一、町年寄を始、御用聞町人等御紋付被下置候者も有之候者、着用仕間敷候。

右之通從中將様被仰出候條、被得其意、夫々嚴重可被申渡候事。

未 四月

御算用場奉行の

御郡方役人暨遠處町人等、御紋付被下置候者も有之候者、着用仕間敷候。

右之通從中將様被仰出候條、被得其意、夫々嚴重被申渡候様、御郡奉行・遠所町奉行等可被申談事。

未 四月

四月。家中に使役する下女の服裝を規定す。

〔觸留〕

御廣式女中召仕候下女着服之儀、今般被仰出候趣に付、都而御家中召仕候下女等衣類も一統同様に相調理可申心得方覺

一、上着は木綿・同糸入島・布并下料成縮之外は爲見答可申事。

一、片重袖・岸島迄下着相用候分は見咎申間敷候事。  
但、本文古び居申品たり共、上着に相用候へば、勿論爲見咎可申、且肌着に長袖縁相懸居申分見咎可申事。

一、帶之儀絹・紬・縮緬之外は爲見咎可申事。  
一、下女之内にも、御家中年寄中を初大身之人々に奥向重立召仕候者、是迄禮服も相用、問着に絹類相用來候得共、以後内輪において禮服之儀は格別、途中徘徊之節は前ヶ條之外絹類等致着用候はゞ、一統同様に爲見咎可申事。  
一、年寄中等家來之内、給人之妻子等、途中又者召連候分は格別候得共、若從者も不召連致往來候節、前條に相拘候族於有之者、一圓爲見咎可申候事。  
右之通相心得夫々可申渡哉奉伺候事。

未 四月  
其通与被仰出候。

四月。石川郡宮腰の醫毛利東後齋篤行を以て賞賜せらる。

〔見聞袋群斗記〕

四月、宮腰醫者毛利東後齋へ御賞あり。東後齋は人となり誠懇慈愛、邑人及び近村之貧者に

調藥を施すこと數十年間なり。奇特者に付布三疋被下る。

五月四日。前田齊廣、諸士の動靜を報告せしむ。

〔親翰留〕

此節組々庶士の体無替候哉承度候。巷説たりとも可申越候。此段侍支配の頭々は其方中より令通達、請書は一役連名に可指越候、目上。

五月四日

御 朱 印

馬 廻 頭 中

小 將 頭 中

五月九日。昨今兩日天徳院に於いて前田綱紀の百年忌法會を執行す。

〔官私隨筆〕

今般天徳院において就御法事、明後七日御寺惣見分有之候間、九時御出宅御越可被成候。尤布上下御着用之筈に候。且又別紙詰割一通差進申候條、御詰可被成候、以上。

五月五日

横 山 求 馬

奥村伊豫守様

〔諸事留帳〕

加賀藩史料 第十三編 文政六年

御内證様は  
前田齊泰の  
生母

五月八日

一、今日松雲院様百回御忌に付、天徳院に六時過提灯に而罷越。中將様御參詣六半時、御供揃五時頃也。御内證様も六時御供揃に而、六半時御參詣、尤御表にかはり申儀無之、御内證に而諷經等御聽聞也。

一、御法事差定左之通、二百五拾僧也。

松雲院殿百回御忌御法事差定

八日

卯刻 轉讀般若

辰刻 献粥諷經 三利諷經

巳刻 法華頓寫

午刻 拈香佛事 献供諷經

九日

卯刻 轉讀般若

辰刻 献粥諷經

巳刻 薦拔上堂

午刻 甘露施食 献供諷經 立塔佛事

救濟大赦 大施行會

〔官私隨筆〕

五月九日

一、六半時過にも候哉、竹澤御殿中將様奥之口御出之附人來、追付各罷出、御法事奉行并土佐守は階下へ被罷出、伊豫守・又兵衛・内藏助・織江・内記は、階上内より右之方中敷居之下に列居、内より左之方は如例寺社奉行初列居也。無程被爲入、御間之内御先立大地縫殿左衛門、直に御裝束之間へ被爲入、御法事初可申哉之旨御法事奉行より伺之、被仰出之上初。

〔溫敬公記史料〕

五月九日行赦。

五月九日。前田綱紀の百回忌茶湯を江戸廣徳寺に修す。

〔溫敬公記史料〕

五月九日。當松雲公百回忌。供茶湯詣廣徳寺。

五月九日。辰巳上水江筋の取締方を定む。

〔御觸拔書〕

辰巳上水江筋の塵芥等捨申間敷旨等之儀に付、別紙御普請奉行出候に付、寫相越之條、被得其意、組・支配之人々の嚴重可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配の茂相違候様被申聞、尤同役中可有傳達候事。  
右之趣可被得其意候、以上。

五月九日

奥村内膳

覺

一、辰巳上水江筋の塵芥捨申間敷事。

一、穢敷品等洗流暨洗足杯堅く仕間敷、并草履・草鞋等捨申間敷候事。

一、猥水汲取申間敷事。

但、若火事之節は格別之事。

一、小立野石引町通り江筋玉縁之上を往來いたし、踏荒申間敷事。

一、江筋通り御普請會所石垣上石等取はづし申間敷事。

右辰巳上水江筋の、爲御縮方水道裁許足輕等爲見廻、右之族於有之は、嚴重に見咎候得共、中には心得違之者も多有之躰。當時は竹澤御殿御園中の御水入、無程御泉水有之所の塵芥等流込候而は、甚不敬之儀に御座候間、以來急度心得違無之様、御家中末々并寺社門前町・町近

き百姓等迄、急度相守候様一統被仰渡可被下候。且又右江筋御普請會所之内石垣上石取はづし、毎度不時成損所出來、第一御不益之筋に御座候。都而右様之心得違之者見請次第爲召捕候筈に御座候間、此段茂被仰渡御座候様仕度奉存候、以上。

未四月十三日

横山義六郎

村田九郎右衛門

大久保覺兵衛

津田木工

横山求馬様

五月九日。御郡方惣年寄以下に麁服を着用すべきことを命ず。

〔留帳抜書〕

百姓分衣服之儀、木綿・布之外堅く着用不相成、惣年寄・年寄並之者は紬御免被成置候得共、近年格別被仰出候趣茂有之候間、成限麁服可仕候。猶又今度御廣式女中等召仕候下女着服之儀に付譯而被仰出之趣、且右に付當町奉行并盜賊方より見咎方之儀に付相伺候覺書共都合三通御渡に付、爲心得寫相越之條、得其意、家内末々迄急度相心得候様可申談候。若此上心得違之人々も有之、他之手合より見咎候而は、於拙者共申譯茂無之儀に候條、是等之處能々可



有心得候、以上。

五月九日

竹内作左衛門

惣年寄中・年寄並中・新田裁許中

山廻り中・無役御扶持人中

五月十三日。金澤町奉行、新に町名を命じたる理由を前田齊泰に上申す。

〔於江府御親翰帳之内書抜〕

粗承り候處、町奉行より申渡、當城下町之町名唱替之儀申渡候躰に而、殊に數箇處之様子に相聞え候。右者何等之主意に而相改候事に候哉、下々數年來唱來り候町名多く相替り候事故、甚混雜に而、下々迷惑之趣も可有之、其上右等之儀者前廉聽にも達可申儀に候處、何等之趣も不申聞候。各には前廉相達候哉承度候。各にも不相達儀に候はゞ、町奉行如何之存寄に候哉、町奉行手前相尋可被申越候、以上。

五月十一日

奥村内 膳殿

御城下町之町名唱替之儀申渡候躰御聞及に付、右は何等之儀によつて相改候哉、委曲御達可申旨、御急書を以被仰渡候趣承知仕候。右町名之儀、往古とは段々町數相増申候處、新に町名

本年五月の  
條參照

付申儀も無御座候付、下々に而其近處之町名を以唱來り申故、數町一名に而唱來候處多御座候付、公事場において吟味方之者有之候同類等申顯、又は何町何屋誰と申者重而召出候迄、私共に差預申段申越候節、町役人の申渡相糺候得者、一町名之内に同名□□二人も三人も罷在申儀有之、何れ共難相分□□不殘縮申付置、其段公事場申遣、申顯候本人手前与得糺、重而何与歟相分り候儀申越候迄は、縮仕置候付、如才も無之者においては誠災難に逢ひ、如何計心勞仕儀に付、隨分同名之者無之様に申付置、組合頭一手合之儀はしらべ方出來申候へ共、他之組合に相成候而は何分行届不申。其上致改名候而も、輕き者に而者兎角前々より之名前を呼來申故、其詮無御座。此儀は畢竟町名細に無御座、數町一名唱來申故、自分同名之者も罷在申儀。且又一町名之内に而、肝煎兩三人之裁許分れ居申箇處も御座候付、壹人之儀に付肝煎兩三人も呼立僉議不仕而は、誰裁許之者と申儀相知不申。彼は私共手前において甚煩敷儀に御座候へ共、是迄折も無御座哉其儘に相成來申に付、何卒折も有之候はゞ町名細に付け、肝煎裁許交り居申□□申様に町名改め申度心付罷在候内、去春於御場人見吉左衛門より御城下繪圖改正被仰付候由にて、町方之分分間を以下繪圖出來差上候様申談候付、前條之趣共申達、幸ひ序に御座候間、此度相改指上申繪圖には町名無之箇處等、新に町名付け上申度旨相達置、町役人之内主付申付、丁間等巨細相改、所割繪圖に爲認、前々より有之

町名は墨書に仕、新に付申町名は付札に朱書仕、一往御普請奉行の差遣、彼方にて一篇しらべ有之、承知之上吉左衛門を以差上申節、朱書付札に仕置候町名、新に付可申分に御座候段申達置、其後追々出来之分も右之通仕差上、漸く前月皆出来仕、不殘差上申候付、此間町名改め候町々の申渡、先達而御郡地町支配に被仰付候箇處之通當分□家々柱に町名書記爲出置申候。右□有之中比より中絶いたし居申箇處は、古名に爲立歸、或は唯今迄下々に而唱來表立不申分、直に其町名に申渡候箇所茂御座候。都而町人共は町名を以分ち申儀に而候間、武士之組杯を糺し申同様に御座候。此儀各様々、去年七月枯木橋番人之儀に付、別紙通御達申置候付、分而は御達不申。此度彌相改候上、一通り書面に御達申候而は、粗分り不申に付、一枚繪圖認上置可申与、當時爲取懸置申候へ共、未出来不仕候。右町名相改候趣意御尋に付、委曲御達申候事。

五月十三日

町奉行

五月十七日。江戸等へ使人として派遣せられたる者がその周旋者に贈物をなすの慣習あるを戒む。

〔御觸拔書〕  
定番頭の

江戸表等の御使人、此表發足前并於江戸表等御使相勤候付、取持等いたし候者共々、是迄贈物有之、雜費茂相懸り候様子相聞え候。甚風俗不宜事に候間、以來指定候公儀御役人之外、御内輪向之儀者堅指止候様、御使人等々可申渡旨被仰出。

右之通被得其意、組・支配之人々々可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配の茂相達候様可被申聞候事。

右之趣一統可被申談候事。

五月十七日

村井又兵衛

五月十七日。諸士の轉役・組替若しくは處罰せられたる者ある時は之を竹澤御殿に届出づべきことを命ず。

〔御觸拔書〕

御横目の

御家中之人々御歩並以上、是以後轉役・組替・御谷被仰付候節等、都而竹澤御殿拙者席の可及届候。尤頭分以上者直に相達、平士以下は其頭・支配人より可相達候。右之趣一統可被申談候事。

五月十七日

前田土佐守

五月廿一日。前田齊泰登營して徳川家齊の女浴姫と婚約の成れるを謝す。

〔温敬公記史料〕

五月二十一日登城謝許婚。大將軍賜刀一備前國吉岡一文字代金五十枚。

〔續徳川實紀〕

五月廿一日、松平加賀守御許嫁を謝してまうのぼり、白銀・卷物をさゝげて見えたてまつる。御盃に吉岡一文字の御刀を下さる。

〔諸事留牒〕

五月二十八日

中將様宛

當二十日御老中方御連名之依御奉書、翌二十一日御登城、於御黒書院御縁組御禮被仰上、御懇之被蒙上意、御盃・御肴御頂戴、其上御腰物御拜領之。且又西御丸にも御登城、於御座之間内府様宛御禮被仰上、御懇之被蒙上意、御手自御熨斗御頂戴、重疊難有御仕合思召候。右御普爲聽被仰上候之段、御口上宜申述候。

五月二十八日

御使 御家老

五月廿五日。前田齊廣能を演ず。

中將は前田齊廣

〔諸事覺書〕

五月廿五日

一、今日御能被遊候付各拜見被仰付候。依之六半時不遲上下着用竹澤御殿へ可罷出様、廿三日夕土佐守より廻状有之。仍而今朝右刻限より各竹澤御殿へ罷出、揃候上一木逸角を以御禮申上。御能七時過相濟、神戸藏人を以御禮申上退出之事。

但、月番内膳は四時より九半時迄越後屋敷へ相詰、主附内藏助・若年寄掃部儀も越後屋敷へ可罷出候得共、今日は御用も無之に付初終竹澤御殿に罷在候事。

御番組

翁 竹生嶋 千左衛門

忠 則 佐七郎

警願寺 権兵衛

三 笑 御

祝言弓八幡 二源太

唐相撲 小傘

以上

五月廿八日。竹澤御殿に時鐘を掲げ、次いで之を改鑄す。

〔官私隨筆〕

加賀藩史料 第十三編 文政六年

本文は奥村伊豫守の手記に係る

五月廿八日

竹澤御殿に時鐘堂出来、鐘も出来、今日釣り候由に而、今朝四時頃尻垂坂之方賑敷候付、庭へ出見候處、坂上り、御殿へ参り候跡之躰也。右に付祭獅子杯も御殿へ入候躰也。右鐘兩三度も鑄直し候由沙汰有。

〔歳々略暦〕

未五月廿八日竹澤御殿釣鐘改而懸る。油木山吹屋吹申事。鳴り不申故中居に而吹直り、是も鳴り不申。夫より野町釜屋吹直す。

〔歳々略暦〕

當五月竹澤之鐘油木山釜屋にて吹上候へども、一向鳴り不申に付、能州中居にて吹直り、七月廿八日より海づたひにて八月朔日大野浦へ上り、夫より金澤地車に引凡目形七百貫目なり。是も鳴不申。

五月。金澤の一部町名を改む。

〔又新齋日録〕

一、文政六年五月金澤町中町名紛敷、數町も同名之所有、小名不相分所々有之に付、此度唱替等相改候ヶ所左之通。

八月四日の條参照

只今迄森下町上の方卯辰町

只今迄木倉町後町与申所

只今迄安江町上の方

同下の方

只今迄乘善寺上地町与申所

只今迄材木町与申所

但一丁目は天神町境木戸に御座候。三丁目備中町入口迄に御座候。

只今迄下材木町与申處

但四丁目は備中町境に御座候。七丁目は橋場町境木戸迄に御座候。

只今迄上今町之内

只今迄常福寺上地町

只今迄塩屋町の内山根町入口より坂の高迄

只今迄河原町之内堅町筋三宅良雄前橋より片町出口木戸迄

森下町

大藪小路

上安江町

下安江町

元乘善寺町

材木町一丁目より三丁目迄

材木町四丁目より七丁目迄

山崎町

元常福寺町

清水町

龜澤町

木新保荒町

只今迄上荒町与申所

加賀藩史料 第十三編 文政六年

只今迄木新保町之内  
 只今迄木新保町之内  
 只今迄上荒町木新保町之内に仁隨寺前通  
 只今迄安江木町の内安江町木戸より安江木町上の木戸迄  
 是迄安江木町上の木戸より専光寺辻迄  
 同専光寺辻下の木戸迄  
 是迄六枚町  
 是迄折違町之内圖書町入口小路  
 只今迄經王寺前之内小名七軒町与申處  
 是迄土取場之内小名立丁与申所  
 小名永順寺の小路与申所  
 同穴町与申所  
 同中町与申所  
 同奥小路与申所

木新保既町  
 木新保次田町  
 木新保仁隨寺前  
 舛形  
 白銀町  
 英町  
 南六枚町  
 原町  
 經王寺前横町  
 土取場永町  
 同一の小路  
 同二の小路  
 同三の小路  
 同城端町

同左京殿町与申所  
 同こんか町与申所  
 同川縁与申所  
 是迄百々女木町後町に而小名安藤町与申所  
 同安藤町魚谷の所  
 是迄仰西寺横小路  
 是迄田町新町与申所  
 是迄笠舞新町事  
 芝居座圍の内  
 是迄長門町  
 是迄後傳馬町  
 是迄後傳馬町  
 是迄下傳馬町  
 同斷

同 屏風小路  
 土取場間の小路  
 同 しもく町  
 裏百々女木町  
 わらや谷  
 三所町  
 田町新道  
 長柄町  
 石浦新町二丁目  
 川上末吉町  
 北長門町  
 南長門町  
 裏傳馬町  
 俵町  
 七寶小路

同 斷

笠舞中組入口の小路

次の小路を

又次の小路を

只今迄石引町後町

只今迄欠原町小名一本松

是迄柿木町と唱候田町西光寺邊

是迄吹屋町与一名に唱候同所うら町

是迄田井新町与唱候内山伏乾貞寺邊

是迄田井新町与唱候内鈴見橋邊より下横山又五郎下屋敷邊

上は横山求馬馬場先上の高町家より下火矢所前橋迄

是迄淺の川々除町と唱候内上は火矢所前橋より下は橋場町地境迄

只今迄四丁一番丁

茶 木 町

笠舞一番町

同 二 番 町

同 三 番 町

裏 石 引 町

一 本 松

田 町 藪 の 下

吹 屋 う ら 小 路

山 伏 町

川 端 町

淺 野 川 々 除 町

並 木 町

木 町 一 番 町

同 二 番 丁

同 三 番 丁

觀音町入口木戸より飴屋彌三郎横入込迄兩側

同愛宕鳥居小路より觀音院門前迄兩側

同飴屋横入込より愛宕鳥居小路迄

野町一丁目下立町大蓮寺後口通

針屋町より大蓮寺後立町

桂岩寺向小路より

融山院上小路より

妙法寺上の小路

本因寺横小路

上 舟 渡 邊

法 照 寺 前

惣名三社町之内

只今迄三社五十人町二番町目

同 二 番 町

同 三 番 町

觀 音 坂 下

觀 音 大 工 町

助 九 郎 町

元 哲 町

上 野 田 寺 町

下 野 田 寺 町

堀 込 町

石 伐 町

長 良 町

吹 上 げ

五 十 人 町

玕德寺町  
 福留町  
 三社中町  
 三社河岸  
 三社九折  
 垣根町  
 山田町  
 中橋町  
 中橋橫小路  
 廣岡町  
 長田町  
 古道  
 木揚場  
 小柳町  
 金戸町  
 只今迄折違町  
 右 同 斷  
 只今迄古道町  
 右 同 斷  
 野町三丁目小路是迄石坂町  
 同四丁目小路右同斷

是迄後泉町

是迄本光寺上地町

小名三つ屋

是迄六斗林町

同町之内開禪寺町

是迄木の新保新町の内

只今迄下荒町

只今迄木新保新町の内

東西山上町相改

南北山上町相改

是迄大衆免町

同

同

同

上芦中町  
 下芦中町  
 本光寺町  
 沼田町  
 林町  
 三七町  
 糸倉町  
 豊嶋町  
 木新保竹町  
 森山町  
 上田町  
 大衆免中通  
 大衆免片原町  
 大衆免穴町  
 大衆免西町

同 大衆免井波町  
 同 大衆免横町  
 同 大衆免浄光寺町  
 同 大衆免龜淵町  
 是迄大衆免龜淵町  
 大衆免七曲り  
 大衆免堅町  
 西養寺町  
 西養寺一の小路  
 西養寺二の小路  
 西養寺三の小路  
 卯辰西養寺前  
 卯辰誓願寺前  
 法船寺町  
 廣小路  
 富本町

是迄元如來寺町  
 是迄四町三番町  
 是迄四町二番町  
 是迄法船寺町之内下傳馬町境より廣小路迄  
 同廣小路の間鑿屋迄  
 同鑿屋小路より帶刀町行當り迄

是迄公儀町・大豆田町建込

同公儀町善照坊前通

同油車町山伏延命院下より帶刀町出口の間

是迄馬場先入口小路より竹田市三郎請地後邊迄

是迄神谷町之内帶刀町より神谷町之横町之間

高儀町入口立町より谷町之横町の間

是迄神谷町等之内善照坊横町うら通り

是迄藪田町小堀牛右衛門請地道より織田主膳請地入口邊迄

織田主膳請地入口より下の方

是迄馬場片原町

大衆免町の内

高儀町  
 元車町  
 犀川馬場先  
 元車町  
 穴車町  
 神谷町  
 谷町  
 大豆田町  
 藪田町  
 犀川馬場先  
 平折町  
 上町  
 中町  
 下町



吹屋町裏通り

只今迄堀川々除町の内

右同所之内

只今迄堀川片原町

只今迄新堀川の内

新堅町一丁目より四丁目迄

新堅町之内

只今迄牛右衛門橋町

是迄高岡町の内四軒

立川町

浅野吹屋町

若松町

浅野町

水車町

中嶋町

下浅野町

堀川淵上町

堀川間の町

堀川笠市

堀川知覺寺前

小鳥屋小路

丸太町

惣構四つ屋

是迄長殿向土橋与申處

是迄東末寺橋与申所

是迄塩屋町土橋与申所

是迄下材木町橋与申所

是迄袋町橋与申所

是迄下近江町橋与申所

川上新町一丁目二丁目

川上藤棚

川上松本町

川上舟場町

川上井嶋町

川上屋町

川上平野町

是迄御門前町之内御厩御門下より不明御門迄

不明御門より十間町石橋迄

高岡町橋

極樂橋

塩屋橋

玄蕃橋

問屋橋

せつたい橋

川上富山町

川上梅枝町

川上菊川町

川上角場河岸

川上中の町

川上平野町

川上屋町

川上井嶋町

川上舟場町

川上松本町

川上藤棚

川上新町一丁目二丁目

川上袋町橋与申所

川上下近江町橋与申所

川上東末寺橋与申所

川上長殿向土橋与申處

松原町

西町

十間町石橋よりせつたい橋まで

青草河岸

六月朔日。前田齊廣、竹澤御殿に能を催し家中をして觀覽せしむ。

〔齊廣様御傳略等之内書抜〕

六月朔日、竹澤御殿於御舞臺御能被仰付、御家中一統拜見被仰付候なり。

六月上旬。遠藤高璟測晷盤を竹澤御殿に献る。

〔金澤時鐘記〕

測晷盤記

臣高璟謹按。時刻者惟定於太陽。故測日行。則時刻自明矣。文政三年夏四月。臣創製測晷盤。副之正時版。而正其鍾行焉。此器也。太陽自既出至已沒。雖霖雨雪霽之間。苟視太陽直可得時刻。其置之也。從北極高度斜絡其盤。使安之而仰俯方向不失其正矣。其秋視授時解。有澁川春海所說百刻環之圖。臣之所製。雖與其圖形象少異。而其用則如合符節。今茲有命城鐘時法之改正。使臣主製測刻之器。因造此器。恭進呈。臣誠惶誠恐頓首頓首。

文政癸未夏六月上澁日

中謝長臣遠藤高璟謹誌

六月廿七日。兩替商發行の銀預り手形を改造し御算用場に於いて引替を

保證すべきことを告ぐ。

〔御觸拔書〕

付札、定番頭々

近年御當地兩替御用聞之者共、銀預り手形遣候儀承届置候處、右手形印紙手馴候に付、相改相渡候様致度旨願出候。依之此度重々遂詮議、彌手堅取扱候仕法に取極、萬一兩替に而引替指支候節者、於御算用場可相渡旨申渡候條、以來御家中并町・在より、都而上納方等右手形指上候儀不指支候間、無滯受取候様、會所等都而上納取立候向に被申渡候條、可被得其意候、以上。

右之趣一統可被申談候事。

癸未六月廿七日

村井豊後守

〔齊廣様御傳略等之内書抜〕

六月より御領國中銀札通用之儀被仰渡なり。百目札は長け七寸四分計、幅三寸七分計、紙はあいたけ紙之様之物なり。文之字すかしすきたる紙なり。右銀札裏にくゝりと云を押なり。是れは取遣之時各名印を記候事なり。御銀裁許は香林坊下升屋次右衛門・酒屋宗左衛門兩人なり。右銀札地之内にも右兩人之名前調有之なり。寶曆年中重教公御代通用之銀札も如此物

なり。此度之百目札も右に准じ申よし、予承祖之祖父之物語承るなり。

六月。河川に於ける砂利採取等のことに關して令す。

〔御觸拔書〕

定

一、御家中等并町方より砂利取候儀、川除御普請際より五間計除取可申候。勿論御普請會所  
に無斷取申間敷事。

但、夫石・栗石・砂之儀は、前々之通御用之外取申儀不相成事。

一、川除際に塵芥等すて申間敷、川中に出捨ながし可申事。

一、川除馬行・篋・竹籠等之中詰石、拔取申においては、急度各可申付事。

一、川除籠等之上、殺生人・水游人踏荒し申間敷事。

一、川除御普請之節、繩張之内に込入込申間敷事。

右之條々堅く可相守者也。

文政六年六月

御普請會所

六月。難破船の救助に關して告ぐ。

〔留帳拔書〕

公儀御城米等積船難破船暨諸商船難船等之儀は、其時々波浪風雨等之様子によつて破船方不  
一樣事候得共、其内甚危難に迫り上陸之者は、先不取敢助命之手當厚取扱可申事に候。其時  
宜に寄御賄・病用等之儀、御上より被仰付儀も可有之候。併難船之始末、自然船頭等手前奸  
曲之儀も難計候間、此所入念承糺、始終之様子も得与相考可申出候。尤御米并積物之儀は大  
切成儀に候條、取揚方等綿密に取扱、御縮方嚴重に可相心得候。且又難船方に付所方雜費も  
多相懸候様子候條、是等は幾重にも令省略、萬端易簡相心得可申。御郡奉行等出役之上は、  
猶更可指圖候得共、指懸急切之心得方、右之趣兼而浦方等役人共可申渡置候。  
右之趣被得其意、各以後取扱方之儀本文之通可相心得候、以上。

六 月

御 算 用 場

金谷佐太夫殿

關屋平馬殿

六月。博奕を行ふ者ある時一村に過怠免を課する舊制を復すべきことを  
告ぐ。

〔御郡典〕

付札、惣年寄・年寄並に

加賀藩史料 第十三編 文政六年

博奕かけ之勝負は、民之産業を破り、家を失ひ身を亡す基に候。依而古來御制禁に付、御郡方之者共不埒之參會、博奕に似寄候事たり共、都而賭之諸勝負に携り不申様、前々嚴重申渡候得共、心得違之輩密々致參會候儀相顯れ、咎申付候者不少候。別而近年被仰出も有之、其時々格別に申渡候處、右躰之族於拙者共に無申譯次第に候。右に付先年一作過怠申付候儀有之候へ共、及中絶に候間、以來爲懲過怠免申付可然趣相伺候處、可爲伺之通旨被仰出候段、今般御算用場より申談に付、改而左之通申渡候條、可得其意候。

一、博奕宿いたし候者有之節、一村之者より斷出候得ば、宿元・同類之者相糺、曲事に可申付、過怠免之沙汰に不及候事。

一、博奕宿等いたし候儀一村之内より不申出、後日外より相顯れ候においては、詮議之上本人は牢舍申付、其上一作過怠免可申付候。無高處は右に準じ過怠錢爲指出可申事。

右之通申談候上は、年若之者抔毛頭心得違無之様、村役人共急度懇に可申諭候。畢竟是迄村役人共之内、示方不行届儀も有之哉と相聞得、等閑之至に候。向後急度相心得、惡敷風俗に爲携不申様、常々厚く可申談。若其上にも隨ひ不申者於有之には、速に斷可申。自然油斷いたし、過怠免之沙汰に至候時は、其事に不交者共甚心外之事に候間、人々相互に致吟味、少に而も博奕躰之所行及見聞に候はゞ、早速村役人へ申斷、村役人より夫々可申達候。

右之趣末々迄不相洩様、急度可申渡者也。

癸未六月

御郡奉行

諸郡村々役人

七月四日。新番森順之助他出し日を経て還るを以て祿を禡はる。

〔金龍公記史料〕

七月四日新番森順之助。爲岩丈出行。至十六日歸。因病淹滞者。乃責其違令。禡俸米。更給七口俸。閉居後許外出。而嘉永五年十一月出奔。六年四月歸。五月入之檻。六月瘦死。

七月五日。家中居屋敷周圍の道路修理を命ず。

〔觸留〕

付札、定番頭

御家中之人々居屋敷廻近年道惡敷相成、火事等之時分馬上之人々指支申躰に候。其上御道筋茂難計、都而往來道惡所々修覆可申付候。就夫近く道造候ヶ所も有之候所、申談無之候故高低有之、別而火事等之節馬上人々甚指障に相成候條、一樣に相成候様相心得、修覆可申付候。

一、侍屋敷植木、往還之道筋へ枝葉茂り、持鍵等障り申所有之由に候間、枝葉伐可申事。

右之趣前々より申渡候處、近年猥に相成候條、急度相心得可申事。

右之通一統可被申渡候事。

七月

別紙之通夫々可申談旨、御用番求馬殿被仰聞候條、御承知被成、御同役御傳達、御組・御支配御申談可被成候。且又御組等之内裁許有之面々は、其支配にも不相洩相違候様御申談可被成候、以上。

七月五日

御 横 目

七月八日。犀川及び淺野川の川除地取締に關して令す。

〔觸留〕

一、犀川・淺野川々除際之塵芥捨、且竹籠等之上殺生人等致往來、別而夏中は水游人多、御普請所を踏荒、甚猥成儀共に御座候に付、是迄御達申上、一統被仰渡御座候得共、未々心得違之者も御座候躰に而、中には川除土居之土を掘取、石垣等之石を抜取申者も有之、不埒至極成儀に御座候。且又殺生之品により瀬違仕、川形に相障、塵芥も多く捨、後には張出之如くに相成、御普請所水當り悪敷相成、不時成損所も出來、第一御不益之筋に御座候。其上今度掃除等之儀も被仰渡候處、右等之趣に而制方行届不申候間、古來之通り所々に別紙寫之通札を爲建申候間、此上若心得違之者有之においては、不得止事爲召捕候。川廻り之者に而行

届不申候間、盜賊改方役人爲相廻候筈等、兼而申談置候。猶更心得違之者無之様一統被仰渡御座候様仕度と存候、以上。

癸未五月二十四日

津 田 木 工 判

村田九郎右衛門 判

遠所御用 横山藤六郎

遠所御用 大久保覺兵衛

奥村内膳殿

一、犀川・淺野川々除方之儀に付、古來之通札相建候旨等別紙之通御普請奉行申聞候に付、寫相越之候條、被得其意、組・支配之人々之嚴重可被申渡候。組等之内裁許有之面々は、其支配にも相違候様被申聞、尤同役中可有傳達候事。  
右之趣可被得其意候、以上。

七月八日

横 山 求 馬

七月廿九日。江戸邸内に藩米精製所を設け、諸士に之を用ひしむべきことを稟議す。

〔諸事留〕

文政四年より不時御廻米被仰付、御屋敷内に搦場被仰付、詰人之内御米相望候者に爲入立來候處、今度夫々仕法も相立御達申置候趣有之候付、別紙之通一統に相觸申度奉存候間、夫々被仰渡之様仕度奉存候、以上。

七月廿九日

山口清太夫

岡田太兵衛

前田源兵衛

大嶋三郎左衛門

大村友右衛門

長 甲斐守様

前田修理様

此表近年諸色高直に付詰人高飯米、文政四年より不時御廻米被仰付、御屋敷内に搦場被仰付、諸色屋拾二人に右御用申渡候間、御國米望之人々者相用ひ可申候。尤不望人々者、町米勝手次第に相用ひ可申候。是迄御國米相望來候人々は只今迄之通に候得ども、是以後御米相望度人々者、左之通小紙に調、諸色屋に直に申談候得ば、諸色屋より御省略御内用方に申達筈に候。

精成は精製なるべし

一、米精成悪き儀有之、給人より諸色屋に申渡、其上にも不宜候者、其段御内用方に及斷、諸色屋立替可申事。

一、米直段之儀は、御扶持方代渡月之前月、年行司相場平均に増升加相渡可申候。右取極候直段は、御扶持方代渡月五日前に、諸色屋より一統に觸廻り候様可申渡候事。

一、米代取立方は、乃至六月朔日より八月中迄入立之分、九月十日迄に諸色屋に相渡、同十五日迄に諸色屋より上納可致候事。

一、御米相用罷在、交代等に而御國に罷歸候人々、發足迄之米代勘定相立、諸色屋に相渡可申事。

一、米代取立候節、しらべ方爲入用、米通帳取立可申候間、諸色屋より申達候は、相渡可申候。披見之上相返可申候事。

當時相動候諸色屋名前

米屋 伊兵衛 伊勢屋彌兵衛 近江屋勘四郎 川越屋久五郎

伊勢屋善兵衛 伊勢屋六兵衛 上總屋茂兵衛 越後屋長吉

米屋六兵衛 三河屋助右衛門 近江屋清七 柴田屋四郎齋門

×十二人

右之通相極候事。

未 七月

七月。閉門中の士の町會所貸附銀返納方に關して告ぐ。

〔觸留〕

付札、定番頭

文政元年御家中五百石以下之人々の町會所より貸附銀、翌年より五ヶ年賦を以取立來、當年に而皆返上之趣。右之内閉門被仰付置候分、上納方一類より返上之筈に候得共、何茂可爲迷惑に付、今般僉議之上、當時閉門中之人々は今年分上納に不及候條、追而御免之御沙汰有之候上早速上納可有之候。且又是迄退轉人たりとも、一類より返上仕來候得共、退轉人之分は被下切に申渡候。勿論御答被仰付置候共、御知行等被下候人々は上納可有之候。右之趣被得其意、夫々可被申談候事。

癸未 七月

八月朔日。前田齊廣の女忠姬名を壽々姫と改む。

〔齊廣様御傳略等之内書抜〕

八月朔日、忠姬様御名壽々姫様と御改之儀、肥前守様より被仰進なり。

〔官私隨筆〕

八月五日

一、忠姬様御名御様子有之、壽々姫様と御改被成候旨、從中將様被仰出候段、藤田平兵衛演述之由。御用番より以紙面申來。

八月四日。金澤城内の時鐘を竹澤御殿に移し今日より十二割の法に因りて之を撞かしむ。

〔官私隨筆〕

八月四日

一、今度於能州鑄直候竹澤御殿之鐘出來之由に而、昨日釣撞候處、又々音不宜、依而今日甚右衛門坂之鐘御引寄、八時より撞候也。是迄之時刻と違、七半より六迄之間打餘り無之、日出日入之時刻に而十二時當分に撞候旨也。

〔鐘銘〕

銘略。

文政六年癸未十月六日拈筆於黃金澤水之上。

七十八齡臣富田景周頓首謹識

本年五月廿八日の條參照

當分は等分なるべし

銘文は本年十月廿七日に擧ぐるものに同じ

御作手  
左方總管  
鑄物師

能州鳳至郡中居

天明苗裔

北村重兵衛藤原朝臣國重

下職人 福光清五郎藤原國次

同 北村藤八郎藤原家次

維時文政六癸未歲九月

〔金澤時鐘記〕

今般御時鐘所御時法御定之儀被仰出、測刻之御道具新に被仰付候に付、私共被仰出候趣并伺之品等、以後右御用筋に拘候人々心得にも可相成哉と調置申候。

御城時鐘所には迄御時法御定無之、鐘撞足輕前々申傳候はからひの法を以時刻相極候に付、御時鐘折々不順成儀有之、御殿向初諸向時刻を量候惑ひに相成、其上六時之時刻以前とは餘程之差も有之舛相聞え候。如此年々時刻差ひ多く、勝手に任せ候貌に相成候而は、萬端指障候に付、今般御時法御定之儀被仰出候。是迄一晝夜之初刻相極らず候に付、以來子之中刻と

定香は定香  
盤なり

相定、朝夕六時之時刻相極らず候に付、以來冬至晝夜同刻、則晨昏限度十三度有奇に相定、晝夜時刻之儀相極らず候に付、以來一時に不同無之様六時宛に相定、晝夜長短之刻數并日限等不相極候に付、以來二十四氣及其中都合四十八氣之刻數を相定、年中四十八度日時を定め相改。其外是迄定刻之法目分量を以相極、御定香・御自鳴鐘を以時刻を量候得共、目分量に而時刻を定候儀は粗法に而、其上定香・自鳴鐘は遅速有之品に付、以來時刻を極候には晷を測り相定め、時刻を量候には垂球・正時版相用ひ可申旨被仰出候。右之通夫々被仰付候に付、以來御時法之趣相心得候而時刻を量候へば、慥成心圖りに相成、其上時規等相用候人々は、假令御時鐘聞不申候共、面々之時刻おのづから御時鐘と致符合候譯にて、世上一統之爲難有儀に御座候。尙亦今度御定之御時法と、是迄鐘撞足輕仕來之時法と差之様子、其外寛政十年以來御時鐘を聞候而時刻之不同を量置候品、并晷を量り時刻之不順を記置候圖等、末々相認申候。

右諸事御用、於御次私共被仰付、殊に愚製測晷盤・正時版御取用に相成、冥加至極難有次第に奉存候。御用向彼是多端之儀に御座候處、同役等茂無之に付、去春以來金澤分間御繪圖御用に而私宅に相詰、御用相動候西村太冲・河野久太郎、目下理兵衛・早川理兵衛等へ、右御用向伺之上申談、御時規等夫々出來、竹澤御殿御時鐘所御用之分共、都合二通指上申候、以



上。

文政六癸未年

遠藤數馬高璟

八月六日。町會所仕送り銀の貸附に關して告ぐ。

〔觸留〕

付札、定番頭

一、町會所仕送り之人々暮方いかにも艱難に相暮し、圖帳之表相守、不時入用等成限り受取不申様可相心得旨等、先達而嚴重被仰出候趣も有之候處、今以心得方不宜者も有之躰に而、色々無據趣等申立不時顯多、中には身上不相應之貸附高に相成、一圓勝手取直し候期も不相見得、仕送被仰付置候證も無之候。元來勝手之厚薄を以見計、右躰過分之貸附高と可相成人々には、何程無據儀有之候とも容易に不時顯承届申間敷所、左様之見圖りも無之貸渡候故、不相應之貸附高に相成候儀、第一町會所詮議方甚不行届之趣に付、以來貸渡方嚴重可相心得旨、此度改而町奉行に申渡候趣も有之候之條、頭々手前においても猶綿密に可有僉議候。右之趣爲心得申間候條、頭・支配人の寄々可被申渡候事。

未八月六日

八月十一日。貯藏の鐵炮及び彈丸に就いて調査すべきことを命ず。

〔諸事留牒〕

八月十一日

一、左之通伺之處、伺之通被仰出。

當時御鐵炮奉行手合御貯用之御鐵炮は、寶曆九年御類燒之砌之燒筒を御修覆之御筒に付、假令最前玉目四々三分之燒筒を御修覆仕候へば、四々五・六分に相成申候而、御類燒以前之御筒とは玉目たかく相成居申候。然處御玉藏は御類燒無之故、往古より御貯之玉に而、當時之御筒に合申間敷、御筒に應じ不申而者御貯之證も相立兼申儀に候間、御鐵炮奉行之内一人、玉藥奉行之内御異風組より一人主付被仰付、兩人に御内々御しらべ方被仰付候様仕度旨、中島誠左衛門申間候。右誠左衛門心付之趣尤に相聞申候間、兩人主付被仰付に而可有御座哉。御鐵炮奉行之内に而は、今村源助右等之趣能會得仕居申候間、主付被仰付可然旨も誠左衛門申間候。玉藥奉行之内御異風組者、今村源左衛門迄に御座候。彌被仰付候趣に御座候は、源助・源左衛門可申渡哉と僉議仕奉候。猶更被仰出次第奉心得候、已上。

八月九日

内記

八月十三日。前田齊泰の夫人入輿の後幕府より贈らるゝ金品に就いて議す。

〔諸事留牒〕

八月十三日

一、御守殿御引移之上、公方様より三千兩に五千俵被爲附候筈之所、其砌に相成右は御斷被仰出、其替り御預地より之金納御免之儀御願可然之旨、江戸表僉議之趣申聞候通与被仰出。御預所金納、是迄一年三萬七千兩計也。右之通相成候へば二千兩計之御益之由申候。却而不宜、御不益之儀出來之儀も可有之哉之由也。尙聞番方に而僉議之上、宜時分申込候様子之事。

八月十五日。前田齊廣能を演ず。

〔諸事覺書〕

八月十五日

一、出仕之人々列居、年寄中等謁、退出候事。  
一、今日御能被遊各拜見被仰付候條、二御丸出仕相濟候上、竹澤御殿に罷出候様一昨日土佐守より廻狀有之。各四時過罷出、大地縫殿左衛門を以御禮申上候事。  
一、御能暮六時過相濟、一木逸角を以御禮申上、他龜次郎様御能初而拜見被仰付候付、以同人右御禮申上、各四時過退出候事。

御番組

浦嶋	吉之助	女郎花	二源太	雨月	權兵衛
小督	三五六	土蜘蛛	他龜次郎様	通小町	佐七郎
望月御	融	權兵衛	附祝言		
歌仙	鳴子	吹取			

八月十八日。江戸邸大風の爲に毀損せらる。

〔諸事覺書〕

九月三日

一、前月十八日曉江戸表大風に而所々損所夥敷、御屋舖内も所々風損有之、五十年來之大風与申沙汰也。右に付甲斐守等相伺御機嫌候由之事。

八月廿三日。時鐘を正時刻割としたるを以て大工等の就業時間を改む。

〔御觸拔書〕

定番頭

時鐘之儀、今般正時刻割に御改に付、御作事向等大工・日用夕七時に相仕廻候而者、輕き者共難儀之筋茂可有之与御厭被爲在、仍而是以後八半時仕廻に被仰付候。併是迄八時之休有之

八月四日の  
條参照

由に候得共、右之通八半時に相仕舞申事に候條、右休は指止、九時食休より八半時迄直に仕事相働可申。勿論八半時前より手を明仕廻致用意罷在候歟、暨諸丁場仕事初之儀油斷之筋於有之者、嚴重見咎可申候。

右之通被仰出、御作事奉行等々申渡候付、爲承知申達候條、被得其意、組・支配之人々被申聞、組等之内裁許有之面々は、其支配に茂相達候様可被申聞候事。  
右之趣一統可被申談候事。

八月廿三日

村井豊後守

九月六日。竹澤御殿水道脇御門の開閉に就いて告ぐ。

〔御觸拔書〕

竹澤御殿水道脇御門、一切に相成有之候處、右御門内に御用水水枡有之、御作事奉行支配に而、右手合之者時々御城中に之水懸引罷越候節指支候に付、右御門日之内爲開置、右御用之者可致出入候。然上は年寄中等茂致往來候様被仰出候。依而明七日より各往來不指支候。右御門は三御丸格に候條、都而從者方其心得可有之候。併主人不召連、從者まで罷通候儀者不相成候。

但、若火事之節夜中御門明居候は、平日往來不指支人々、罷通候儀不苦候事。

右之趣爲御承知申達候事。

九月六日

九月十三日。前田齊廣能を演ず。

〔諸事覺書〕

九月十三日

- 一、今日竹澤御殿に而御能被遊候付、右拜見被仰付候。仍而今朝五時前定服に而罷出候様、一昨日土佐守より廻狀有之に付、各右刻限に罷出、御側頭を以御禮申上事。
- 一、今日伺御機嫌候日に付、相揃候上御側御用人を以相伺候事。
- 一、御能暮六半時頃相濟、御側頭を以御禮申上、各退出。

御番組

伏見	二源太	敦盛	吉之助	熊野	權兵衛
弱法師	御	鐘	他龜次郎様	盛久	權兵衛
船辨慶	御	亂	佐七郎		
瓜盗人	苞山伏	狐塚			

九月廿四日。前田掃部若年寄の職を禡はる。

〔金龍公記史料〕

九月廿四日。罷前田掃部孝亮若年寄。以有違旨之事也。

〔溫敬公記史料〕

十月廿五日。前田掃部以不副旨免若年寄。織江兼之。

十月八日。盜賊改方に陪臣等を召喚する際の帶刀に關して議す。

〔官私隨筆〕

十月八日

一、左之紙面封印付に而到來。

但、今夕近江守殿病氣之見廻として、彼方へ罷越候所、歸候途中に而請取之。

改方へ陪臣・給人たり共呼出之節は、勿論一通り尋之品に而も、刀・脇刺差添候者へ引渡、無刀之儘呼出可申候へ共、身に不拘品相尋候節は脇刺爲帶可申旨、有賀甚六郎申上候付、其通り可被仰渡与思召候。猶更了簡も無之候哉被聞召度候。第一御縮方之爲に候間、罷出候者共其所會得仕候者、身分之階級にも拘不申との思召候旨被仰出候。先年公事場檢使前に而、同席家來帶刀之儀に付僉議候趣、其節右場奉行へ申渡、其後帶刀いたし候。此度之儀は檢使前

前書と日附  
を異にす

之儀とも違候付、何も了簡無御座旨可申上と致示談候付、此段爲御承知申進候條、思召も有之者可被仰越候、以上。

十月八日

村井豊後守

奥村伊豫守様御紙面之趣致承知、尤存寄無御座候、以上。

十月十一日。諸士の配下に不行狀の者ありとの風聞あるも確實ならざる時は前田齊廣の内聽に達して指揮を受くべきを告ぐ。

〔觸留〕

組・支配之内不行狀等之儀、風聞承り候而已に而、不慥候故指付難加異見品有之候者、其段達御内聽候与御指圖可被遊候。此段同役共の申含、組・支配有之諸頭等可致演述旨被仰出候事。

十月

右十一日神戸藏人の被仰出候。組・支配有之面々者、御用番等之内申談、御請之趣引請申上候事。

十月十二日。前田齊泰初めて撰甲す。

〔溫敬公記史料〕

十月十二日始着甲冑。有澤才右衛門相之。

十月十五日。前田齊廣幕府より鶴拜領の特典を與へられたることを老臣に告ぐ。

〔諸事留牒〕

十月十五日

一、月番豊後守申聞候は、中將様御儀御隠居之後公邊御機嫌御伺之儀も無之、餘り御疎遠之儀に付、暑寒御機嫌御伺被遊度之段、水野出羽守殿迄被仰込候處、暑寒御伺之儀は、至而重き御儀に而御聞届難被成。依之鶴御拜領之儀は、紀州大真様にも御例御座候間御拜領可被仰付。左候へば右御奉書之内に、公方様御機嫌克被爲入候儀も有之候間、公邊之御様子も御承知被遊候段、出羽守殿被仰。則當三日淡路守様御呼立に而、御書取水野殿御渡被成候。右之趣何も御吹爲聽被遊候由に而、年寄中々之御眞翰被成。右御親翰月番より拜戴申談に而拜見仕、恐悦月番迄先申述、縫殿左衛門も御禮且恐悦も申述候事。  
一、右に付今日退出より直に竹澤御殿に罷出、以神戸藏人恐悦申上候處、以同人御意有之候事。

吹爲聽は吹

一、右御親翰左之通。

家督中は暑寒以宿次蒙御尋、其節公邊御機嫌之御容躰も近々敷奉承知候儀、當時之身分に而は左様之儀も無之に付、何卒公邊御機嫌之御容躰も近々敷奉伺度、左候得者此上之御奉公と奉存候旨内意之趣、水野出羽守殿迄申達置候處、被達上聞候哉、前月三日出羽守殿方淡路守殿被召呼、内意之趣に付格段之以思召、以來國許に鶴可被下儀も可有之旨、御書取を以被仰渡、誠に以無存懸仕合、冥加に相叶難有仕合に候。是迄當家に無之規模之儀、外々之而目不過之、重疊難有仕合に候。右之次第各々吹爲聽申入度如此候、謹言。

十月十五日

肥前守

長 甲斐守殿

前田土佐守殿

村井豊後守殿

横山求馬殿

奥村内膳殿

村井又兵衛殿

十月廿四日。諸奉行の職務を行ふに誠實を専らとすべきことを告ぐ。

〔觸留〕

諸奉行人等正路に無之品茂有之候故、下役人之内奸曲成者、依怙最負に依而、色々不筋成品共有之段被聞召候。奉行人等不正候得者、下々邪智之者其風に應候様、種々謀計を巧候而、身分々々之利を而已事といたし候故、正直成生質之者茂自然其風に押移、富者は彌富、貧者は彌貧に相成候。支配之人々之諸願、或下民之爲与申立、或上之益杯与申出候事にも、右様之品有之、却而風俗を害候段、其奉行・下役人等不心得之至に候。依而急度御糺可被成候得共、是迄之儀者御有免被成候條、以來諸奉行人等暨其下役人も、萬端正路に相心得、少茂依怙最負仕間敷候。是以後若不心得之者有之候ば、曲事可被仰付旨寛政元年被仰出、其節諸奉行等申渡候通に候。然所近來諸役所向を始、下役共申分に任せ置、御用取捌方不行届、其上囑託賄賂之儀も有之躰粗相聞え候。右様之儀有之候得者、下々不正之糺方可行届様無之事に候條、先達而被仰出置候趣違失無之、嚴重に相守候様可申渡旨、重而被仰出候事。

癸未 十月

別紙寫之通、當廿四日御用番豊後守殿御覺書御渡、御請上之候様被仰付候條、被得其意、同役中傳達有之、御歩中にも被申渡、夫々御請被取立、追而拙者共迄可被指出候事。

癸未十月廿六日

十月廿七日。竹澤御殿の新時鐘成る。

〔齊廣様御傳略等之内書抜〕

十月廿七日竹澤御殿時鐘被仰付、今日出來、野町釜屋四郎兵衛方にて出來なり。右竹澤御園之内時鐘被仰付、正時刻割に御改、澤田義門・遠藤數馬兩人に右刻割主付被仰付。夕七時は是迄之七つ半前に打、何歟心圖り違ひ世上之人こまり候由。御作事杯是迄七時には仕廻候得共、正時刻割より八半時に相仕廻候事に相成候なり。

〔鐘銘〕

粵稽古漏刻。肇軒轅氏而宣夏商云。周禮有挈壺之制。並悠邈措而不鑿焉。蓋本朝時鐘之彰。孝德天皇大化爲濫觴。歲躡疆圉協洽。尋灼然令式。如自鳴鐘以測。自慶長而取捷便者也。在我金城。則以承應改元爲置鐘之起原。然後一百有七十餘甲子。晷々不斷矣。伏惟。費太公嘗爲世次不可闕。雖享統位位。而天資鳴謙。不躬自以德處。在其大任也。嚮耻于内非但一日。故至嗣亦從生。客冬爲之遂發擔挹之隱志。讓提封三圍國於冢嗣今侯。營別殿離館於城東竹澤之地而遷之。永養嗣不顧藩鎮之貴也。然侯貴庚未滿志學。故大君以瞻々台命。要攝侯而秉治柄。國卿大夫亦切勸之。太公猶尙欲辭之。而仁情之不忍。愍國民之失父母。不得已而從之。舉擢忠良。貶黜悖惡。遍布名教於方内。殫扇仁風於芻蕘。於是乎苛刻澆漓之俗遠絕。而迄雖犬馬

蒙帷蓋之恩。懽心之所結。百姓謳歌。仰萬壽於南山。盛也矣不矣。丁斯時太公以爲。城鐘所  
實。輒一口。單音不洎通都。而朝儀之於遲速。衛士更直之於上下。或農商之於出入。凡國事百  
期。動輒易愆。是以乃歲命曼氏。新鑄洪鐘。別選金澤金水相生之地而鑄之。且陶汰前來運算  
之推差。分天之賸錯。垂正範於萬世不窮。使號信人人不惑也。猗不亦慈渥之恩舉哉。臣景周  
恭承殿旨爲之銘。其辭曰。

龍臺正尾。金墀直東。列嶽鍾秀。流泉玲瓏。遐襟湖瀛。遐枕疇田。翼軫可摘。嘘吸通天。  
名苑嘉樹。瑞英珠聯。奇禽鶴鶴。維翥維翺。玄寰丹闕。寶神僊居。爰命曼氏。側嶽鑄虞。  
仰弗觀象。坐俾時明。鏗鐸瀏澆。蒲牢吼聲。奚翅唯雉。響徹周聽。四民百爾。出入罔惑。  
惇仁之設。永定遺則。矧揆圭臬。革從前忒。忽絲以詳。盈縮歸匡。龔勒昭德。錫恩無疆。

原文十二月  
に作る

文政六年癸未冬十二月初吉拈筆於黃金澤水之上。

七十八翁臣富田景周頓首謹識

文政六年癸未十月

御鑄物師 村山四郎兵衛正久

十月廿八日。前田齊廣能を演ず。

〔諸事覺書〕

十月廿八日

一、今日竹澤御殿において御能有之、又兵衛・内藏助御能被仰付候段、此間御側御用人より  
申聞候付、兩人共今朝六時過御殿に罷出、又兵衛熊野、内藏助國栖被仰付、相濟御意有之、  
兩人より御禮等之上暮六時過退出。  
但、首尾書委細略。

十月晦日。竹澤御殿の新時鐘を今日より撞かしむ。

〔官私隨筆〕

十一月朔日

一、竹澤御殿時鐘、先達而被仰付候處、聲音惡敷重而被仰付能州中居に候處、又不宜、再往  
被仰付、同所に而其後數を不定折々つき候也。いまだ時は不撞、其鐘之銘富田痴龍翁に被仰  
付、當時彫刻にかゝり居候由。且又於野町も鐘被仰付、前月十九日鑄之。其日自分上口札場  
へ行歩に罷越居候處、高煙火事のごとくに見え候也。炭火之由也。右之鐘前月二十七日に鈞  
候而、夜前九つより時を撞候也。鐘樓は最前辰巳外御門之脇塀之内へ有之候處、今度は藤田  
平兵衛向御鎮守之邊に出來候。時刻も七半以後之打餘り無之、晝夜ともに六時平等に打候  
也。

是月は小盡  
なり

十月。遠藤高環正時版を前田齊廣に献る。

〔金澤時鐘記〕

正時版記

夫察時刻者。爲人世之要務。故國家置時鼓設時鐘。使之知也。蓋爲測刻之器也。古有漏刻。後世有尺時規自鳴鐘。而愈精且便也。然觀其用法。當晨昏之時窺日光之微白。以定晝夜之刻。或香篆以佐之。是皆以目意而涉臆度者也。加之自晨至晨。或自昏至昏之刻。日有長短。得百刻者鮮矣。豈不以算測而有得其正哉。是以不揣愚陋。造斯器改定刻之法。號曰正時版也。其製。臣積年量城鐘。冬至晝夜之刻無有長短、以爲昏明之界。乃使西村篤行算二十四氣暨其中之晝夜長短刻。篤行因嘗所測之金澤府北極高度。推之最詳矣。是以纖悉界畫于版面。而副十二辰一百刻之圖。其用法。則當太陽南中之時測其晷。以定午正之刻也。晨昏自餘之諸刻。自可得其正。蓋午正者。其晷易測而無游氣之碍。且其一周恒無長短而得百刻之正。故定時以午正。此務要簡便而不失其正也。若其鍾行与日行不得密合者。宜升降垂球以正焉。添餘刻於百刻之上下者。爲便歸鍾也。今茲有命城鐘時法之改正。又新設時鐘於竹澤殿。使臣主治知時用器修造之事。且命曰。從前城鐘之報時也。且夕自七鐘至六鐘之一時。比諸他時各有餘殆半時許。不可有如此不同。但晝夜昏明之界。則宜取舊式之宐而定矣。臣謹奉命。上之以嘗

所造之正時版暨測晷盤也。其製作不容易。臣以在劇職不遑他。故令所關於嘗有命製金澤府地圖之事者。西村篤行。河野通義。日下自明。早川正身等。姑寢事而戮力。參訂以成業於此者也。臣誠惶誠恐頓首頓首。

文政癸未冬十月□朔日

中謝長臣遠藤高環謹識

十一月朔日。前田齊廣、幕府より鶴拜領の特典を與へられたることを諸士に告ぐ。

〔諸事覺書〕

十一月朔日

一、今日御弘之趣。

中將様御家督中は暑寒宿繼御奉書を以被爲蒙御尋、公邊御機嫌之御容躰も被爲聞召候。當時に而は左様之儀も不被爲在候故、何卒公邊御機嫌之御容躰御近敷御窺被遊度御内意之趣、水野出羽守殿に被仰達置候處、御格段之以思召、以來御國許に鶴御拜領可被爲在旨被仰渡、是迄御家に不被爲在御規模之御儀、難有御仕合被思召候。且右鶴御拜領之節は、御奉書以文段公方様御容躰之御儀も有之、暑寒宿繼御奉書御同様之趣に付、御趣意通にも御叶被遊、別而難有被思召候。此段先一統に可申聞旨被仰出候。



十一月五日。前田齊廣、頭分以上の士の鳥構を行ふことを禁止せしむ。

〔覺書〕

一、鳥構殺生之儀、無役平士之人々誠に身堅に仕る儀は格別、頭役に被仰付候人々は、鳥構堅可爲御停止候。山々に人々構場を定候事を御停止被仰付候旨被仰出、一統申渡。  
右被仰出之趣御親翰左之通。

元來近年風俗等之儀申出候節、鳥構之儀は、頭分以上は不似合所行に付指留可申とも存候得ども、是まで有來候事故先其儘に致し置候得共、相考候處、品は違候得共、於公邊騎射杯は無役之面々計にて、當家にては頭役に相當り候身分に被仰付候上は、御用之外は自分には決而不仕事に相成居候。是は若輩之業ゆるゑの儀与存候。然ば鳥構などは別して卑賤之業にて、無役平士之若き人々誠に身固に仕候は格別、頭分にては甚可恥所行に候間、以來頭役に申付候人々は鳥構堅く可爲停止候。右業を好候人々は甚張込、得物の數を争ひ、春秋其時節には其事のみ事といたし、實に奉公よりも勝りたる張込、若輩なる振舞不心得之至に候。元來岩乘之爲に候處、自分に不罷越節は家來杯も遣候儀茂有之躰。然ば實に無用之事に候。依之以後頭分以上は堅く指止可申候。右等之趣夫々可被申渡候。右に付是迄山々に人々構場を定名札有之躰、數年成來り之事に候得ば、是等は甚難心得趣候間、以來構場を定候事を令停止可

申候條、名札有之場所々々取拂之儀可被申渡候。且又川殺生・網殺生ともに、右に准じ心得も急度可有之事に候。畢竟殺生に張込申儀は、奉公等閑之心得与存候條、此段夫々可被申渡候、以上。

十一月五日

村井又兵衛殿

猶以右之業家老共などにも有之躰候間、各より急度指止候様可被申渡候。名札之儀有之候はゞ、先各家老共より早々取拂ひ可被申候。

右被仰出之趣に付、鳥構場之儀は是迄之通り被成置、鳥構之儀は以來増長不仕様、尤家來など遣候儀、嚴重不相成趣被仰出候段申渡候而は、如何可有之哉之旨等詮議之趣相伺候得共、前段被仰出候通り指止候儀可申渡旨等被仰出候。

十一月六日。前田齊廣能を演ず。

〔諸事覺書〕

十一月六日

一、今日竹澤御殿に而御能被遊候付、各拜見被仰付候條、服紗小袖・上下着用朝六時罷出候様、一昨日土佐守より廻狀有之、各六時過罷出。

一、各相揃候上神戸藏人を以御禮申上、五時頃御能初前一統御目見被仰付、御意有之、土佐守御取合申上、御襖たて、夫より直に見物所に列座。追付御能初り、御中入之節御膳奉行席に罷出、今日御祝之御吸物等被下候段演述、御吸物・御酒・御取肴頂戴、大地縫殿左衛門を以御意有之。七時頃御能相濟、一木逸角を以御禮申上、御吸物等頂戴候御禮御膳奉行を以申上、同刻過何茂退出之事。

御番組

翁 弓八幡 權兵衛 箆 吉之助 吉野靜 佐七郎  
鷺 御 祝言岩船 鐵次郎  
末廣 財寶

十一月十六日。德川家齊、前田齊泰に鶴を贈る。

〔溫敬公記史料〕

十一月十六日。大將軍遣使。賜放鷹所獲鶴。

十一月十七日。小松の陶工粟生屋源右衛門を九谷より呼戻さしむ。

〔加賀陶磁考草〕

小松中町 あは屋源右衛門

右之者、若杉陶器所始め候節より罷越、竈焚藥懸等見習、相應に用立候處、前月上旬より、大聖寺御領九谷与歟申所に而陶器竈取立候に付、其方に罷越居申由承及候。彌罷越居候哉被相糺、罷越居申候得者、沙汰之限に候條、早々呼戻し、右職指構、他行可被指留候。右風押移候而者、若杉陶器方手薄相成候間、早速可被相糺候、以上。

十一月十七日

御算用場

富田 九内殿

〔加賀陶磁考草〕

小松中町 粟生屋源右衛門

右之者、若杉陶器所始候節より罷越、職方手習相應に用立候處、大聖寺御領九谷与歟申處に無斷罷越居、不届之儀に付呼戻、右職指構、他行留御申渡置候得共、今度御指解候條、此段申渡、尤以來心得違之儀無之様、嚴重に可申渡旨、當廿二日御紙面之趣承知いたし、則申渡候、以上。

申八月朔日

富田 九内

御算用場

申は文政七年

十一月廿二日。東本願寺焼失したるを以て郡方の者の上京し又は寄進することを禁ず。

〔留帳抜書〕

付札、御算用場奉行に

今度東本願寺焼失致候に付、御郡方等之者共致上京、或は寄進等いたし候儀堅無之様、急度可相心得旨申渡候様、御郡奉行に可被申談候。且遠所町奉行等に茂、此段夫々急速可被申談候事。

未十一月

別紙寫之通可申談旨、御用番年寄中被申聞候條、被得其意、急速夫々可被申渡候、以上。

未十一月廿二日

御算用場

木梨左兵衛殿

井上與兵衛殿

追而急速先々可被相廻候、以上。

今度東本願寺焼失に付、勸化方之儀堅無之様、別紙之通被仰渡候。此節一向宗寺庵追々致上京候躰相聞え候。右に付指懸り旅用等門徒共に無心申出候儀も可有之、先以本山に之勸化、

非常之事に付無餘儀追々相動候儀可有之、假令旦那寺より不相勸とも、門徒之内本山火災之儀格別に存込、寄進銀張込候族も可有之哉。既に先年本願寺類焼に付、諸郡之内身元不相應之寄進いたし候者も有之。且一時には勸化銀相増候故、申談勸化年割に相極、近く迄年々指出候向も有之躰。是等は別而百姓之憂不少儀、畢竟申談棟取候者も有之故之儀与相聞え候。信心に事寄、身元相應之者は不及申に、難澁之百姓等を相勸、沙汰之限りに候。近來寺庵勸化銀之儀に付急度示方申渡置候通に候條、別而今度之儀は末々迄堅心得違無之様、綿密に可申渡候。若密々寄進之沙汰於承及には、夫々相糺無用捨手當可申付者也。

癸未十一月

御郡奉行

鹿島郡村々役人

十一月廿四日。前田齊廣能を演ず。

〔諸事覺書〕

十一月廿五日

一、昨廿四日内藏助儀竹澤御殿に而能被仰付、拜見も被仰付候旨に付、朝五時過より右御殿に罷出、兼而望月被仰付候旨御内意被仰出、今日望月相勸、御意有之、暮六時過退出候事。  
十二月十七日。前田齊廣風俗の改善に關する要項を老臣に示す。

内藏助は津田氏

十二月十七日

一、大地縫殿左衛門・一木逸角越後屋敷へ罷出、於奥之間申述候は、近年御家中風俗等之儀、追々被仰出之趣各様御承知之通に候。就右近頃組頭御前近く被爲召、組之人々教諭方之儀等段々御僉議被仰付候御趣意は、近年風俗等之儀段々被仰出も有之候故、少々充心得方も取直り候様に被思召候。乍去下々輕き者共に至迄、御上御實意之所を奉會得、一統思召之程難有奉存候處へ至不申而は、全御趣意には難相叶儀に候。其故は上下一體之理に候へば、御家中諸士等之内心得違之人々有之候へば、手足之滯有之と同理之儀に被思召候。依而御家中諸士・陪臣之輩に至迄、御上御趣意通り全く會得仕候様被遊度思召に付、此度御ケ條書を以組頭へ被仰出候趣有之、尙又存寄之趣も御尋被遊、思召通りに相違之品々は別段被仰出も有之候而、諸頭之人々御趣意通り全會得仕候様教諭之儀組頭へ被仰付候。依而各様にも御組・御支配等も有之、且御人々家中等御示方御心得も有之儀に付、右御箇條書等拜見被仰付候。委細は口達を以申上候様被仰出候。御不審之趣等も候はゞ一々御尋可有之、其上に而右被仰出之御趣意通り、御實意之所御組・支配等之人々全く會得仕候様寄々御教諭有之、思召通り全く被爲行届候様可申談旨被仰出候由。右御ケ條書之大略左之通に候。

一、近年風俗等之儀、段々被仰出候儀も有之故、諸頭初童部敷風儀少は取直候様にも思召候。猶又油斷無之、御趣意通り全く會得仕候様可申談事。

一、萬歳之儀に付當春被仰出候儀有之候。是等は誠に不用之品に而、好み候而見物仕候儀杯は、心有者は可耻之儀に被思召候。追付其折にも相成候儀、猶更違失無之様可申談事。

一、賭之諸勝負は、元來御停止に候へば、必不可然儀に候間、急度心得も可有儀に候。猶又相弛み不申様可相心得事。

一、鳥構之儀、近頃嚴敷被仰出候。不限此儀、諸殺生之儀は誠に卑俗無益之儀に而、可耻所業に被思召候事。

一、能・囃子之儀は、禁裡・將軍家等押立候御作法之節杯必被仰付候品に而、琴・三味線杯と一樣に相心得候儀に而は有之間敷と被思召候。中には存違候輩も有之様に聞召候事。

一、琴・三味線之儀は甚不面白品に而、御家中諸士家内之者杯稽古等之儀は不可然被思召候。何れにも右段々被仰出候品々は、御上之御好み不被遊儀に候へば、下として不仕候儀に思召候。是等之所得与會得仕候へば、必可仕筈は無之儀と被思召候事。

右組頭へ被仰出候御ケ條書之大要に候間、各にも被奉承知、御趣意之通會得可有之候。尤不審之品も候はゞ可被申聞候事。

十二月廿六日。前田齊廣能を演ず。

〔諸事覺書〕

十二月廿六日

一、今日竹澤御殿に而御能被遊候付、各拜見被仰付候間、常服に而朝五時前より罷出候様、昨日土佐守より申來候付、各同刻罷出、相揃候上神戸藏人を以御禮申上。

一、五時過御能初候付、拜見所へ相廻候様御側頭堀久左衛門申聞候付、各拜見所へ罷出、御能暮六時相濟候付、大地縫殿左衛門を以御禮申上、退出之事。

御番組

竹生鳥

權兵衛

箆

二源太

羽

衣

佐七郎

枕慈童

吉之助

盛

久

千左衛門

小鍛冶

他龜次郎様

融

御

附祝言

寶之槌

木六駄

釣針

十二月廿六日。本多勘解由政事を議するを以て減知逼塞を命ぜらる。

〔官私隨筆〕

十二月二十六日

一、今夜六半時頃、内膳殿より自筆之紙面を以、於土州宅申渡之者有之候間、立會として追付土州より被申越次第可罷越之旨被申越、五半時頃重而以紙面、如右にては相後れ可申候條、追付罷越候様にと被申越、兩通とも竹澤御殿より被指越候。落手之旨申遣之、追付土州方へ罷越候處、本多勘解由へ申渡之品有之、呼出紙面遣被置候旨也。御横目莊左衛門・奥村新左衛門罷越。

勘解由は本多政養

一、九半時過勘解由參出、土州・自分列座、御横目兩人指引にて申渡之。被仰出之趣左之通。

本多勘解由

右勘解由儀、自分之才力に誇り、辯舌を以理を非に申なし、彼是御政事之害に相成候儀有之、沙汰之限に被思召候。御大恩を忘、不忠之振廻に候。陽廣院様仰にも、命亡事有共大恩に換候へば私之非身体、生死君に可任与被仰置候。然ば幾重共可被仰付儀に候へども、其段は御宥免、本知高之内三千石減知、逼塞可被仰付旨被仰出候。

十二月二十六日

右覺書被相渡候處、拜見之上段々嚴重成被仰渡、謹而奉畏、奉迷惑至極旨御請有。

一、右畢而八時頃歸宅。

加賀藩史料 第十三編 文政六年

一、右は此程鳥構之儀は下輩之所作之旨被仰出有之候處、左候は、先達而以來學校出座并稽古等之節、供數減少之儀被仰出、其通意得候へども、是以下輩にあたり可申に付、せがれ供數杯以來減申間敷。左候へば稽古等にも出し申間敷候様に、同席四・五輩へ申入候と之趣達御聽候故、如此被仰付候由、土州話也。

十二月廿九日。前田齊廣風俗の漸く改まれるを喜び、更に明春を待ちて人持組にその意を傳ふべきを命ず。

〔官私隨筆〕

十二月廿九日

一、先達而以來、御家中風俗等之儀段々被仰出之儀有之候處、風俗改り候品も有之、一段之儀被思召候。猶此上人々信實に會得仕、自分之思召通之心得に相成候様被遊度。依之頭分等へも先日以來段々被仰渡之次第有之。人持中へも夫々可申聞旨被仰出候處、今年は月迫に相成候付、來春へ掛可被申談旨被及御請候。依而近日御箇條書寫相渡可申候條、先爲心得被申聞由、御用番内膳演述。

十二月。鳳至郡新崎の肝煎次郎右衛門等孝行を以て賞せらる。

〔溫敬公記史料〕

十二月。賜孝子鳳至郡新崎肝煎次郎右衛門終身一人口。越中高岡蓮花寺屋傳右衛門米三苞。

十二月。諸郡に用水の打銀を減額すべきことを命ず。

〔留帳抜書〕

諸郡打銀之儀詮議之趣有之、當春已來申渡候通に付、先用水入用方自郡打銀等遂指引詮議候處、郡々草高懸り過分高下有之候。尤右高懸り諸郡一樣に可有筈者無之候ども、大躰平均之姿無之而は、不心服之郡も可有之。是等之所より諸郡打銀願莫大に至り候儀も有之哉。畢竟用水普請等詮議方不綿密、入用高先年より与は過分之増方成來り儀与被存候。依之用水入用之儀、已來は諸郡共自郡打銀高、草高百石に付三十五貫計に而相辨候様詮議方有之べく。乍併其時々之見圖、無據右に相増候謂有之候者、諸郡打銀を以加銀可相渡。用水方之儀は、其元中に而可有詮議、先達而申渡候通りに候條、右普請見圖銀精誠相減、高懸り下方迷惑之筋無之様穿鑿可有之候。道橋普請等之儀茂右に準じ、追々可遂詮議候、以上。

癸未十二月

小堀八十太夫

山森雄次郎

諸郡惣年寄中・年寄並中

文政七年

正月元日。前田齊廣年頭の賀を廢し、齊泰は在府中に屬す。

〔金龍公記史料〕

正月。不受朝賀。

〔溫敬公記史料〕

正月元日。頭分以上登城謁年寄中。

正月四日。射初・乘馬初の儀を行ふ。

〔諸事覺書〕

正月四日

一、今日御射初に付、年寄中等鬘斗目・上下に而五半時頃登城。

一、四時過柳之御間に而御射初、年寄中等列座、同半時過相濟。

御弓初之次第

吉田左門 原佐右衛門 中西松之助 石黒平九郎 小西秀之丞 大窪藤右衛門 坂倉善兵衛 矢嶋誠八 松崎市右衛門 八嶋貞右衛門 古澤又右衛門 石丸八郎 片岡彌三郎 松

原彌一右衛門 奥村六三郎 毛利判平 根來勘藏 平田淺之助 矢嶋善右衛門  
十九人

正月四日

三輪仙太夫

丹羽澤右衛門

〔諸事覺書〕

正月四日

今日御馬乗初。毛附左之通。御馬奉行指遣之。

御乗初御馬毛附

鶴川鹿毛

絹川源太郎

鳳至瓦毛

星野九右衛門

南保黒

保田仙次郎

以上

正月六日。風俗に關する前田齊廣の意を人持組の士に傳ふ。

〔官私隨筆〕

正月六日

組中は奥村  
伊豫守の事  
なり

御ケ條の大  
略は文政六  
年十二月十  
七日の條に  
掲ぐ

一、前月二十九日御用番演述之趣、其所に記置候通に候處、今夕齋藤源之丞罷越、舊臘は春に成候ても差急ぎ人持中へ可申渡様之趣に而も無之處、昨日御側御用人より演述之趣有之、早速組中申渡可然旨に候間、其心得可仕旨。依而御側御用人舊臘演述之趣書取、一紙被差越候間、此趣を以組中并甲斐守殿組中へ可申談旨。  
右御ケ條書之大略左之通に候。

正月六日。藩侯の入國に供奉する者の服装等に就いて令す。

〔御觸拔書〕

今般御入國に付御供之人々等、旅中之器財・着服等粧候儀堅可致禁止候。見苦敷儀御貪着無之候條、有來之品相用ひ可申候。都而享和二年御入國之節之振合に相心得、猶又文政三年格別御省略之儀等段々被仰出置候間、諸事令省略、聊費用之筋無之様相心得、餞別を合參會を企、或者品物送候儀堅可指止儀等、尤無違失相守可申事。

右之通嚴敷可申渡旨被仰出候條、被得其意、組・支配之人々へ可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配は茂可申渡旨可被申談候事。  
右之趣可被得其意候、以上。

正月六日

長 甲斐守

前田修理

正月七日。前田齊廣盲人救濟の爲に銀子を下附し、及びその生業に關して教諭す。

〔諸事留牒〕

正月七日

一、左之通御親翰、以神戸藏人月番は被成下。

舊冬馬廻頭初相招き、心得之儀追々及教諭候。今般は念頃に申示候故、何れも尤に承り請け候躰にて、組・支配之平士に至る迄も格別會得之様子に候。然ば右教諭之趣實心に會得候上、町家之外はごぜ・座頭を爲立入候者は無之事に候。右に付而は是迄琴・三味線を以すぎはひといたし罷在候者共、必至と可及難儀候條、今般格別之存寄を以、右之者共救之ため銀二百枚相渡、且近年右之者共困窮に依而、貸米申付候返上米二口有之由に候條、右二口之分とらせ切に可申付候條、此段算用場奉行・町奉行は可被申渡候。萬一彼等より救之儀願出候様に相成候上に而は不可然候條、早々此趣可被申渡候。且又右之序に付申出候。琴・三味線を以すぎはひといたし罷在候旨は、他國を相望み申者も有之候はゞ、勝手次第差遣可申。將又郡方よりも盲目多く城下へ出、琴・三味線之業を以すぎはひといたし候者不少躰に候間、已後は



郡方之分は於在所々々琴・三味線之外、盲目相應之産業を相勵ませ、城下に出候儀は可爲無用候。近頃は別而座頭官に進み候儀多く有之躰にも候間、以後猥に不相成様嚴重可申渡、左様之望有之者は、他國の出官に進み候儀は勝手次第、重而御國の不入様可有之事に候。右之趣町奉行の嚴重可被申渡候、以上。

正月七日

村井又兵衛殿

本文之趣追而加賀守可達聽候。

右之趣に付、前條は今日申渡有之、後之御ケ條は指續一兩日中申渡有之候筈之事。

正月十四日。金澤に地震あり。

〔官私隨筆〕

正月十四日

一、今朝四時前地震尋常よりは強くゆり候付、即刻竹澤御殿へ罷出、一木逸角相招相伺御機嫌、御様子相尋候處、益御機嫌能被爲入候由也。御序に可申上由に付退出。

右之後今日中夜へかけて三・四度もゆり候由。十五日夕も一度有之、其夜もゆり候由也。

正月十九日。前田齊廣能を演ず。

〔諸事覺書〕

正月十九日

一、今日竹澤御殿に而御能被遊、各拜見被仰付候條、常服に而五時前罷出候様、一昨日土佐守より廻狀有之。各同刻より罷出、堀久左衛門を以御禮申上。同半時頃見物所は相廻候様同人申聞候付、何茂罷出拜見、暮頃御能相濟候付、大地縫殿左衛門を以御禮申上、退出之事。

御番組

鶉 祭 權兵衛 知 章 中之助 卒都婆小町 御

鶴 他龜次郎様 羅生門 二源太 春日龍神 御

桶 酒 蟹山伏

正月廿一日。今日以後前田齊廣人持組の士を召して教諭を加ふ。

〔諸事覺書〕

正月廿一日

一、今度諸頭一統に被仰出候御趣意之趣、猶又組頭へ被仰出候筋も有之。依之人持之人々追々竹澤御殿に被召、兩組頭立會、御趣意之趣申述、猶又以來人々之心得方をも承り、とくと

加賀藩史料 第十三編 文政七年

教諭を加候様被仰付。當月廿一日より相始、其節年寄中、御家老之内一人充繰々相詰候様被仰出候間、其心得に而可罷出候。何日々と申儀は御側御用人より可申來候。刻限は九時より可罷出候。越後屋敷出席日には定刻退出より可罷出筈に候旨、土佐守より内藏助の演述有之候事。

右に付今日は又兵衛罷出候筈に候。併若年寄方に而は役支配之者に爲申聞候筋も有之候付、先右御趣意通申述方も承度ものと遂示談候付、其段土佐守へも申達、今日又兵衛罷出候節織江儀も罷出承り申度段、大地縫殿左衛門迄以執筆申遣候處、即申出候處被聞召届候。勝手に罷出候様被仰出候付、織江儀も又兵衛一集に竹澤御殿の罷出、委細承り七半時頃相濟候付、席において一木逸角を以御禮申上候處、御尋之品も有之、夫々御請申上退出候事。但、以後先二日置に有之由候事。

正月廿三日。幕府、前田齊泰に本年三月を以て就封の暇を賜ふべき意を告ぐ。

〔諸事留牒〕

二月七日

一、當七日御弘左之通。

二月七日の御弘は金澤に於てなり

御住居は前田齊廣のなり

今般御住居向御普請茂被仰付度、其上被は無御據趣御座候に付、御格別之趣を以一先御暇之儀御願之處、前月二十三日松平和泉守殿の聞番被召出、御願之通當三月中御暇可被下候旨被仰渡、重き御願之筋早速被仰渡、難有御仕合思召候。此段何茂の可申聞旨、拙者共迄以御書被仰下候事。

正月廿七日。前田齊泰入國の際努めて費用を節すべきことを告ぐ。

〔諸事留〕

正月廿七日

一、左之通一統觸有之。付札、組頭の

當春御入國之儀、享和二年之御振に者候へども、御勝手向御急迫至極之上、去々年以來不時御物入打續、彌増御急迫候條、御行列立之外者、御先例に不拘、成限り御省略之儀遂僉議、少も御費之筋無之様可相心得候事。右之趣被得其意、諸頭申談、一統不相洩様申渡候事。

正月

正月。前田齊泰の入國に供奉する諸士以下に特に金子を貸附することを

告ぐ。

〔諸事留〕

付札、組頭に

當春御入國御供之人々難澁之躰粗相聞え候。行粧等省略之儀も被仰渡候へども、御在府中御慶事も打續、格別御用多烈敷相勤、失脚茂相懸り、且御供道中之儀者何廉入用茂相増、彼是可爲難澁儀に候。御上御勝手向御逼迫至極之上、去々年以來不時御物入相續、別而當時御急迫に而、御貸渡等之御沙汰難被及御時節に候へども、一統難澁之儀も無據事故、格別之趣を以御供人一人扶持に金一兩宛御貸渡、足輕以下に者、一人に一兩二朱宛御貸渡被成候。御急迫中右之通被仰付候儀候間、致勘辨、旅用不指支様相心得御供可仕儀肝要候事。右之趣被得其意、組、支配之人々可被申渡候。諸頭中演述、組等之面々にも申聞候様可被申談候事。

正月

正月。大小將横目等の江戸往來の際持鍵を一筋に限ることを定む。

〔御親翰帳之書拔〕

文政七年正月

一、御大小將横目江戸御供之節、自分知八百石以上は道中鍵二本爲持、右以下は鎗一本爲持、且交代等に而罷越候節は、知行高に不拘都而二本爲持申候。頭役之儀は知行高に不拘、其役向に寄、道中鍵二本或は三本爲持候御定も御座候所、御大小將横目御供道中に限り、知行高に寄鍵數相違仕候儀は、先年より被仰出等も見當り不申由。且鍵一本に而は、若故障等有之加修覆罷在候而は、指支之筋等申立、以來知行高に不拘二本爲持申度旨等、竹澤御殿において相伺候に付、被仰出之趣爲承加、寫御渡之旨被仰出候事。

但、萬端僭上等之儀も追々御改被遊候儀に付、道中行粧等之儀もいかにも事輕く相心得可申事に候。御横目之儀は、諸向之目當にも相成候儀に候間、以來御供道中并交代等之節も、知行之高下に不拘、鎗一本爲持可申。於道中損候節指支之儀申立候へ共、左様之儀申立候時は、二本・三本に而も同様成事。畢竟右様之申聞はいまだ習俗之殘餘に被思召候旨等、段々被仰出候事。

一、右に付御使番等鍵一本爲持候儀可申渡趣伺之上、知行高に不拘鍵一本爲持候儀、左之人々に申渡。

御使番 御臺所奉行 御細工奉行 頭並 御表小將横目 御大小將横目

一、右夫々支配頭へ爲承知寫相渡。

一、御横目并御奥小將横目は當時缺役に候間、追而被仰付次第可申渡。  
御馬廻頭・御小將頭・組御番頭  
右は八百石以上之平士に而も、交代等之節第一本爲持可申旨被仰出候條、夫々可申渡旨申渡候事。

〔典制彙纂〕

御使番 御臺所奉行 御細工奉行  
頭 並 御表小將横目 御大小將横目 各通

近年風俗等之儀段々被仰出、萬端僭上等之儀も追々御改被遊候儀に付、道中行粧等之儀も事軽く可相心得事候。依之以來各御供交代等之節も、知行之高下に不拘第一本爲持可申候。此段可申渡旨被仰出候條、可被得其意候事。

正月

正月。兩茶屋町及び川上芝居に武士を立入らしむべからざることを告ぐ。

〔兩茶屋町一件〕

付紙、茶屋方・芝居方主附肝煎

兩茶屋町並川上芝居園内へ、武士家之男女立入申候は難相成趣之處、是迄心得違之者不少

候。尤先々之者町家躰に仕成立入申儀は、其人之不埒に候得者、茶屋商賣人等之如才は無之譯に候得共、兼而知合之族、當時慥に奉公人と申儀、園内之者も承知いたしながら、遊樂等進込爲立入候儀は有間敷致方に候條、會得違不致様急度可申渡置候。若以後奉公人等致合躰、名目を替、園内へ爲立入、其品於相顯は、園内之者共も可爲越度候。此段嚴重可申渡事。

文政七年申正月

正月。金澤に於ける座頭・替女の人數を上申す。

〔國事雜抄〕

覺

- 一、檢校 九人
- 一、勾當 十四人
- 一、衆分より無官迄 百四十人
- 一、百六十三人
- 一、ござ 二十一人
- 一、惣々百八十四人

右金澤中之座頭等人高如此御座候事。